平成２７年度　文部科学省委託

「岡山県実践的安全教育総合支援事業」

報　告　集

岡山県教育委員会・新見市教育委員会・浅口市教育委員会・勝央町教育委員会

はじめに

平成２３年３月１１日の東日本大震災発生から、まもなく５年の月日が経過しようとしています。死者、行方不明者１万８千人以上にものぼる未曾有の被害は、私たちに防災への意識を大きく変化させました。

本年度は、９月に関東・東北地方で台風の影響による洪水被害が発生するなど、水害、大雪、火山噴火、竜巻等による甚大な被害が全国各地で発生しました。大災害は、どの地域にも起こりうるとの危機意識を持ち、今後更なる取組を加速する必要があります。本県においても今後高い確率でおこると言われている南海トラフ地震の発生により甚大な被害が想定されており、防災対策は喫緊の課題となっています。

また、平成２４年４月京都府亀岡市における登校中の児童等が死亡する交通事故、昨年度７月に倉敷市で下校中の児童が連れ去られる事件が発生するなど、児童生徒等が被害に遭う事件・事故が後を絶たないこと、平成２５年１２月には、自転車の通行方法について道路交通法が改正・施行されたことなどから、通学時の安全確保のための体制を整備するとともに交通安全や防犯に対する教育の充実が求められています。

このような中、本県では文部科学省の委託を受け、今年度８校園をモデル校に指定し、児童生徒等が主体的に行動でき、自分の身は自分で守る態度を育てるための指導法の開発や地域、保護者、関係機関等との連携のあり方について専門家等アドバイザーの指導・助言を受けながら学校園の特性や地域の実情に応じた実践を行いました。

特に、今年度、県内の高校生が東日本大震災における被災地を訪問し、災害ボランティア活動等を体験するとともに、震災遺構や現在の復旧・復興状況を実際に視たり、聞いたりすることを通じて、「自助・共助」について学んできました。今後、これら経験した内容等を県内高校生等に伝えてもらうことで、防災に対するさらなる意識の高揚につなげて参ります。

本書は、これらの取組実践について指導案や実施要項、指導資料を掲載し、とりまとめています。各学校園におかれましては、本書の実践活動を参考とし、今後の安全教育・安全管理について一層の推進をお願いいたします。

最後になりましたが、本事業の実施にあたり、モデル校園及び関係教育委員会の関係者の方々が、熱心にお取組みいただきましたことに対し、深く感謝申し上げます。また、学校防災アドバイザーとして、御多用の中、丁寧な指導助言を賜りました岡山理科大学特担教授　西村敬一先生、岡山大学教授　鈴木茂之先生、兵庫県立大学准教授　木村玲欧先生、共立女子大学教授　加藤令子先生、岡山地方気象台関係各位、また、通学路安全対策アドバイザーの岡山大学准教授　橋本成仁先生に心から御礼申し上げ、挨拶とさせていただきます。

平成２８年２月

岡山県教育庁保健体育課
課　長　　福本　和宏

Ⅰ　平成２７年度「岡山県実践的安全教育総合支援事業」取組概要

Ⅰ　平成２７年度「岡山県実践的安全教育総合支援事業」取組概要

１　趣旨

東日本大震災及び台風・集中豪雨等による自然災害、登下校中の子どもが巻き込まれる交通事故、さらには、学校内外において不審者による子どもの安全を脅かす事件などが数多く発生している。

これらの教訓を踏まえ、児童生徒等自身に安全を守るための能力を身に付けさせる安全教育の充実や児童生徒等の生活の場である学校の安全管理体制の充実が求められている。このため、防災教育を中心とした安全教育の指導方法や教育手法の開発・普及、通学時を含めた学校における児童生徒等の安全確保体制の構築・普及、学校外の専門家による指導・助言を行うことにより、学校における安全教育・安全管理の充実を図る。

２　事業概要

防災に関すること

（１）実施方法

①新見市に委託し、山間部にある２校園について防災に関する取組を推進する。

②浅口市に委託し、海岸沿いに隣接する３校園について防災に関する取組を推進する。

③県立学校については、２校を指定校として県教育委員会が選定し、防災に関する取組を実施する。

④県教育委員会は、事業の円滑な実施を図るため、「推進委員会」を設置する。

（２）モデル校園（防災に関する取組７校園）

〇新見市立本郷小学校

〇新見市立本郷幼稚園

〇浅口市立寄島中学校

〇浅口市立寄島小学校

〇浅口市立寄島幼稚園

〇岡山県立備前緑陽高等学校

〇岡山県立岡山西支援学校

（３）実施内容

①防災に関する指導方法等の開発・普及のための支援事業の実施

児童生徒等の安全確保を推進するため、「主体的に行動する態度」を育成するための教育手法や緊急地震速報等の防災に関する科学技術等を活用した避難行動に係る指導方法の開発・普及を行う。

＜実践例＞

〇教科や特別活動等、学校の教育活動全体を通じた防災教育の展開

〇緊急地震速報器の設置と緊急地震速報音等を活用した避難訓練方法の開発

〇地域や近隣の学校園との合同避難訓練や避難所開設訓練

〇保護者との引き渡し訓練

②学校防災アドバイザー活用事業の実施

県教育委員会が委嘱した大学教授や防災専門関係者などの「学校防災アドバイザー」を活用し、各学校・地域等に対して「危機管理マニュアル」や「避難訓練」などに対する助言や指導、地域の防災関係機関との連携体制の構築を図るために行う。

＜実践例＞

○危機管理マニュアル作成に関する研修会

○「教科」「特別活動」等における「防災学習」「避難訓練」における助言

○行政・学校・地域との連絡体制構築のための協議会の開催

③災害ボランティア活動の推進・支援事業の実施

児童生徒等が支援者としての視点から被災地への災害ボランティア活動や災害ボランティア学習をすることにより安全で安心な社会づくりに貢献する意識を高める教育手法の開発・普及等を行う。

＜実践例＞

○「高校生地域防災ボランティアリーダー養成研修」（県教育委員会主催）を実施

○「被災地における防災ボランティア研修」（県教育委員会主催）を実施

交通安全・防犯を含む生活上の安全に関すること

（１）実施方法

①勝央町に委託し、交通安全・防犯を含む生活上の安全に関する取組を推進する。

②県教育委員会は、事業の円滑な実施を図るため、「推進委員会」を設置する。

（２）モデル校園（交通安全・防犯を含む生活上の安全に関する取組１校）

○勝央町立勝央北小学校

（３）実施内容

①地域の関係機関・関係団体・住民・保護者との連携指導方法等の開発・普及

②通学路安全対策アドバイザー活用事業の実施

＜実践例＞

交通安全に関すること

○交通安全の意識や技能を高めるための教育手法の開発

○合同点検等の安全に確保する体制の構築（学校・警察・道路管理等）等

防犯を含む生活上の安全に関すること

○防犯の意識や技能を高めるための教育手法の開発

3　推進委員会の設置について

（１）防災に関する推進委員

所　　属	役　　職	氏　　名	備　考
岡山理科大学生物地球システム学科	特担教授	西村　敬一	学校防災アドバイザー
岡山大学理学部自然科学研究科	教授	鈴木　茂之	学校防災アドバイザー
共立女子大学看護学部	教授	加藤　令子	学校防災アドバイザー
兵庫県立大学環境人間学部	准教授	木村　玲欧	学校防災アドバイザー
岡山地方気象台	防災気象官	井上　達二	学校防災アドバイザー
岡山県危機管理課	主任	原　耕平	
岡山県土木部防災砂防課	総括副参事	山本　哲也	
新見市教育委員会学校教育課	主幹兼指導係長	竹元　渉	
浅口市教育委員会学校教育課	課長補佐	藤本　真砂子	
岡山県立備前緑陽高等学校	教諭	野上　浩史	
岡山県立岡山西支援学校	教頭	谷本　智恵子	

（２）交通安全・防犯を含む生活上の安全に関する推進委員

所　　属	役　　職	氏　　名	備　考
岡山大学大学院環境生命科学研究科	准教授	橋本　成仁	通学路安全対策アドバイザー
岡山県県民生活部くらし安全安心課	総括参事	難波　竜輝	
岡山県県民生活部くらし安全安心課	総括参事	入江　一男	
岡山県警察本部交通規制課	課長補佐	森本　隆弘	
国土交通省中国地方整備局岡山国道事務所交通対策課	課長	田中　弘司	
岡山県土木部道路整備課	総括副参事	安原　由純	
岡山県警察本部生活安全部生活安全企画課	課長補佐	杉田　理佳	
勝央町教育委員会教育振興部学事班	主事	木本　勝士	

（３）事務局

岡山県教育庁保健体育課	課長	福本　和宏	
	副課長	小川　泰永	
	総括副参事	小林　圓裕	
	指導主事（主任）	松村　和憲	

（４）会議及び成果発表会

実施時期	実施内容	参加者数
６月９日	第１回防災に関する推進委員会 事業概要説明、モデル校園の事業計画、質疑応答等	出席者 12 名
６月 10 日	第１回交通安全・生活上の安全に関する推進委員会 事業概要説明、モデル校の事業計画、質疑応答等	出席者 11 名
１月 22 日	岡山県実践的安全教育総合支援事業成果発表会 岡山県教育委員会主催により、成果発表会を開催	
２月２日	防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業全国成果発表会への派遣（岡山県の取組について全国発表）	県教育庁保健体育課から１名参加
２月３日	第２回防災・交通安全・生活上の安全に関する推進委員会 （事業報告、質疑応答、評価助言等）	出席者 18 名
２月末	岡山県実践的安全教育総合支援事業報告集の作成・配布 県下学校園、教育委員会、関係教育機関等へ配布	

４　アドバイザーの派遣実績

（１）学校防災アドバイザーの派遣実績（全１２回）

派遣日	派遣講師名	派遣先	内　　容
６月 23 日	岡山理科大学 特担教授　西村敬一	ふれあい交流館 サンパレア	第１回避難訓練の指導助言
６月 30 日	共立女子大学 教授　加藤令子	岡山西支援学校	全体計画についての指導助言
７月 14 日	岡山地方気象台 防災気象官 井上達二	備前緑陽高等学校	教職員防災教育研修での講演
８月 24 日	岡山大学 教授　鈴木茂之	新見市立本郷小学校	新見地域の地形や地盤と防災対策についての講演
８月 24 日	共立女子大学 教授　加藤令子	岡山西支援学校	防災教育についての講演
10 月１日	岡山理科大学 特担教授　西村敬一	ふれあい交流館 サンパレア	第２回避難訓練に向けての指導助言
10 月９日	兵庫県立大学 准教授　木村玲欧	備前緑陽高等学校	幼小高、地域合同避難訓練の指導助言
10 月 22 日	岡山地方気象台 防災気象官 井上達二	浅口市立寄島中学校	避難訓練の指導助言
11 月 13 日	岡山大学 教授　鈴木茂之	新見市立本郷小学校	防災授業についての講評・助言

12 月 10 日	岡山地方気象台 防災気象官 井上達二	新見市立本郷小学校	避難訓練の指導助言
12 月 15 日	岡山地方気象台 防災気象官 井上達二	備前緑陽高等学校	防災授業についての講評・助言 防災シンポジウムでの説明
1 月 12 日	共立女子大学 教授　加藤令子	岡山西支援学校	1 年間の事業取組の検証

（２）通学路安全対策アドバイザーの派遣実績（全４回）

派遣日	派遣講師名	派遣先	内　　容
7 月 27 日	岡山大学 准教授　橋本成仁	勝央町公民館	全体計画についての指導助言
8 月 28 日	岡山大学 准教授　橋本成仁	勝央町立勝央北小学校区、 勝央町立勝間田小学校区	通学路合同点検での指導助言
10 月 13 日	岡山大学 准教授　橋本成仁	勝央町立勝央北小学校	地域安全マップの作成のための フィールドワーク及び作成手法 に対する指導助言
10 月 27 日	岡山大学 准教授　橋本成仁	勝央町公民館	危険箇所の対策案への指導助言

H27　防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業

趣旨・背景

東日本大震災及び台風・集中豪雨等による自然災害、学校内外において不審者による子供の安全を脅かす事件などが数多く発生している。これらの教訓を踏まえ、児童生徒等自身に安全を守るための能力を身に付けさせる安全教育の充実や児童生徒等の生活の場である学校の安全管理体制の充実が求められている。

事業概要・イメージ

「自らの命を守り抜こうとする主体的に行動する態度」「安全で安心な社会づくりに貢献する態度等を育成するとともに、学校の安全管理体制や地域住民・保護者・関係機関との連携体制の構築をさらに進める。

文部科学省 → 岡山県教育委員会
■実践地域・学校の指定

■地域の関係機関・関係団体・住民・保護者との連携

モデル校　・新見市（本郷幼稚園、本郷小学校）
・浅口市（寄島幼稚園・寄島小学校・寄島中学校）
・県立備前緑陽高校
・県立岡山西支援学校

◆防災に関すること

○各種情報ツールや防災に関する科学技術（緊急地震速報等）を活用した防災教育・訓練手法の開発
○学校待機及び引き渡し訓練や安否確認訓練等学校の安全管理体制の構築　等

○被災地へのボランティア活動の推進（高校生地域防災ボランティアリーダー参加者）

モデル校　・勝央町（勝央北小学校）

◆防犯を含む生活上の安全に関すること

○防犯の意識や技能を高めるための教育手法の開発

◆交通安全に関すること

○交通安全の意識や技能を高めるための教育手法の開発
○合同点検等の安全を確保する体制の構築

■専門家等アドバイザーの指導・助言

■成果発表会の開催等による普及　■実践的安全教育総合支援事業報告集での情報共有

成果

○優良な実践事例の学校及び学校の設置者による共有
○学校及び地方公共団体等による取組の増加　○防災教育を中心とした安全教育の質の向上

Ⅱ　防災に関する取組

１　新見市本郷小学校区

本郷小学校

本郷幼稚園・保育所

新見市本郷小学校区
（本郷小学校・本郷幼稚園）

教育委員会名：新見市教育委員会
住　　所：新見市新見３１０－３
電　　話：０８６７－７２－６１４６

Ⅰ　新見市本郷小学校区の概要

１　学区の概要と地理的・地質的な課題

新見市は岡山県の最北西端、三大河川の一つである高梁川源流域に位置し、北は鳥取県、西は広島県と隣接した自然豊かな山間地域である。

本郷小学校区は、市の南西部に位置し、学校東側には高梁川支流である本郷川が流れ、周辺部には急傾斜地が多くある。新見市防災マップによると、学区には急傾斜地の崩壊や土石流の警戒区域が多くあり地震や大雨の時には、土砂災害や河川の氾濫などが懸念される。過去には浸水の被害や急傾斜地での土砂崩れもあった。

地盤は谷底低地や山地が多く、地震が起こった場合、比較的ゆれにくい地域である。しかし、平成１２年に起こった鳥取県西部地震では、震度５強を観測し、強いゆれを経験したこともある。

２　学区で共通する防災教育上の課題

近年、台風や大雨による洪水、土石流を心配するものの、大きな被害を受けておらず、また地震に関しては、大きな地震の経験がほとんどなく、山間地域で津波の心配もないことから地域全体の防災に対する意識が低い。また、緊急地震速報への対応や緊急時の保護者への引き渡し等には課題も多い。

家庭で過ごしているときや将来、本市を離れて他地域で居住した場合での災害時などを想定すると、子どもたちには、発達段階に応じて自ら危険を回避し、自分の命を守るために主体的に行動することができる力を養うことが必要である。

Ⅱ　取組の概要

１　研究のポイント

（１）防災意識の高揚
　①専門の講師による研修の実施
　②防災教育研究大会への参加

（２）自ら危険を回避する力の育成
　①防災教育に関する授業実践
　②緊急地震速報を活用した避難訓練の実施

（３）保護者や地域への啓発
　①保護者参加の避難訓練及び引き渡し訓練の実施
　②防災教育だよりの発行

２　学区としての取組内容

（１）実践委員会の設置

①第１回実践委員会を７月１０日に開催し、小学校ＰＴＡ会長や市の危機管理担当者とともに、事業概要や各校園の取組内容、今後の方向性について情報交換を行った。参加者からは地域に起こった災害を振り返ることにより、身近なところでも災害が発生するという意識をもたせることや自ら危険を回避し、自分の命を守ることができる子どもの育成の大切さについて意見をいただいた。

②第２回実践委員会は、１１月１３日に開催し、同日実施した防災教育授業研究会での授業についての意見をいただいた。さらに幼小による合同避難訓練や保護者のへの引き渡し訓練のスケジュールや内容の確認及び改善点について意見を交わした。

③第３回実践委員会は、１２月１０日に開催した。同日実施した同時避難訓練、保護者のへの引き渡し訓練についての様子も踏まえて、今回の事業で得た成果や課題についての意見交換を行った。学校防災アドバイザーの方からの指導助言もいただいた。

（２）学校防災アドバイザーの活用

①８月２４日（月）
　講演：新見(哲多)地域の地形や地盤と防災対策について
　講師：岡山大学理学部自然科学研究科
　　鈴木　茂之　教授

新見地域の地震による災害では、南海トラフ地震では震度５弱程度、中国山地を震源とする地震では震源地付近で震度６程度に達する可能性があり、建物や家屋の倒壊、急傾斜地での落石、斜面崩壊の発生を指摘された。また、豪雨による災害では、落石、斜面崩壊、地すべり、土石流の発生を指摘された。特に哲多地区の通学路には、急傾斜地が多く、落石危険箇所、急傾斜地の把握が必要であり、沢の出口で土石流の危険がないか注意する必要があることについて指導を受けた。

②１１月１３日（金）

防災教育授業研究会

講師　岡山大学理学部自然科学研究科

鈴木　茂之　教授

本郷小学校６年生の学級活動で「災害時に自分達ができることを考えよう。」という学習が行われた。鈴木教授には、研究授業と研究協議に参加していただき、専門的立場から指導講評をいただいた。児童が自分達にできることを真剣に考えている姿に感心されていた。自助、共助の意識の高まりが感じられる授業であった。

③１２月１０日（木）

避難訓練・引き渡し訓練の視察

講師　岡山地方気象台

井上　達二　防災気象官

地震による避難をテーマにした授業、及び避難訓練の様子を踏まえて、井上気象官から指導助言をいただいた。地震はいつ起こるか分からず、自分で判断して避難し、自分の身を守る力を養っていく必要があるとの助言をいただいた。

（３）緊急地震速報を活用した合同避難訓練の実施

本郷幼稚園は高台に位置し、地震発生後、園近隣斜面に亀裂が発見され、第３避難場所である本郷小学校への避難を想定した合同避難訓練を実施する予定であったが、当日は雨天のため、それぞれの学校園での同時避難訓練となった。

本郷幼稚園では、緊急地震速報を受信後、園児が各教室の中心に集まり、頭と体を守る体勢「だんごむし」のポーズをとることができた。その後雨天のために遊戯室へ全員避難し、園長先生から「お・は・し・も」の約束の確認や訓練の様子について話があった。

小学校では、避難訓練を参観日に設定し、保護者も一緒に訓練に参加した。緊急地震速報を受信後、児童と保護者共に素早く教室の机の下に入り、自分の身を守る姿勢をとることができた。本来ならば第一避難場所の運動場への避難であったが、雨天のため体育館への避難となった。事後指導では、緊急地震速報に対しての一次対応や避難の仕方について校長先生と学校防災アドバイザーの井上達二先生から話や指導があった。

（４）引き渡し訓練の実施

本郷幼稚園、本郷小学校共に園児、児童を安全に保護者へ引き渡す方法について研究を進めた。スムーズな引き渡しができるように来校者カード、引き渡しマニュアルを工夫し、より実践的なものへと改善した。引き渡しについては保護者の理解と協力が不可欠である。参観日や防災だよりなどを通して丁寧に説明し、実施することができた。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）本事業の取り組み全体を通して、幼稚園、小学校の連携体制が強くなり、幼小一貫した教育を進める良い機会となった。特に、発達段階を考えた年間計画や来校者カード、引き渡しマニュアルについて幼小で共通理解を図りながら工夫改善をすることができた。

（２）学校防災アドバイザーによる教職員を対象とした防災教育の研修や防災をテーマにした授業研究会を開催したり、様々な場面を想定した避難訓練を複数回に渡り実施したり、さらに日頃から防災意識が高まるような環境を工夫したりすることによって、教職員、園児、児童の防災意識の高揚を図ることができた。

（３）学習発表会後の引き渡し訓練や参観日を利用した避難訓練、また防災だよりの作成、発行により保護者の防災に対する関心を高める良い機会となった。災害は学校園にいるときだけに起こるとは限らない。家庭で災害時にどう対応すればよいのかを考えるきっかけづくりができたと思う。

２　課題

（１）本事業では、幼小、保護者との連携を中心に研究を進めた。家庭や地域で災害が起こることを考えると、やはり地域との連携が大切であり、地域を巻き込んだ避難訓練などを実施して、地域全体で自助・共助・協働の力を育てる必要がある。

（２）来年度から引き渡し訓練を市内全ての学校でしなければならない。本郷小学校区の先進的な取組や成果を他の学校園に紹介し、新見市の防災教育が活性化するようにしていきたい。

新見市立本郷小学校

テーマ「自他の生命を尊重し、災害時に危険を回避する行動ができる児童の育成」

住　　所　：新見市哲多町本郷６７２
校 長 名　：上原　博久
電　　話　：０８６７-９６-２０１１

Ⅰ　学校（園）の概要

【学校の概要】学校規模・学校特色など

本校は新見市の南西部に位置し、児童数８９名、７学級の小規模校である。旧哲多町内の本郷小学校、花木小学校、宮河内小学校が統合して現在の本郷小学校となっている。

保護者、地域は学校教育への理解があり、協力的である。また、スポーツ少年団活動や社会教育団体との交流もさかんである。

【防災上の地理的・地質的な課題】

学校は東に本郷川が流れ、西には石灰質の山が迫るわずかな平地に位置している。過去には大雨のため本郷川があふれ運動場が水没したこともある。また、新見市防災マップによると、学区には「土砂災害警戒区域」として急傾斜地の崩壊や土石流の警戒区域があり、大地震や集中豪雨が発生した際には、落石や斜面崩壊あるいは浸水の恐れがある。

【防災教育上の課題】など

本校では、これまでも児童が自分で判断して避難したり職員が組織的な対処をしたりすることを避難訓練の中で行ってきた。その結果児童は訓練の際、自分で考えて素早く避難できるようになりつつある。しかし、知識や技能を身に付ける防災教育の取組は十分とはいえない。

また、緊急時の保護者との連絡や引き渡し方法は見直す点が多く、保護者や地域と連携しながら検討していく必要がある。

Ⅱ　取組の概要

１　研究のポイント

（１）児童・教職員の防災意識の高揚

①防災教育を推進するための環境整備

②学校防災アドバイザー等を活用した研修

③研究視察

（２）災害時に自ら危険を回避する行動ができる児童を育成する取組

①防災教育に関する指導内容の共通理解

②テーマに迫る防災教育の授業実践

③緊急地震速報に対応する避難の仕方及び児童を安全に保護者へ引き渡す方法等についての検討

２　取組内容

（１）児童・教職員の防災意識の高揚

①防災教育を推進するための環境整備

○防災に関する校内掲示

○図書館に防災図書のコーナーを設置

○防災教育だよりの発行

○防災標語の募集及び掲示

②学校防災アドバイザー等を活用した研修

○本郷小学校区防災教育研修会

期日　平成２７年８月２４日（月）

会場　新見市立本郷小学校

内容　「新見（哲多）地域の地形や地盤と防災対策について」

講師　学校防災アドバイザー
岡山大学理学部自然科学研究科
鈴木茂之　教授

③研究視察

○神戸発「生きる力を育み、未来へつなぐ」防災教育研究大会　参加

期日　平成２７年１２月１１日（金）
会場　神戸市立真野小学校　他

（２）災害時に自ら危険を回避する行動ができる児童を育成する取組

①防災教育に関する指導内容の共通理解

○防災教育年間指導計画の作成

②テーマに迫る防災教育の授業実践

○年間指導計画に基づいた防災教育（各学年）

○防災教育授業研究会の開催

期日　平成２７年１１月１３日（金）
会場　新見市立本郷小学校
内容　第６学年　学級活動
「災害時に自分たちができることを考えよう。」
指導講評　岡山大学理学部自然科学研究科
鈴木茂之　教授
岡山県教育庁保健体育課
松村和憲　指導主事

○防災マップの作成（第３学年）と全校への報告会の実施

○避難訓練の実施

・月に１度の避難訓練を実施した。業間休みや始業前に地震が起きたことを想定した避難訓練を行い、児童が自ら判断して避難行動がとれるよう指導を行った。

③緊急地震速報に対応する避難の仕方及び児童を安全に保護者へ引き渡す方法等についての検討

○引き渡しマニュアルの作成

○引き渡し児童・来校者カードの作成

○引き渡し訓練の実施

・１１月２９日　　学習発表会後に実施

○緊急地震速報に対応する避難訓練及び幼稚園・保育所と連携した引き渡し訓練の実施

・１２月１０日（木）
参観日に実施し、保護者とともに訓練を実施した。
＜内容＞
１３：３０～１４：００
緊急地震速報時の避難の仕方についての事前指導
１４：００～１４：３０
緊急地震速報時の避難訓練及び事後指導
１４：３０～１５：００
幼稚園・保育所と連携した引き渡し訓練
（雨のため、本郷小学校での引き渡しは中止）

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）児童・教職員の防災意識の高揚

○防災に関する校内掲示の作成や防災に関する図書の整備を通して、児童の防災に関する意識を高めることができた。

○保護者に対して「防災教育だより」を発行することで、防災に関する取組を理解してもらい、協力を得ることで、防災に関する意識を高めることができた。また、非常時の引き渡しの方法や緊急地震速報が出された時の対応等について保護者に周知することができた。

（２）災害時に自ら危険を回避する行動ができる児童を育成するための取組

○自ら危険を回避する行動ができる児童の育成に向けて、休憩時間や始業前に予告無しの訓練を行った。こうした訓練を重ねることで、児童は日頃から災害が起こったときの対応について考え、行動するようになった。

○防災教育の授業実践を通して、「災害によってどのような危険があるのか」、「そんなときにはどのように対応するのか」、「緊急地震速報がなったらどうするのか」といった基本的な知識を身に付けることができた。

○引き渡し方法を見直し、新たな方法で訓練を行ったり、幼稚園・保育所との連携した引き渡し訓練を計画したりすることで、保護者や地域と連携した防災訓練ができた。

２　課題

○引き渡し訓練で改善点も見つかったので、随時見直しをしながらよりよいものにしていく。

○防災訓練や防災教育を教育課程に位置付け、計画的に実施していくことで、児童の防災意識をさらに固め、自ら危険を回避することができる児童を育てていく。

○非常時の対応について、学校、保護者、地域がさらに連携して考えていく必要がある。

防災教育年間計画

	低学年		中学年		高学年	
ねらい	○災害に関心をもつことができるようにし、災害時の安全な行動について考えることができる。 ○災害により引き起こされる危険を感じ、大人や高学年の指示に従うなどして適切な行動がとれる。 ○災害時には自分で危険を回避し、大人との連絡ができる。		○災害について基本的な理解ができ、災害を防ぐための工夫について考えることができる。 ○災害により引き起こされる危険を感じ、自ら危険を回避する方法を考えることができる。 ○災害時に、家族や友達、周囲の人々と協力して危険を回避できる。		○災害の特性や防災体制について理解できる。 ○災害により引き起こされる危険を予測し、災害時には、自ら危険を回避する行動ができる。 ○災害時には、家族や友達、周囲の人々の安全に配慮し、他の人の役に立つ行動ができる。	
学年 / 領域	第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
教科 （総合的な学習）	（生活） 「ひろがれえがお」	（生活） 「レッツゴー町たんけん」 「もっと行きたいな町たんけん」 「つたえ合おう町のすてき」	（総合的な学習） 「安全マップをつくろう」	（社会） 「安全なくらしを守る」 「地域の発展に尽くした人々（山室軍平）」	（国語） 「百年後のふるさとを守る」 （社会） 「自然災害から人々を守る」 （理科） 「流れる水のはたらき」 「台風と気象情報」 （保健） 「自然災害に備えて」	（社会） 「わたしたちのくらしと政治」 （理科） 「大地のつくりと変化」 「自然とともに生きる」 （家庭） 「ともに生きる生活」 （総合的な学習） 「山室軍平について調べよう」
道徳	「あっあぶない」 （節度ある生活態度）	「いま、ぼくにできること」 （勤労）	「おじいちゃん、おばあちゃん、見ていてね」 （生命尊重）	「『もっこ』をせおって」 （勤労・社会への奉仕）	「命をいとおしんで ーかけがえのない命ー」 （生命尊重） 「一本松は語った」 （敬けん）	「土石流の中で救われた命」 （尊敬・感謝）
学級活動	「火事がおきた！」 ○身近なところで火災が起こる危険をがあることに気づき、基本的な火の取り扱いを知る。 ○火災の時の避難の仕方や経路を知る。	「地しんが来た！」 ○地震の時身の回りに起こる危険について知る。 ○自分の身を守る方法を考え、安全に行動できる方法を知る。	「大雨だ！」 ○地域に土砂崩れや土石流など大雨により危険が発生することを知る。 ○大雨の時安全に行動できる方法を知る。	「災害が起きたら」 ○地震が起きた時は、火災などの二次災害の危険があることを知り、安全に避難する方法を考える。 ○非常持ち出し袋など、非常時の備えについて知る。	「津波からにげる」 ○地震によって津波が発生することを知り、津波の危険から身を守る方法を考える。 ○津波が発生した時安全に行動できる方法を知る。	「災害と助け合い」 ○災害が起きたとき、どのようにすれば、周囲の人々と協力して、他の人の役に立つ行動ができるか考える。
行事　１学期	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災） ○宿泊研修	◇避難訓練（火災） ○修学旅行
行事　２学期	◇避難訓練（地震） 引き渡し訓練	◇避難訓練（地震） 引き渡し訓練	◇避難訓練（地震） 引き渡し訓練	◇避難訓練（地震） 引き渡し訓練	◇避難訓練（地震） 引き渡し訓練	◇避難訓練（地震） 引き渡し訓練
行事　３学期	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）	◇避難訓練（火災）

第6学年 学 級 活 動 指 導 案

平成２７年１１月１３日（金）　第５校時　６年教室　　指導者

１　題材名　　災害時に自分達ができることを考えよう
　　内容　（２）ーカ　心身ともに健康で安全な生活態度の形成

２　児童の実態と題材について

(1) 児童の実態

本学級の児童は男子８名、女子５名、計１３名である。健康や安全に気をつけて生活しようと意識し、教師などの指示は素直に聞こうとする児童が多い。しかし、健康や安全について、自分で考えてよりよい選択をし、自らの生活を改善しようと自主性を発揮できる児童は少ない。どちらかと言えば、あまり深く考えずに発言したり、他者の言動に安易に流されて行動してしまったりする傾向が見られる児童が多い。非常の場合に、冷静に考え行動する習慣を身につけさせたい。

災害を想定した避難訓練では、これまでの経験をふまえて、教師の指示がなくても適切な避難行動がとれる児童が多い。また、下級生に声をかけたり、先導したりしようとする、リーダーシップを発揮しようとする態度が見られる。しかし、状況に応じた思慮深い行動ができにくい面があり、常に状況を的確に判断し、適切な行動がとれるようにするために、さらに経験を積む必要がある。また、最高学年として、どのような態度が求められているのか考えたり、どのような行動が可能なのか考えたりする機会を増やしていく必要がある。

(2)題材設定の理由

６年生までに、いろいろな災害についての理解や、それに対する適切な避難行動について学習してきている。６年生では、それらの学習をふまえて、主体的に行動し、自らが災害時に人の役に立つ行動ができるにはどうすればよいか考えていきたい。

東日本大震災では、「釜石の奇跡」とも呼ばれる小学生の避難行動が話題になった。また、災害時および災害後の避難所等で、子ども達が進んで活動し、大人を逆に元気づける働きをしたことも報道等で話題になった。子どもだからといって、「助けられる側」に甘んじているのではなく、状況が許せば「助ける側」として活動できることは、非常に大切なことである。年齢にかかわらず、行動できる人が行動し、先導者となることで、災害による被害を軽減できることは、被害日本大震災の教訓の一つとなっているからである。

本校では、避難訓練などの際に、高学年としてできることは何かを考えさせ、自分にできることを積極的に行った児童を称揚するなどして、よりよい災害時の行動を指導してきた。高学年として自分にできる貢献をするという意識は、伝統として児童の意識に根付いてきている。自分たちにも何かできるはずという意識をさらに広げていくため、災害発生時、避難行動時だけではなく、災害後の被災生活の中でも、子ども達が活躍した事例を紹介し、災害発生時に自分たちに何ができるか考えさせることで、社会や人の役に立つ行動をしたいと考え、実践できる児童を育てていきたい。

3　評価規準

集団活動や生活への 関心・意欲・態度	集団の一員としての 思考・判断・実践	集団活動や生活についての 知識・理解
・災害時の避難や生活について関心をもち、災害時に自分達に何ができるか考えようとしている。	・災害時には、みんなで助け合って避難したり生活したりする必要があることを知り、自分たちに何ができるか考える。	・東日本大震災における小中学生の働きについて調べ、小中学生でも貢献できることを知る。

4　本時のねらい

災害時の避難や被災生活の中で、小中学生が自主的に活動した例を調べることを通して、災害時に自分達ができることを考えることができる。

5　事前の活動

日　時	児童の活動	教師の指導・支援	学習評価
9月18日 10月29日	○避難訓練を行い、自分の行動を振り返る。	○避難訓練の反省を行い、適切な避難行動がとれたか、確認する。 ○高学年として、リーダーシップがとれた事例を発表させ、称揚する。 ○どのような行動ができたか考えさせ、次の避難訓練につなげさせる。	○高学年として自分ができる行動を考え、進んで行うことができたか。
10月30日	○災害時に自分が復興支援に参加したいかどうかアンケートに答える。	○災害時に復興支援のボランティアに参加したいかどうかのアンケートを行う。 ○学級活動で東日本大震災の被災地の結果と比較させるために集約する。	○自分でできることをしようとしているか。
11月6日	○ＤＶＤ「釜石の奇跡」を視聴し、最善の避難行動（勇気ある行動）をとることが、自分の命だけでなく他の命を救うこともあることを知る。（道徳）	○最善の避難行動をとることが、自分だけでなく他の人の命を守ることにつながることもあることに気づかせる。	○最善の避難行動をとることが、自分だけでなく他の人の命を守ることにつながることもあることに気づくことができたか。

6　本時について

	学習活動	教師の指導・支援	学習評価
導入	1　ＤＶＤ「釜石の奇跡」の視聴を想起する。 2　東日本大震災で被災した子ども達の意識調査や東日本大震災で活動した小中学生の新聞記事等を見て、課題意識をもつ。	○ＤＶＤ「釜石の奇跡」の視聴を想起させ、最善の避難行動が、他の人の命をも救うこともあることを確認させる。 ○東日本大震災で被災した子ども達の意識調査を提示し、被災した子ども達のの参加意識が非常に高いことを確認させる。 ○東日本大震災で活動した小中学生の新聞記事等を提示し、課題意識をもたせる。 災害時に自分達ができることを考えよう。	
展開	3　「震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト報告書」から、小中学生の活動を調べ発表する。 4　感想を発表する。	○「震災後に中高生が果たした役割の記録プロジェクト報告書」からの抜粋を配布し、どのような活動が行われたか、それに対してどのような感想をもっているのかワークシートを使って調べさせる。 ○調べた内容を発表させる。 ○調べてみて分かったこと、気づいたこと、思ったことを発表させる。	
終末	5　ワークシートに自分にもできることを記入し発表する。 6　学習のまとめを書く	○自分にもできそうだと思うことをワークシートに記入させ、発表させる。 ○どのような小さなことでも、地域や人の役に立ち、周囲の人を励ましたり勇気づけたりすることを確認させる。 ○学習のまとめを書かせ、発表させる。 ○実践への意欲付けになるような言葉かけを行う。	○災害時には、みんなで助け合って避難したり生活したりする必要があることを知り、自分たちに何ができるか考えることができたか。 （ワークシート、発言）

7　事後の活動

日　時	児童の活動	教師の指導・支援	学習評価
12月8日	○避難訓練・引き渡し訓練後家族と災害時の行動について話し合う。	○ワークシートを配布し、家族で災害時の行動について話し合い、自分にできることを考えさせる。	○災害時の自分の行動やできることについて考えているか。
12月9日	○災害時に自分が復興支援に参加したいかどうかアンケートに答える。	○災害時に復興支援のボランティアに参加したいかどうかのアンケートを行う。 ○前回の結果と比較し、今後の活動に生かす。	○自分でできることをしようとする意識が高まっているか。

意　識　調　査

名前（　　）

自分のまちに多くの人が避難しなければならないような大きな災害が発生したとします。

1　あなたは自分のまちのために、何かしたいと思いますか？

はい　　いいえ

2　「はい」の人は、どんなことがしたいと思いますか？

〈東日本大震災被災地の子ども達の意識調査〉

HOV

Hear Our Voice①

子どもたちの声

～子どもの参加に関する意識アンケート調査～

Save the Children JAPAN

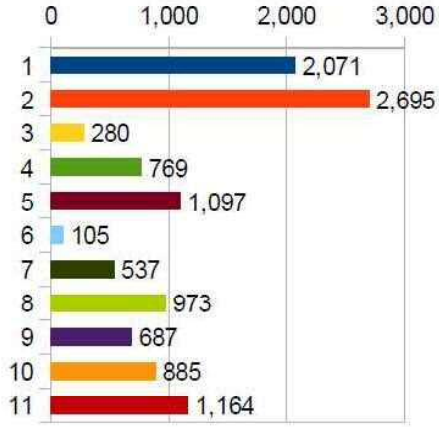
公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

Q2 あなたは自分のまちのために、何かしたいと思いますか？

	総数	比率
はい	9,617	87.4%
いいえ	1,391	12.6%
全体	11,008	100%

「はい」の人は、どんなことがしたいと思いますか？（自由回答のため、複数回答・無記入回答あり）

	総数
1.ボランティア	2,071
2.ゴミ拾い・そうじ	2,695
3.あいさつ	280
4.元気づけたい	769
5.自分にできることなら何でも	1,097
6.芸能・伝統活動	105
7.募金	537
8.手伝い	973
9.環境活動	687
10.元に戻したい	885
11.その他　※下記に抜粋	1,164
全体	11,263



※「その他」に寄せられた回答より（誤字・脱字もそのまま転記）

・自分よりおさない児童館の子ともたちのめんどうをみる。（小５男）

・すこしずつでも、１歩前をむいて、がんばりたいです。 海のそうじなどをしたいです。（小５女）

・大人は色々な事で、大変だと思うから、子どもを中心とした、元気を、町の地域の人達にとどける取り組みがしたい。（中１男）

・将来のことだが、市役所の職員になって直接再建に加わりたい。（高１男）

http://www.savechildren.or.jp/scjcms/sc_activity.pj?d=434

セーブ・ザ・チルドレンＨＰ　スタッフブログ内

20120705_HOV1.pdfより一部抜粋

姉妹で運ぶ物資と笑顔

竹籠背負い高台へ

壁新聞でファイト!

気仙沼 避難所の小中学生 毎日制作

「暗い顔を明るくしたい」

東日本大震災

東松島 避難所ボランティア

「死んだ家族のためにも」

中学生、掃除や運搬に没頭

避難所 笑顔で切り盛り

仙台 中学生ボランティア 奮闘

被災者「頑張りに救われる」

「東日本大震災　心をつなぐニュース」
池上彰・文藝春秋編　より

子どもからの投稿（原文）

タイトル（あなたの活動にタイトルをつけるとすると）	投稿者お名前	年齢
食べ物の配布		13

いつ頃 ※○月～○月頃	どこで ※○○県○○市・町（住所など詳しいことは書かなくて大丈夫です）	だれと ※どんな人と、何人で一緒にやりましたか？（だいたいの人数でよいです）
5月～8月	宮城県塩竈市	中学校の先輩ちと4人で。

①どんな役割を果たしましたか？（実際に行ったことを教えてください）
食事後の食器の片付けやお菓子などの配布などです。

②なぜ、それをやろうと思いましたか？（きっかけや、理由、どんな気持ちで始めたか教えてください）
先輩が自分から進んで、過疎、衰退してきた地域のために接する姿がかっこよくて憧れました。「自分も、先輩のように自分から進んでやりたい」と思ったからです。

③やってどう思いましたか？（やってみてどんなことを感じたのか、気持ちや思ったことなどを教えてください）
喜んでいる地域の方々の笑顔を見ることができるなら、続けたいと思いました。

④周囲の反応はどうでしたか？（○○さんに、「□□□」と言われた、などありましたか）
[redacted]さんに「ありがとう。えらいね。」と言われてうれしかったです。

⑤やってよかったと思うことなど、教えてください。（やってみて何か気づきや発見がありましたか）
誰かにほめられたから、喜んでもらいたいからなどを考えずに自分から進んでものごとをすれば、いいことが沢山あるということがわかりました。

※書ききれない場合は、裏面に書いてください

避難所であったほうがよかったもの	応援があったらやりやすかったこと
旅行、あみど、ゆたんぽ、ふとん、冷蔵庫、救急箱	海浜清掃、そうじの手伝い、ライブ、コンサートなど

子ども・おとなからの投稿（原文）

タイトル（あなたの活動にタイトルをつけるとすると）	投稿者お名前	年齢
大丈夫だよ		12

いつ頃 ※○月～○月頃	どこで ※○○県○○市・町（住所など詳しいことは書かなくて大丈夫です）	だれと ※どんな人と、何人で一緒にやりましたか？（だいたいの人数でよいです）
3月11日	福島	

①どんな役割を果たしましたか？（実際に行ったことを教えてください）
地震で怖がっている人2人をはげました。泣いている人もいたからみんなで歌を歌ってあげた。

②なぜ、それをやろうと思いましたか？（きっかけや、理由、どんな気持ちで始めたか教えてください）
みんなに元気になってほしかった。心を一つにして行動したかった。

③やってどう思いましたか？（やってみてどんなことを感じたのか、気持ちや思ったことなどを教えてください）
元気になってくれているのを見て、いいことをしたのかなと思った。

④周囲の反応はどうでしたか？（○○さんに、「□□□」と言われた、などありましたか）
私たちが歌っている姿を見て、みんな歌ってくれた。

⑤やってよかったと思うことなど、教えてください。（やってみて何か気づきや発見がありましたか）
みんなで一つになってはげました。歌でみんなの心を一つにするんだなと思った。

※書ききれない場合は、裏面に書いてください

避難所であったほうがよかったもの	応援があったらやりやすかったこと
小さい子供用の遊び道具	

Save the Children JAPAN
公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

「震災後に中高生が果たした役割の記録
プロジェクト報告書」より一部抜粋

学級活動ワークシート　　名前（　　）

災害時に自分達ができることを考えよう。

1　資料を見て、東日本大震災で、子ども達がどんなことをしたか調べよう

活動したこと	本人の感想・周囲の人の反応

2　災害の時、自分にできそうなことや、したいことを書きましょう。

3　今日の学習のまとめを書きましょう。

引き渡しマニュアル（手順）

◎事前にしておくこと

・保護者に引き渡しに来る人の名前を用紙「引き渡し児童・来校者カード」に書いて提出してもらう。（毎年度初め）

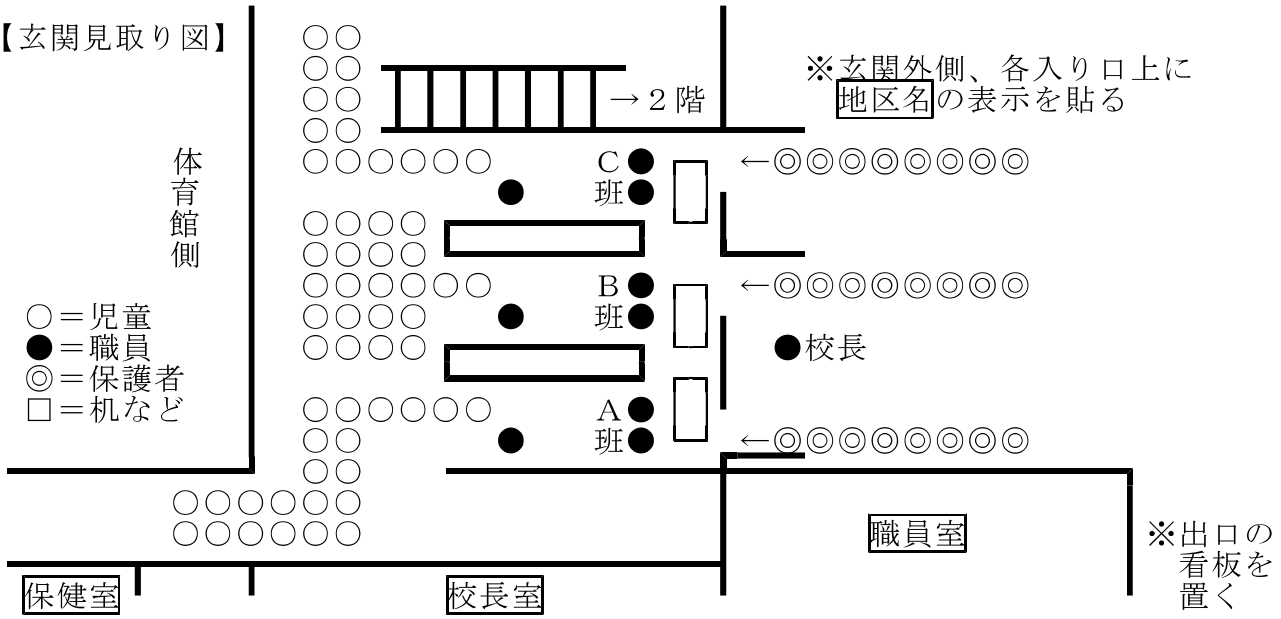
・「引き渡し児童・来校者カード」は、１部コピーし原本は書庫に保管する。
コピーを引き渡しの地区ごと（下記、Ａ、Ｂ、Ｃ）に分けてファイルしておき、引き渡し時に使用する。

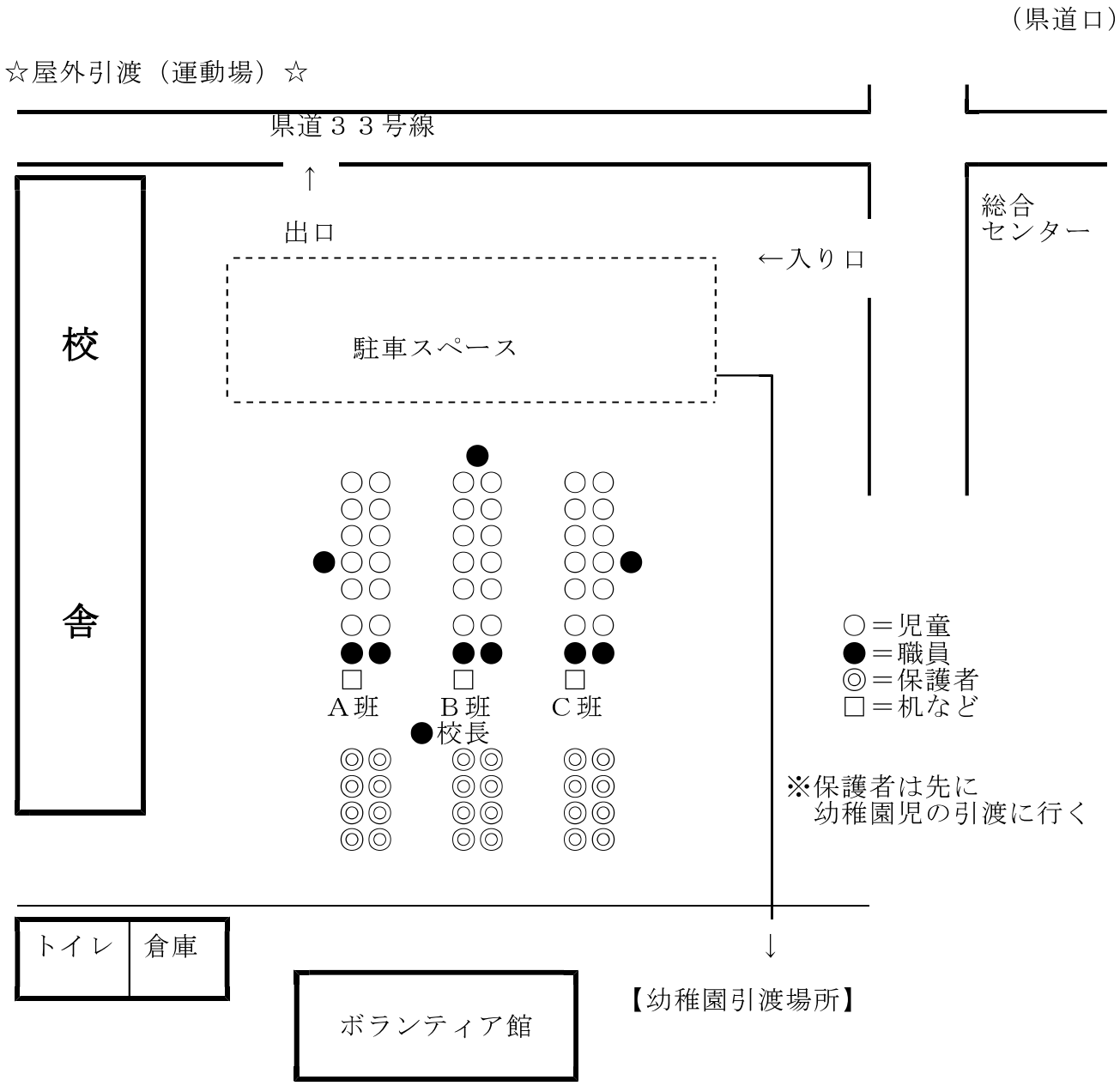
◎引き渡しの手順

児　童	教　職　員	保　護　者
	災害等発生	
避難←←←←←←←←← ↓ ↓ ↓ 下校準備など ↓ 引き渡し場所で待機 １・２年教室前廊下 Ａ：成松・掛土井・戸宮・守家・守家団地・青山団地 玄関ホール Ｂ：城谷・赤坂団地･上町 なでしこ教室前廊下 Ｃ：宮木・下町・森広・久保井野・宮河内 ↓ ↓ ↓ ↓ 保護者などと帰宅←―→	←児童に避難指示 （児童の安全確認） ↓ 引き渡しについて検討・決定 （教育委員会へ連絡） 保護者に引き渡し連絡→→→→ ↓ 引き渡しグッズ（地区ごと）用意 ●引き渡しカードファイル ●児童机 ●筆記用具 ●地域名札（玄関外へ貼る） ↓・出口看板を置く ↓・連絡文書などの作成 ↓ Ａは、職員玄関入口を使う。 Ｂは、１～４年玄関入口を使う。 Ｃは、５・６年玄関入口を使う。 ↓ ・各地区２名の職員が引き渡しに対応する。←→ ・残る１名は児童に対応する。 ・必要に応じて玄関外の保護者に対応する。←→	引き渡しの連絡を受けて、学校へ向かう。 ↓ ※運動場の出入りは一方通行にする （信号の方から入って、校門に近い所から出る。保護者通知文書で告知） ↓ ↓ ↓ 決められた玄関入口から校舎へ入る。 ↓ ↓ 児童を確認。 引き渡しカードにサイン。 ↓ 児童と帰宅。

☆屋内引渡（玄関）☆

【玄関見取り図】




（県道口）
☆屋外引渡（運動場）☆
県道３３号線
↑
出口
←入り口
総合
センター
校
舎
駐車スペース
A班
B班
C班
●校長
○＝児童
●＝職員
◎＝保護者
□＝机など
※保護者は先に
幼稚園児の引渡に行く
トイレ
倉庫
ボランティア館
↓
【幼稚園引渡場所】

引き渡し児童・来校者カード

地区名（　　）

児童氏名			
（　　年　　）		（　　年　　）	
（　　年　　）		（　　年　　）	
引き取り者氏名	続柄	電話番号	帰宅先

引き渡し確認サイン（ここには引き取り時にサインしていただきます）

月　　日	引き取り来校者	
	引き渡し職員	
	引き渡し職員	

月　　日	引き取り来校者	
	引き渡し職員	
	引き渡し職員	

月　　日	引き取り来校者	
	引き渡し職員	
	引き渡し職員	

防災教育だより

平成２７年　No.５

自他の生命を尊重し、災害時に自ら危険を回避する行動ができる子ども

＜緊急地震速報に対応した避難訓練　及び　第2回引き渡し訓練の実施について＞

１１月２９日の学習発表会後に実施した、第１回引き渡し訓練では、ご協力いただきありがとうございました。万が一、引き取りをお願いした場合の手続きや注意事項等についてはご理解いただけたでしょうか？学校でも今回の訓練を反省して、安全で確実な引き渡しができるようにしていきます。

さて、１２月１０日（木）の参観日には、全校で緊急地震速報が出されたときの対応について、子ども達への事前指導を保護者の方々にも観ていただきます。その後、実際に避難訓練を行った後、続けて校外に避難している場合の引き渡し訓練を実施します。ご協力をよろしくお願いします。

【緊急地震速報が出された時の対応について　事前指導】　１３：３０～１４：００　各学年教室

①地震が起こったときの様子を想起する。
②緊急地震速報がなったときの一次対応の仕方を知る。
③避難時の守るべきことを知る。
④実際に一次対応をしてみる。

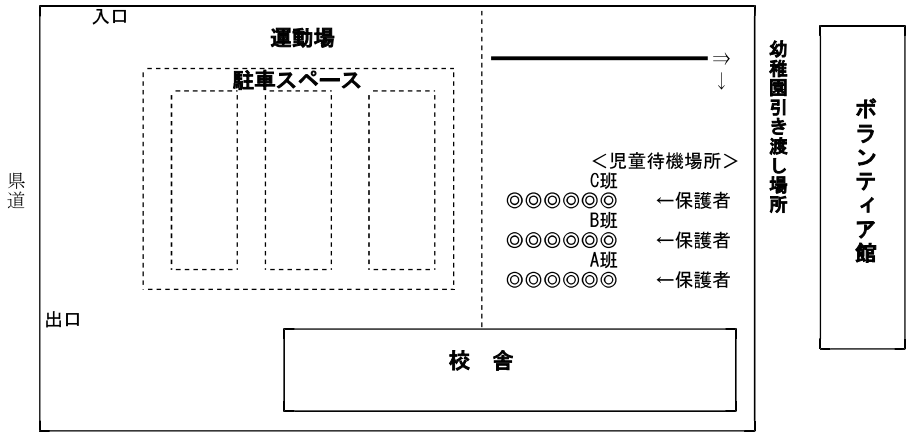
各学年の発達段階に応じて、左記のような内容の事前指導を行います。緊急地震速報がなった場合に素早く判断し、一次対応ができるようになることをねらいとしています。

【緊急地震速報に対応した避難訓練　訓練の流れ】　１４：００～１４：３０　校舎内～運動場

①緊急地震速報を聞いて素早く一次避難する。
②校舎内にいると危険と判断し、安全を確かめながら運動場へ二次避難する。
③避難状況・火災の発生等について確認・報告する。
④振り返り（児童のふりかえり、学校長の話、防災アドバイザーの話）

【引き渡し訓練～運動場に待機している場合】　１４：３０～

○引き渡し場所は？　→　運動場のボランティア館側です。



運動場での引き渡しでは、児童は運動場のボランティア館側に地区ごとに分かれて待機します。先日の引き渡し訓練と同様に、A～C班に分かれて引き取りに来てください。

引き取りの手続きは、前回の訓練と同じです。

運動場に駐車する関係で、引き取り後の方が歩いておられることも考えられます。運動場内の運転には十分気をつけてください。

また、この日は、幼稚園・保育所も本郷小学校へ避難し、引き渡し訓練を行います。幼稚園・保育所と小学校、両方引き取りをされる方は、幼稚園・保育所の引き取りを先にしてください。

★ねらい

今回のねらいは、幼稚園・保育所と小学校の両方引き取りがある場合の引き取り順の確認と、運動場に待機している場合の引き取り場所や方法の確認です。よろしくお願いします。

★運動場へ駐車する場合のお願い

駐車の仕方は、２９日の学習発表会の時と同じようにします。しかし、緊急時に駐車スペース等を書く余裕はないと思われます。そこで、１２月１０日は駐車してはいけない部分にコーンを置いておき、駐車スペースは書きませんので、前回をイメージして、工夫して駐車してください。よろしくお願いします。

11／29　引き渡し訓練より　反省と対応

＜反省事項＞		＜対応＞
○引き渡しの際、職員の署名に手間取った	→	◎確実に引き渡しを行うために、時間がかかっても２人の職員が署名する。
○机があった方が署名しやすい	→	◎児童玄関に常時児童机を置いておく。
○引き渡しの時、保護者の方の引き取りでなく、びっくりした児童がいた。	→	◎非常時に迎えに行く可能性がある人をきちんと保護者の方が子どもたちに伝えておいてもらう。
○引き渡し児童・来校者カードで来られた方を探すのに手間取った。	→	◎引き取りに来られた人のカードを別の箱に入れるようにする。
○職員の役割を総括する人が必要	→	◎校長が全体を指揮するので「引き渡し開始」等の指示や引き渡してよいかどうか等の判断を行う。教頭はそれを補佐する。
○待機中、児童の話し声が多かった。	→	◎名前を呼ばれたら返事をして出てくるなど、緊張感を持って待機するよう指導する。

第６回避難訓練計画（緊急地震速報）

１　目　標　　○どのような状況でも、上からものが落ちてこない・横からものが倒れてこない・ものが移動してこない場所に素早く身を寄せて安全を確保することができるようにする。（報知音を聞いて素早く判断し一次対応ができる。）
○教職員の指示を待たずに児童自らが判断し行動できる（一次対応）ようにする。
○教職員の指示に従って安全に避難（二次対応）することができる。

２　日　時　　平成２７年１２月１０日（木）　予告あり
避難訓練：　　１３：３０～１４：３０

３　指導計画　（学校行事　１．５時間）（本時）
想定は、「授業中に強い地震が発生（震度６程度）。緊急地震速報後 10 秒後に揺れ」とする。

４　展　開　（学年に応じて指導内容の程度を変える）

学習内容・活動　◇主な発問等	教職員の支援	資料
（１）事前指導（３０分）		
１　地震が起こったときの様子を想起する。	・地震の恐ろしさを実感させるとともに、自分で判断し自らの命を守る行動をとることが大切であることを伝える。	・「その時、あなたはどうする！緊急地震速報のしくみと心得」気象庁ＨＰ
２　緊急地震速報がなったときの一次対応の仕方を知る。	・緊急地震速報について知らせる。 ・緊急地震速報を聞いたらどのように行動したら良いのか考えさせる。 ・避難経路を確認させる。（学年ごと）	
３　避難時の守るべきことを知る。	・自分で判断し「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」安全な場所に身を寄せることを確認する。 ・出入り口の戸を開け、避難経路を確保する。 ・放送はだまって最後まで聞かせる。	
４　実際に一次対応してみよう。	・緊急地震速報を流し、児童がそれにすばやく反応して揺れが収まるまで机のしたに入り脚を持たせるなど、「落ちてこない、倒れてこない、移動してこない」場所に身を寄せることができるようにする。	

（２）避難訓練　　（５分） １　緊急地震速報を聞いて一次対応をする。 ２　教職員の指示に従って避難する（二次対応）。 ３　運動場に整列し安全確認をする。	・事前学習を活かして、緊急地震速報にすばやく反応し、一次対応ができるようにさせる。 ・出入り口を開けさせる。 ・児童に頭を保護するものを頭部を被らせて避難させる。 ・落下物がない経路を選択させる。 ・避難の際、低学年優先のルールを徹底させる。 ・屋外へ出る際、頭上、周辺の安全を確認する。 ・「お・は・し・も」の約束を徹底させる。 ・外へ出たら駆け足で集合させる。 ・速やかに整列させ、人員確認をする。	・ＤＶＤ（津波に備える」資料編・気象庁
（４）事後指導　　（２０分） １　ふりかえりをする。 ・緊急地震速報に対して、すばやく一次対応できたか？ ・指示に従って、安全に運動場に避難できたか。 ２　避難訓練の反省をする。	・自分で判断して身を守ることができたかという視点で振り返らせる。 ・高学年では、下級生に対する配慮ができたかという視点も加えて行動を振り返らせる。 ・地震の場合には液状化や地割れで運動場も危険な場合があることを補説する。	

新見市立本郷幼稚園・保育所

テーマ「生命の大切さを知り、安全に行動しようとする幼児の育成」

住　　所　：新見市哲多町本郷 788 番地 25
園・所長 名　：髙瀬　克枝
電　　話　：０８６７－９６－２０１２

Ⅰ　園・所の概要

【園・所の概要】

本園所は新見市南西部、新見市立本郷小学校北西の小高いところに位置している。幼稚園、保育所が併設されており、3 歳未満児、3 歳児、4 歳児、5 歳児の 4 組からなる。幼稚園には 4 歳児、5 歳児 8 名、保育所には 1 歳児から 5 歳児まで 57 名が在籍している。本郷小学校区以外からの通園・所児もいるが、本園・所の卒業児の多くは本郷小学校へ入学し、本園・所の保護者の約半数が本郷小学校の保護者でもある。

【防災上の地理的・地質的な課題】

本園・所は安全な場所に位置し、新見市の避難場所に指定されている。新見市の防災マップにおいては近隣に急傾斜地の崩壊や土石流の警戒区域が存在する。

【防災教育上の課題】

本園・所には 1 歳児より在園しており、緊急時に幼児の命をいかに守るかという体制作りと幼少期より自身の生命の大切さを知り、自身を守ろうとする意識、安全に生活しようとする態度など、年齢に沿った『生命を守る』意識を育てる指導方法を探ることが大きな課題と考えられる。しかし、身近に大きな災害がなく、保育教諭・職員の防災に対する意識は低い。

また、保護者や関連機関との協力が不可欠であり、連携を考えていく必要がある。

Ⅱ　取組の概要

1　研究のポイント

（1）幼児や保育教諭の防災意識の高揚を図る
①訓練の実施と考察
②視聴覚教材を活用した防災教育の導入
③防災教育に関する研修

（2）安全に生活しようとする態度や保育教諭の指示に従い落ち着いて行動しようとする態度を育む
①安全に生活しようとする態度や意識を育む指導の共通理解
②緊急地震速報を活用した避難の仕方と保護者に確実に幼児を引き渡す方法についての検討

2　取組内容

（1）幼児や保育教諭の防災意識の高揚を図る取組
①毎月様々な場面を想定した避難訓練を実施し、検証を行い、防災意識の高揚を図る。
②繰り返しの訓練による「だんごむし」のポーズや「おはしも」の意識付けと徹底を図る。
③本郷小学校における防災アドバイザーなどを活用した研修に参加する。

日時　平成 27 年 8 月 24 日（月）10:00～11:50
場所　新見市立本郷小学校
内容　「新見(哲多)地域の地形や地盤と防災対策について」
講師　学校防災アドバイザー
岡山大学理学部自然科学研究科
鈴　木　茂　之　教　授

（2）安全に生活しようとする態度や保育教諭の指示に従い落ち着いて行動しようとする態度を育む取組

①安全に生活しようとする態度を育むにあたり指導内容の共通理解を図る

〇防災教育年間指導計画の作成

〇防災教育年間指導計画に基づいた訓練の実施と考察

〇大型絵本や紙芝居などの補助教材を用いた防災教育の実践

②緊急地震速報を活用した避難の仕方と保護者へ確実に幼児を引き渡す方法についての検討

〇緊急地震速報に対応した避難訓練と検証

・ 7月10日　室内でのクラス活動時の発生を想定した避難訓練を実施し、火災時避難訓練との相違を知らせる。

・ 9月25日　年長児は戸外遊び中、他は室内活動中を想定した避難訓練の実施。(9月17日予定の起震車体験が取りやめとなったため訓練を実施)

・11 月 5 日緊急地震速報に対応した予告なし避難訓練の実施。予告なし訓練における保育教諭の対応を考察する。

〇引き渡し方法の検証

・引き渡しマニュアルの作成

・ 7月3日参観日において引き渡し・引き取り方法の説明と引き渡し･引き取り訓練の実施。

・「引き取り」方法の周知と「引き取りカード」の配付(7月)

・「引き取り幼児・来園者カード」の作成

Ⅲ　取組の成果と課題

1　成果

（1）　幼児や保育教諭の防災意識の高揚

毎月の避難訓練の検証や､指導の仕方や対応を考える機会を持つことで保育教諭に防災に対する意識が高まってきた。また、幼児においても避難訓練の実施や保育教諭による指導により、年齢に応じた防災に対する意識が育ちつつある。

（2）　安全に生活しようとする態度や保育教諭の指示に従い落ち着いて行動しようとする態度を育むための取組

毎月の訓練や防災関係の補助教材を用いての指導や対応を考える機会を繰り返し持つことで幼児の安全に行動しようとする力や避難指示を聞いて落ち着いて行動しようとする態度が年齢に応じて育ちつつある。

本郷小学校と同時に引き渡し訓練を実施したことで保護者の防災意識が芽生えたのではないかと思う。また、私たち職員も連携の重要性を再認識することができた。

2　課題

（1）　幼児と保育教諭・職員の防災意識のさらなる高揚を図り実践力をつける。

幼稚園・保育所の幼児は年齢が低く、大人が保護することが大前提である。保育教諭・職員の防災に対する意識と幼児の生命を守る使命感を高めるために、防災教育を教育課程・保育課程の中に位置づけ一層の共通理解を図り取り組んでいく。

（2）　幼児の年齢に沿った「生命を守る」意識をより高めるよう指導内容の検討をする。

訓練の実施と日々の生活の中で安全意識を高める指導を行うとともに防災関係の補助教材を用いた指導により行動を考えたり学んだり必要な事柄を身につけたりすることを繰り返す中で「生命を守る、体を守る、体を大切にする」意識や防災に対する意識を高めていくようにする。

（3）　引き渡し訓練の周知、徹底を図る。

合同訓練の実施はできなかったが、本園における引き渡し訓練では、ピンクの「幼児引き取りカード」と「引き取り幼児・来園者カード」の照合、確認、引き渡しが速やかにできた。「引き取り幼児・来園者カード」に記載のない方が引き取りに来るなどの周知が不十分と考えられる課題も見つかったので、今後も、周知徹底ができるように説明や形式を修正する。

（4）　保護者や関連機関との連携を深める。

保護者や周囲の協力がなくては幼児を守ることはできない。保護者の防災に対する考えをより深められるよう、講演会を催したりたよりを出したりするなどの手立てを工夫していく。また、周辺機関の協力の重要性を考え、連携を深めるようにしていく。

別紙様式１－２

防災教育年間計画

学校園名（　新見市立本郷幼稚園・保育所　）

＜ねらい＞
安全に生活しようとする態度や、緊急時に保育教諭や保護者の指示に従い、落ち着いて行動しようとする態度を育む

月	活動内容	行事・訓練等	防災管理・組織活動
4	○避難訓練の意味や必要性を知る ○避難訓練の合図（サイレンの音、放送等）を知り、「静かにする」「保育教諭の傍に集まる」「指示を聞き、従う」ことを知る ○年長児の避難の様子を見る	防災訓練(火災)	教職員研修 （危機管理対応） 園内外安全点検
5	○避難訓練の合図を聞き、保育教諭の傍に集まり、指示に従い避難する	防災訓練（火災）	園内外安全点検
6	○保育教諭の傍に集まり、指示に従い避難する ○風水害、雷鳴時の身体の守り方や避難の仕方、水辺での安全な遊び方を知る	防災訓練（火災）	防災安全点検 AED の点検 園内外安全点検
7	○地震時の体の守り方や避難の仕方を知る ○指示に従って落ち着いて避難をする	防災訓練（地震）	園内外安全点検
8	○近隣火災発生時避難訓練をする ○「おはしも」の約束を守って行動する	防災訓練（火災）	教職員研修（緊急地震速報による合同避難訓練について）
9	○地震体験を通して体の守り方や避難の仕方を知る	防災訓練（地震） 起震車体験	園内外安全点検
１０	○緊急地震速報による合同避難訓練に参加する ○保育教諭の指示に従い落ち着いて避難する	緊急地震速報合同避難訓練	園内外安全点検
１１	○保育教諭の指示に従い「おはしも」の約束を守り落ち着いて行動する	防災訓練(火災)	消防署の指導を受ける 園内外安全点検
１２	○火災の怖さ、危険な行動について知る ○暖房器具付近での遊び方、過ごし方を知る	防災訓練（火災）	防災安全点検 園内外安全点検
1	○地震時の体の守り方や避難の仕方を知る	防災訓練（地震）	園内外安全点検
2	○近隣火災発生時避難訓練をする ○「おはしも」の約束を守って行動する	防災訓練（火災） 予告なし	職員研修（避難方法や避難場所について検討） 園内外安全点検
3	○総合訓練 ○「おはしも」の約束を守り、速やかに避難する	防災訓練(地震、火災)	園内外安全点検

幼児引き渡し手順

新見市立本郷幼稚園・保育所

保護者への事前連絡

○大きな災害、または緊急事態の発生における幼児の引き取りは引き取りカード(ピンク)を使用して引き取る。

○連絡は、緊急連絡網を使用する（年度当初配付、変更の都度配付）が、大きな災害（震度５程度以上の地震など)発生時には連絡がなくても引き取りをしてもらう。

○引き取りカードは幼児一人につき４枚配付する。事前に必要事項を記入して所持してもらい、引き取り時に氏名、続柄を記入し、受付で提出する。また、事前に引き取りカードを所持する者を「引き取り幼児・来園者カード」に記入して提出してもらう。

○受付は、4・5歳児棟と３歳・3歳未満児棟の２か所。クラスごとにまとめた「引き取り幼児・来園者カード」を所持し、引き取り者持参の引き取りカードと照合し確認後、引き渡す。

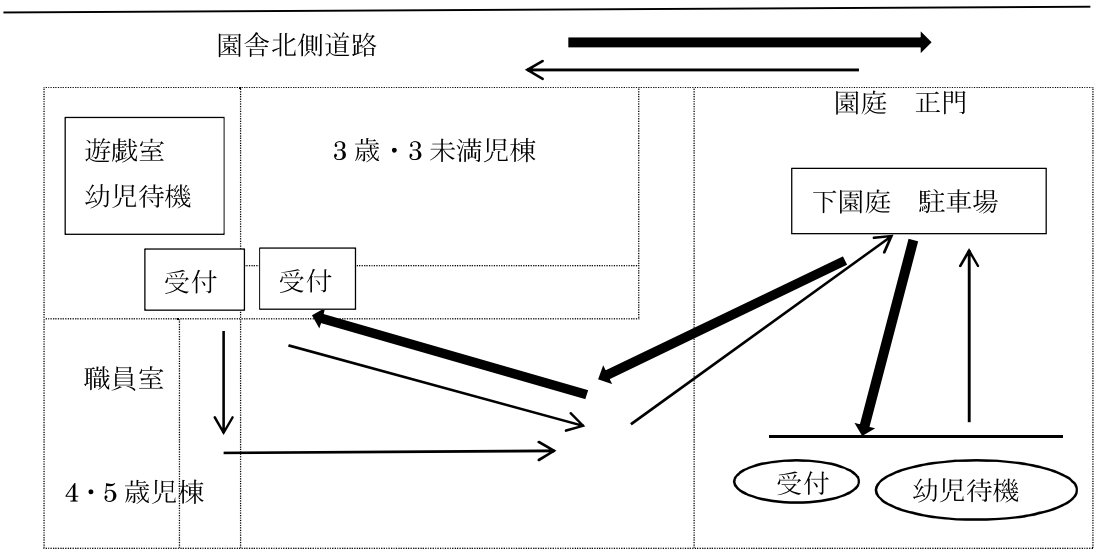
○引き取り場所は基本的には本園・所であるが、場合によっては本郷小学校にて引き渡すこともある。本郷小学校・ボランティア館での引き渡しの場合は目印に哲多総合センター後方の登り道口、ボランティア館入口（本郷小学校体育館待機の時は同校正門付近）に黄色い旗を掲示しておく。

引き渡し手順

幼児	保育教諭・職員	保護者
	災害発生	
避難 ←	避難指示・安全確保	
待機		
	引き渡しについて検討・決定	
（降園準備）		
	こども課へ連絡	
室内待機場所	保護者へ引き渡し連絡（連絡網） →	緊急連絡網連絡
○遊戯室	↓	↓
	降園準備（テラスに置く）	引き取りに園へ向かう
戸外待機場所		↓
○下園庭南側	引き渡し準備	下園庭に駐車する
	「引き取り幼児・来園者カード」	↓
	引き渡し受付場所掲示板、	↓
	筆記用具、引き渡し白紙カード	↓
		↓
	引き渡し場所	引き取り場所にて、受付に「引
	遊戯室待機：遊戯室前廊下	き取りカード」を提出し、「引き

保護者と帰宅	園庭待機：園庭 （引き渡し場所の掲示） 4・5歳児受付：赤木 3・3歳未満児受付：澤座 他保育教諭、職員は幼児の安全確保 引き取り者を複数で確認し、順次引き渡す	取り幼児・来園者カード」と照合してもらう。 ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ 幼児を確認、引き取る 降園する
園外待機場所 ○本郷小学校隣ボランティア館前 （黄色旗掲示） ○本郷小体育館 （黄色旗掲示） 保護者と帰宅	（引き渡し場所の掲示） 4・5歳児受付：赤木 3・3歳未満児受付：澤座 他保育教諭、職員は幼児の安全確保 引き取り者を複数で確認し、順次引き渡す	※店横の登り道口、ボランティア館入口に黄色い旗が掲示された場合は、本郷小校庭に駐車し、ボランティア館前へ引き取りに行く。 ※店横の登り道口、本郷小学校正門付近に黄色い旗が掲示された場合は本郷小学校体育館へ引き取りに行く。

園内見取り図



本郷幼稚園・本郷保育所　引き取り幼児・来園者　カード

※　太枠内を記入して提出してください

※　**「引き取り者氏名」はピンクの引き取りカードを所持する方を記入**してください

本郷幼稚園・本郷保育所　在籍幼児氏名 組 組 組	**本郷小学校に** **・兄姉が通学している** ・兄姉が通学していない (該当箇所に〇をしてください)

引き取り者氏名	続柄	電話番号	帰宅先

引き渡し記録欄

月　　日	引き取り来園者	
	引き渡し確認職員	
	引き渡し職員	

月　　日	引き取り来園者	
	引き渡し確認職員	
	引き渡し職員	

月　　日	引き取り来園者	
	引き渡し確認職員	
	引き渡し職員	

《幼児引き取りカード》

◎　災害発生時にこのカードをもってこどもさんのお迎えに来てください。

◎　下欄を４枚のカードに切り分け、父母、祖父母など４人の方が常時所持しておいてください。

◎　太線以外の部分は事前に記入しておいてください。

◎　太線の中にはお迎えに来られるときに記入し、引き取り場所の受付担当職員に渡してください。

◎太線以外の部分に記入してもってきてください。

《幼児引き取りカード》本郷幼稚園・保育所		
組	幼児 氏名	
血液型 型	平成　　年　　月　　日生	
住　所		
電話番号		
保護者 氏　名		
引き取り 者氏名		続柄
園記録欄		

◎太線以外の部分に記入してもってきてください。

《幼児引き取りカード》本郷幼稚園・保育所		
組	幼児 氏名	
血液型 型	平成　　年　　月　　日生	
住　所		
電話番号		
保護者氏 名		
引き取り者 氏名		続柄
園記録欄		

◎太線以外の部分に記入してもってきてください。

《幼児引き取りカード》本郷幼稚園・保育所		
組	幼児 氏名	
血液型 型	平成　　年　　月　　日生	
住　所		
電話番号		
保護者 氏　名		
引き取り 者氏名		続柄
園記録欄		

◎太線以外の部分に記入してもってきてください。

《幼児引き取りカード》本郷幼稚園・保育所		
組	幼児 氏名	
血液型 型	平成　　年　　月　　日生	
住　所		
電話番号		
保護者氏 名		
引き取り者 氏名		続柄
園記録欄		

Ⅱ　防災に関する取組

２　浅口市寄島中学校区

寄島中学校

寄島小学校

寄島幼稚園

浅口市寄島中学校区
（寄島中学校・寄島小学校・寄島幼稚園）

教育委員会名：浅口市教育委員会
住　　所：浅口市鴨方町鴨方 2244-2
電　　話：0865-44-7012

Ⅰ　浅口市寄島中学校区の概要

1　学区の概要と地理的・地質的な課題

浅口市寄島中学校区は、浅口市の南部に位置し、北は山々が東西に連なり、南は瀬戸内海に面している自然環境に恵まれた地域である。町の中心部から南へ約 100ha にわたり干拓地が広がっている。

地理的な課題としては、学区内の広い範囲が浸水や土砂災害の警戒区域となっており、過去には高潮による浸水や山際の土砂崩れが発生したこともある。災害時には、他地域との連絡道が土砂災害の影響で分断され、町自体が孤立してしまう危険がある。

南海トラフ巨大地震の発生時には、想定最大震度６弱、津波の高さは2.8mで到着までの時間は約250分となっている。また、干拓地に学校園が建っているため、液状化も懸念される。

2　学区で共通する防災教育上の課題

台風時には、高潮や土砂崩れを心配し、過去に被害が発生したこともあるが、大きな災害に見舞われたことがなく、有感地震もほとんど起こらない穏やかな自然条件のもとに生活しているため、地域全体で災害に対する危機意識が高くないことが大きな課題である。

また、避難場所としている高台までに到達する道沿いに崩落等の危険があり、安全に避難できるための避難場所や避難経路の見直しが必要である。

数年前より寄島地区合同避難訓練を実施してきているが、実際に想定される被害に対応できるように、子どもたちには、発達段階に応じて、自分の命を守り主体的に行動する態度を育てることが求められている。

Ⅱ　取組の概要

1　研究のポイント

（1）実践委員会の設置

（2）緊急地震速報受信システムの導入と寄島地区合同避難訓練の実施

①寄島地区合同避難訓練の実施と事前事後指導の工夫・改善

②緊急地震速報受信システムの設置と活用

③訓練後の課題を踏まえた避難マニュアルの見直し

（3）いのちを守る授業や指導の実施

①自分の身は自分で守るために必要なスキルの習得

②防災ハザードマップの配付と活用

（4）家庭・地域との連携の強化

①引き渡しカードの作成と訓練の実施

②災害伝言ダイヤルの試験運用

2　学区としての取組内容

（1）実践委員会の設置

①第１回実践委員会を５月１９日に開催し、市の防災担当者や寄島支所長、各校園長とともに、事業概要の説明や第１回合同避難訓練の打合せを行った。また、第１回合同避難訓練は、地域の人にも広報して参加を募ることにした。

②第２回実践委員会は防災アドバイザーを迎えて６月２３日に開催し、第１回合同避難訓練の振り返りを中心に行った。避難場所と避難経路の見直しや事前事後指導のポイントなどについて話し合い、現実に沿った、想定を広げた避難訓練について、意見を交わした。また、最後には、防災アドバイザーの西村教授から、南海トラフ巨大地震による寄島中学校区の被害の予測と、それに対応した避難訓練の大切さを助言いただいた。

③第３回実践委員会は１０月２２日の第２回合同避難訓練のあと開催した。第１回合同避難訓練の反省をうけて改善した点を中心に、第２回合同

避難訓練の振り返りを行った。防災アドバイザーの岡山地方気象台　井上調査官から、緊急地震速報受信システムの説明と活用についてお話を伺った。

（２）緊急地震速報受信システムの導入と寄島地区合同避難訓練の実施

①１１月中旬に各校園に高度利用緊急地震速報受信システムを設置することができ、緊急地震速報を活用した抜き打ちの避難訓練を実施した。

②第１回寄島地区合同避難訓練を５月２７日に実施した。予告有りの近隣の広場（海抜５ｍ）までの水平避難を行い、中学生が幼稚園・保育園児と手をつないで、小学生は上級生と下級生が手をつないで避難した。この訓練には、地域の人にも広報し、一緒に参加された。これまでの積み上げが活かされた訓練だったが、「避難場所として適切か」「自らが判断して身を守る行動がとれているか」という課題が見えてきた。

③第２回寄島地区合同避難訓練を１０月２２日に寄島中学校校舎３階への垂直避難として行った。様々な避難方法（避難場所）を経験することが必要という防災アドバイザーの助言を受けて、初めて垂直避難を行った。また、児童生徒には予告無しで、緊急地震速報がなったときに、自ら判断して身を守る行動がとれることを目指した。

（３）いのちを守る授業や指導の実施

①市より、市内小学校４～６年生、中学校１～３年生に教材用ハザードマップを配付した。寄島中学校では、社会科のハザードマップの見方の学習を通して、生徒の防災意識の向上と災害時の備えについて考えさせる授業を実施した。寄島小学校でもハザードマップを使って、授業を行っている。

②２回の合同避難訓練の結果から、自ら判断して身を守る行動をとることができるようにするために、身の守り方や避難の仕方の原則を学んだ上で、抜き打ちの訓練を重ねていくことが有効であると考えて、簡易の避難訓練を実施している。

（４）家庭・地域との連携の強化

①各校園で引き渡しカードや引き渡しの流れ等を作成し、寄島小学校では、実際に台風の影響下での引き渡し訓練を行った。

②災害時の確実な通信手段として「災害用伝言ダイヤルサービス」の活用を助言いただき、各家庭への広報を兼ねて実際に試験運用を行った。寄島中学校では、２回の試験運用を行い、利用率が１回目１８％、２回目４４％となっている。今後継続して試験運用を行うことにより、利用率を増やしていきたい。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

・　本年度の取組を通して、寄島地区の保幼小中の連携体制が強化できた。合同避難訓練を中心として、園児児童生徒の発達段階に応じた防災意識と避難のスキル等の獲得を意識した訓練の工夫ができた。また、学校防災アドバイザー等の専門家の指導助言により、正確な情報に基づいた地域の実情や災害の状況に応じた避難の在り方について、見直すよい機会となった。

・　学校防災アドバイザーや市の防災担当者といった専門知識の豊富な方を委員として実践委員会を設置することにより、南海トラフ巨大地震や様々な災害についての知識を得たり、避難訓練や緊急地震速報の活用などの実践的な知識や方法を獲得することができ、各校園での指導に活かすことができた。

・　緊急地震速報受信システムの設置により活用意識が高まり、抜き打ちの避難訓練など、子どもも教職員も緊張感のある避難訓練が繰り返し実施できるようになった。反射的に身を守る行動がとれるようになっていくと期待できる。

・　引き渡し訓練や災害伝言ダイヤルの試験運用等により、家庭・地域との連携も進んできている。家庭・地域の防災意識を高めるためには、学校園や園児児童生徒の働きかけが有効であるので、今後も続けていきたい。

２　課題

・　本年度、見直した合同避難訓練や各校園での防災教育については、今後も継続して取り組んでいくことで効果が高まるので、今後も継続・発展していける取組を模索していきたい。

・　避難訓練や防災の授業については、具体的な想定の下、必要感をもって実施されることが大切である。家庭や地域との連携をさらに深めるためにも、地域に一歩踏み込んだ実践的な避難訓練や授業を実施するとともに、本年度配付したハザードマップの活用についてもさらに推進し、地域全体で園児児童生徒の自助・共助の力を育てていきたい。

・　寄島中学校区の本年度の取組の内容や成果について、市内の他の中学校区へも積極的に紹介することにより、浅口市全体の防災教育への取組の活性化と、防災意識の向上につなげたい。

浅口市立寄島中学校

テーマ「合同避難訓練をもとにした防災教育の充実を図る取組」

住　　所：浅口市寄島町７５５１番地
校　長　名：原　範 幸
電　　話：０８６５－５４－２０１７

Ⅰ　学校の概要

【学校の概要】
学区地域は、浅口市の南部に位置し、高齢化とともに少子化が進んでいる。本校は、塩田跡地に立地し、保育園や幼稚園、小学校に隣接している。旧寄島町全域を学区とする唯一の中学校であるが、全校生徒数１１７名という小規模校であり、現在も年々減少している。

【防災上の地理的・地質的な課題】
本校は、沿岸部に位置し、南海トラフ巨大地震発生時には、最大震度６弱、地震発生直後から約250分後に津波浸水の被害が３m程度(市沿岸部で最大５m以上)となることが想定されている。さらに学校（園）地域では液状化、周辺の急傾斜地では崩壊の危険が指摘されており、通学路の状況も心配される。

【防災教育上の課題】
本年度より市の防災会議が中心となり、保幼小中津波対策合同避難訓練が計画されるようになった。実際の災害に備えて、その内容を吟味することが重要である。また、生徒は、中学校では学校区の中心としての役割があり、地域に戻ればその一員として活躍が期待されている。状況に応じて主体的に行動できる個人としての力が、必要と考えられる。そして、今後の防災教育への取組を考えると、どのように家庭や地域との連携を図りながら進めていくかが大きな課題である。

Ⅱ　取組の概要

１　研究のポイント

（１）地域・学校区の核となる生徒の育成
　①　保幼小中津波対策合同避難訓練の取組
　②　ＳＥＬ、ピア・サポートの取組
（２）生徒の防災意識と主体的な個人として力の向上
　①　防災意識を高める取組
　　ａ　ハザードマップと災害時の備えの学習
　　ｂ　人権教育講演会
　②　災害時に対応できる力の向上への取組
（３）家庭・地域との連携強化
　①　災害伝言ダイヤルの試験運用
　②　地域への合同避難訓練への参加の呼びかけ

２　取組内容

（１）地域・寄島学校区の核となる生徒の育成
　①　保幼小中津波対策合同避難訓練
　　ａ　第１回保幼小中合同避難訓練（5/27）

本校は、中学校区の保育園・幼稚園・小学校に隣接することから、平成23年より合同で避難訓練を実施している。第１回は、近隣の広場（中学校より500m）までの避難訓練を実施した。入園間もない保育園児に、あまり負担がかからない方法での避難訓練という考えから、避難場所や方法を考慮した。

この訓練では、地域の方も参加され、中学校生徒と園児が手をつないで一緒に避難する活動を計画した。また、生徒会執行部の生徒を中心に、保育園まで園児を迎えに行き避難活動の援助をするようにした。

　　ｂ　第２回保幼小中合同避難訓練（10/22）
　　・10/1 寄島地区合同避難訓練担当者会
　　・10/5 保幼小中合同避難訓練打合せ

10/1 に行われた寄島地区合同避難訓練担当者会で、専門家の方から様々な避難の方法（場所）を体験するのも望ましいという考えが出され、さらに本校が震度６以上にも耐えられる構造であることもわかり、第２回の避難訓練では、本校３階への合同避難訓練（垂直避難）を実施することとなった。

この訓練で生徒は、１階から３階に上がり教室に安全に待機するまで、園児をサポートしながら、避難する計画で実施した。

② ＳＥＬ、ピア・サポートの取組

合同避難訓練は、ＳＥＬ、ピア・サポートの取組の一環として捉えている。

・ 事前の学習　学活１時間
園児への対応の仕方･声のかけ方を考える。

・ 合同避難訓練
園児に対するピア・サポート活動

・ 事後の学習　学活３０分
振り返りを行う。

（２）生徒の防災意識と主体的な個人として力の向上

① 防災意識を高める取組

ａ　ハザードマップと災害時の備えの学習（10/7）

市より全校生徒にハザードマップが配付されたこともあり、ハザードマップの見方の学習を通して、生徒のひとり一人の防災意識の向上と、災害時の備えについて考えさせる授業を社会科で実施した。

・ ハザードマップの見方を知る。

・ 地区の災害について個人で考える。
地区の危険箇所
日ごろからの備え
災害発生時の行動

・ 班でまとめ、発表する。

ｂ　人権教育講演会（11/7）

講師として「子ども未来･愛ネットワーク」の大塚愛先生をお迎えした。

講師の大塚先生からは、東日本大震災の様子や、福島原発の事故の影響で福島から実家のある岡山に家族で移住されたことなどをもとに、災害の怖さと命の大切さなどについての講演をしていただいた。そして、生徒代表のお礼の言葉に続き、生徒全員で「ふるさと（嵐）」を歌いお礼の気持ちをお伝えした。

② 災害時に対応できる力の向上への取組

災害時は、様々な状況が想定され、生徒にもより自立した個の判断、行動力が求められる。

そのため、①のａの授業では、災害時の備えについて、個人で考え判断させるようにした。

また、避難訓練では、事前指導で生徒への必要な連絡事項は確認しておくようにし、実際の場では、教師の指示は一切なしで、生徒自身の考えで自立して行動できることを、課題の一つとして実施した。

（３）家庭・地域との連携

① 災害用伝言ダイヤルの試験運用（11/15、12/1）

大規模地震などの災害時には、安否の確認や生徒の引き渡しなどで、家庭との連絡が必要である。しかし、電話（含携帯）による通信手段は、実際には大きな混乱が予想される。

確実な通信手段として、ＮＴＴドコモが取り扱っている「災害用伝言ダイヤルサービス１７１」の活用を考えた。まずは各家庭への広報を兼ねてと実際に使用していただき、問題点などを把握したいと考え、試験運用の機会を設定した。

② 地域への合同避難訓練への参加の呼びかけ

寄島地区への有線放送やＣＡＴＶの掲示板を使って、合同避難訓練の実施と参加の呼びかけを行った。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）本事業の取組全体を通して、保幼小中の連携体制が強化された。

（２）生徒は、合同避難訓練や講演会などの行事や防災学習の取組を通して、災害への理解を深めると共に、防災意識を高めることができた。また、ピア・サポートの活動を通して、生徒が自らの役割を自覚することができた。

（３）多くの保護者の方に、伝言ダイヤルの試験運用を通して、本校の防災教育への関心をもっていただくことができた。

２　課題

（１）本年度の第２回合同避難訓練は、本校への垂直避難を実施したが、実際の避難場所として考えると、必要最低限の生活物資の準備・備蓄が不可避である。また、引き渡しまでの訓練も重要であり、その都合を考えると交通の便のよい高台への水平避難も候補となる。今後、各方面との連携を図りながら、実効性のある避難訓練について検討していきたい。

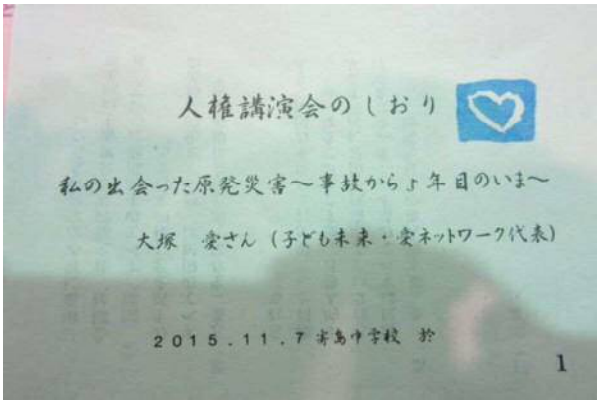
（２）寄島地区は、高齢化が進んでいることもあり、災害時には、中学生には地域の担い手として重要な役割が期待される。そのためにも、生徒には、正しく判断することができる自立した個の力が重要となる。様々な機会を捉えて、災害時に真に行動できる生徒を育成したい。

平成 27 年度第 1 回保幼小中合同避難訓練（5/27）

平成 27 年度第二回合同避難訓練（10/22）

ハザードマップと災害時の備えの学習（10/7）

人権教育講演会（11/7）



平成 27 年５月 11 日
寄島中学校　安全担当

平成 27 年度　第１回避難（津波）訓練実施要項

１．目標　①地震・津波に際し、安全かつ敏速に避難できるように避難経路を確認する。
②人手が足りない保育園との連携を深め、中学生にできる地域貢献を把握する。
③園児を気遣いながら避難することで、他人を思いやる心を育てる。

―重点目標―
地震・津波発生時の対処の仕方を確認する。　避難経路を確認する。

２．日時　平成 27 年５月 27 日（水）２～３校時　９：55～11：45（雨天延期）
※８：00 の時点で決定
雨天時の予備日　平成 27 年６月３日（水）２～３校時　９：55～11：45（雨天中止）
※８：00 の時点で決定

３．想定　南海トラフが震源地とみられる震度５強の地震が発生　発生時刻（10：15）
地震発生に伴い、津波警報発令。

４．評価の観点
①地震・津波に対する基本的な避難の仕方が理解できたか
②園児も含め迅速かつ安全に避難できたか
③友人や園児を思いやり、真剣な態度で避難していたか

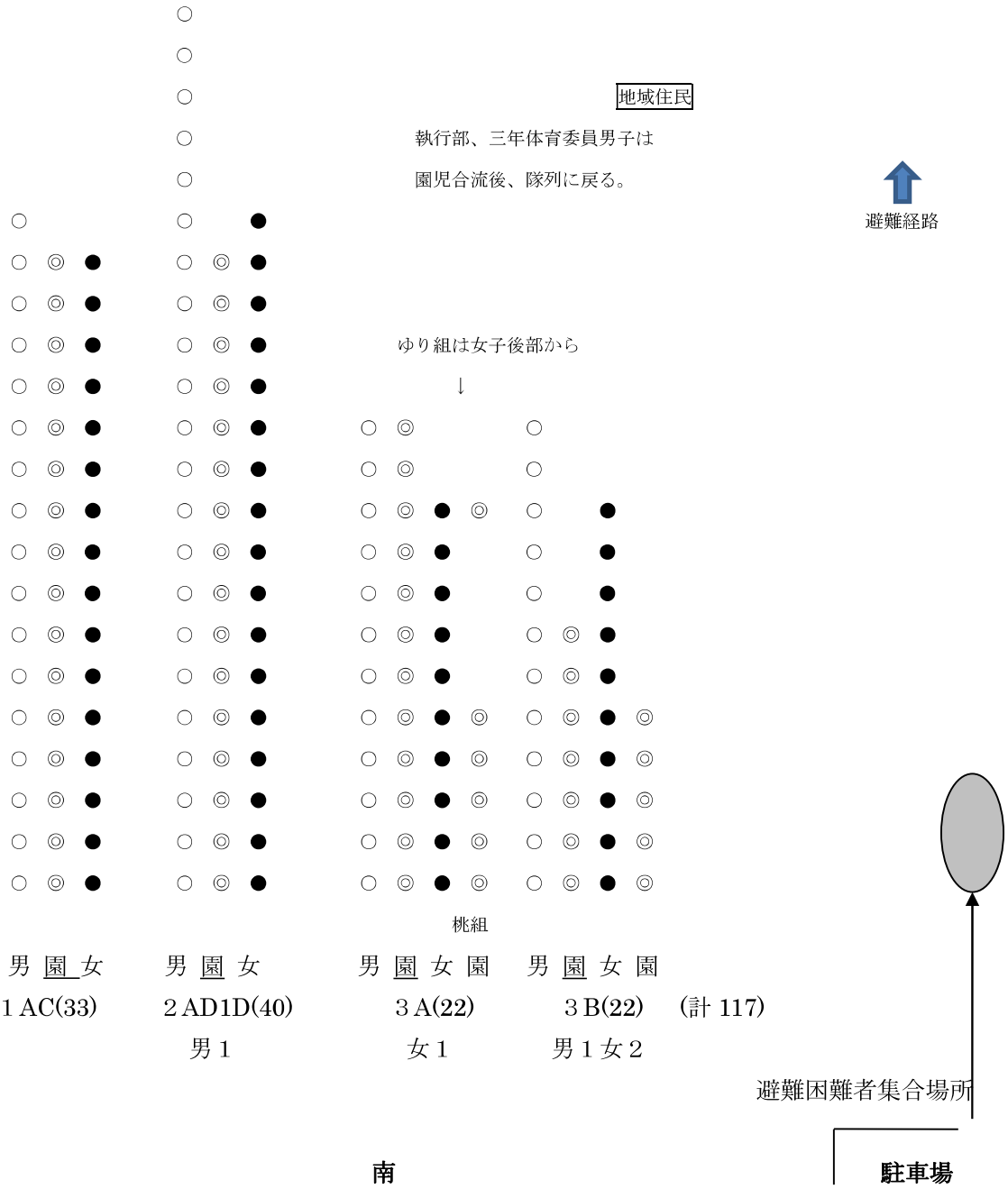
５．生徒への注意事項
・教員の指示を無言で最後まで聞く。
・教職員の避難開始の指示で避難を開始する。
・教職員の指示で、窓から離れ机の下に身を隠し、次の指示があるまで机の下から出ない。
・教職員の指示で、窓に近い生徒は窓を開ける。授業担当の教員は、教室のドアを開ける。
・無言で緊張感を持って避難する。
・屋内は走らない。屋外にでたら周囲の状況を確認しながら迅速に避難する。
・グラウンドでは朝礼隊形で集合。学級委員はクラス生徒を座らせてから、点呼する。（学級委員は、点呼が完了し、担任に報告し終えるまで立っておく）
・幼稚園児・保育園児にあいさつなどの声かけを積極的に行い、協力し行動をする。
・体調の悪い生徒は、参加しない。（保健室へ行き、宮崎先生に相談する）
・移動中の体調不良やけが等はすぐに近くの先生に言う。
・想定にとらわれず、率先して避難し、最善を尽くすことを考える。

６．避難場所及び移動隊列（ペアになって待機）※中学生からの声かけ

・第１避難場所　本校グラウンド　　○　男子　●　女子　◎　園児

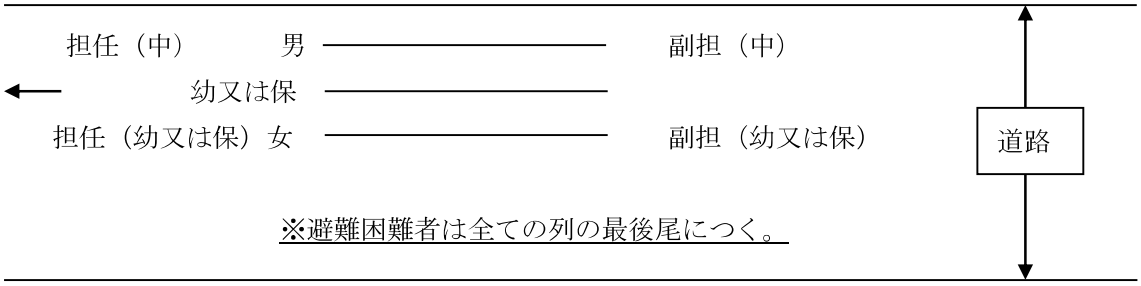
青組	コスモス組	ゆり組，桃組		ゆり組、桃組	
	３才児	４才児	男子	５才児	女子
(16)	(16)	(13)	(5)	(7)	(5)

(計 62)



※移動時は中学生が車道側になるように配慮をお願いします。

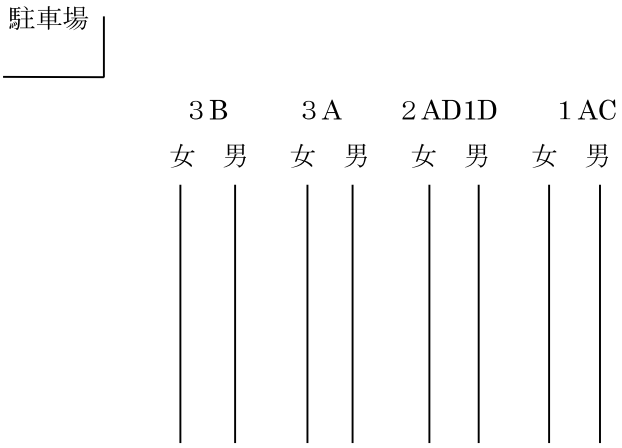
・第２避難場所　コミュニティーセンターしおさいへの移動形態（中学生が車道側になるように入れ替わる。）



・帰校時集合形態（本校グラウンド）

第１避難場所と同じ形態

・訓練終了後の指導講評時の集合形態（本校グラウンド）



７．　避難経路

A 地点・・・・・・児童・生徒及び通行車輌への注意（藤澤先生）

B 地点・・・・・・児童・生徒及び通行車輌への注意（城崎先生）

C 地点・・・・・・児童・生徒及び通行車輌への注意（末廣先生）

８．訓練の流れ

時間	生徒の動き	授業担当教員の動き	授業担当以外の教員の動き	備考
9：55	・注意事項と避難経路の確認	・注意事項と避難経路の確認 ・避難困難者の決定		3 年生の避難困難者のうち、足をけがしている生徒は保健室へ移動。
10:15	**避難訓練開始**		・教頭先生が放送１を行う。 「訓練　只今　地震が発生しました。生徒は窓から離れ、机の下に入り身を守りなさい」	
	・訓練開始 ・放送を静かに聞く ・窓から離れ、机の下に入り身を守る。	・訓練開始 ・放送を聞くよう指示 ・窓から離れ、机の下に入り身を守る。 ・机の足をしっかり持ち、頭を守るよう指示。		地震速報ＣＤ 地震ＣＤ
10:16	・待機する。 ・窓に近い者で窓を開ける。	・けがの有無を確認 ・窓を開けるよう指示 ・出入り口のドアを開ける。 ・状況確認に来た教員に状況を伝える。	・教頭先生が放送２を行う。 「揺れがおさまりました。被害状況を確認しています。生徒はそのまま指示があるまで待機しなさい。 ・分担に基づき担当所または生徒の状況を確認し、教頭先生へ報告。	
10:18	・靴を履き替え、中庭を通ってグラウンドへ避難。	・出席人数を把握し、避難指示を行う。	・教頭先生が放送３を行う 「揺れがおさまりました。生徒は先生の指示に従い、グラウンドに集合しなさい。」	
	目標タイム・・・３分台			
10:21	・朝礼隊形に整列。学級委員が生徒を座らせる。 避難困難者は集合場所へ集合。	・早く整列し、座るよう指示。	・近政先生、山田先生は園児合流の誘導（各担当施設へ） ・学校に残る先生、教室施錠 ・避難困難者の避難支援 ・宮﨑先生、避難困難者の手当	
	点呼（各クラス男女別人数確認）報告手順：学級委員→学級担任→教頭→校長			

10:25	・園児とのペアを確認。 ・指示に従い、手をつないで３Ｂ３Ａ２AD１AC の順に移動開始	・担当クラスを誘導する。	・近政先生、津波からの避難指示を行う。 ・分担表に従って、担当クラスの誘導につく。 ・ＡＢＣ地点担当者は、生徒の列に入らずＡＢＣ地点に移動。	・幼稚園も点呼を行い。教頭へ報告。 ・本荘先生、田辺先生は訓練に参加できない生徒の対応。
10:40	・しおさい到着	・しおさい到着	・しおさい到着	
	点呼（各クラス男女別人数確認）報告手順：学級委員→学級担任→教頭→校長			
	・指導講評を聞く		・指導講評（司会　近政先生） ・計時について（柚木先生） ・指導講評（大室寄島総合支所長）	
10:50	・指示に従って帰校	・担当クラスを誘導する。	・帰校の指示　（近政先生） ・ＡＢＣ地点担当者は、生徒の列に入らずＡＢＣ地点に移動。	
11:05	・中学校到着 ・グラウンドに朝礼隊形で整列。 学級委員が生徒を座らせる。			
	点呼（各クラス男女別人数確認）報告手順：学級委員→学級担任→教頭→校長			
	・教室へ戻り、まとめをする。		・近政先生、解散指示。 ・各クラス担任で指導。	

平成 27 年 10 月 19 日
寄島中学校　安全担当

平成 27 年度　第２回避難（津波）訓練実施要項

１．目標　①地震・津波に際し、安全かつ敏速に避難できるように避難経路を確認する。
②地域の連携を深め、中学生にできる地域貢献を把握する。
③災害弱者を気遣いながら避難することで、他人を思いやる心を育てる。

―重点目標―
地震・津波発生時の対処の仕方を確認する。　避難経路を確認する。

２．日時　平成 27 年 10 月 22 日（木）１、２校時　8：55～10：45（雨天延期）
※7：30 の時点で決定
雨天時の予備日　平成 27 年 10 月 29 日（木）１、２校時　8：55～10：45（雨天中止）
※7：30 の時点で決定

３．想定　南海トラフが震源地とみられる震度６弱の地震が発生　発生時刻（9：30）
地震発生に伴い、津波警報発令。

４．評価の観点
①地震・津波に対する基本的な避難の仕方が理解できたか
②園児も含め迅速かつ安全に避難できたか
③友人や園児を思いやり、真剣な態度で避難していたか

５．生徒への注意事項
・当日、教職員はほとんど指示を出さないため行動を把握しておく。
・窓から離れ、対角線の足をしっかり持つようにして机の下に身を隠す。
・安全が確認でき次第避難を開始する。
・安全を確認した後、通路確保のため窓や、ドアを開ける。
・不要な私語は慎み緊張感を持って避難する。
・屋内は走らない。屋外にでたら周囲の状況を確認しながら迅速に避難する。
・グラウンドでは朝礼隊形で集合。学級委員はクラス生徒を座らせてから、点呼する。（学級委員は、点呼が完了し、担任に報告し終えるまで立っておく）
・幼稚園児・保育園児にあいさつなどの声かけを積極的に行い、率先して行動をする。
・体調の悪い生徒は、参加しない。（保健室へ行き、宮崎先生に相談する）
・移動中の体調不良やけが等はすぐに近くの先生に言う。
・想定にとらわれず、率先して避難し、最善を尽くすことを考える。

６．訓練の流れ

時間	生徒の動き	担任の動き	担任以外の教員の動き	備考
8：55	・注意事項と避難経路の確認	○事前指導を行う ・注意事項と避難経路の確認をする。 ・地震発生時の身の守り方を考えさせ、対応を確認する。 ・通路確保のため揺れがおさまったら窓を開けることを確認しておく。	・待機、対応の確認	
9：30	**避難訓練開始**			
	・放送を静かに聞く ・窓から離れ、机の下に入り身を守る。	・けがの有無を確認 ・出入り口のドアを開ける。 ・状況確認に来た教員に状況を伝える。	・教頭先生が放送１を行う。「訓練　只今　地震が発生しました。」 ・分担に基づき担当所または生徒の状況を確認し、柚木先生へ報告。	緊急地震速報 地震ＣＤ 拡声器
9：36	・待機する。 ・窓に近い者で窓を開ける。			各クラス負傷者は保健委員とともに行動、待機
9：38	・１ACD は美術室へ移動 ・２、３年生は生徒玄関前に<u>靴に履き替えて</u>集合		・教頭先生が放送２を行う。「揺れがおさまりました。被害状況を確認しています。」	※避難経路 １年生は管理棟の階段を使用
	点呼（各クラス男女別人数確認）報告手順：学級委員→学級担任→教頭→校長			
9：41	・集合隊形①で整列。学級委員が生徒を座らせる。 <u>・避難困難者は最終避難場所（３階）で待機。</u>	・隊列を確認する。	<u>・避難困難者の避難支援</u> ・宮崎先生３階にて避難困難者の手当	・両園も点呼を行い。教頭に報告。

9：50	・園児とのペアを確認。 ・指示に従い、手をつないで３Ａ３Ｂ２Ａの順に移動開始（土足）	・担当クラスの移動を促す。	・近政先生、津波警戒の連絡をする。 ・分担表に従って、配置につく。	拡声器 ・亀田先生、田辺先生は訓練に参加できない生徒の対応。
10:00	・３年生は園児とともに各教室へ避難する。机といすをすべて後ろに下げ、待機。 ・２年生は園児とともに特活室３へ行き、机といすをすべて後ろに下げ、待機。	・避難経路の安全確認を行う。		
点呼（各クラス男女別人数確認）報告手順：学級委員→学級担任→教頭→校長				
10:05			・近政先生、避難完了とグラウンドに集合の連絡をする。	放送
10:10	・グラウンドに集合隊形②で整列。 ・指導講評を聞く		○指導講評	
10:15	・教室へ戻り、まとめをする。	・事後指導後、各クラスが担当する廊下掃除の指示を出す。	・解散指示	

※　訓練後の清掃分担（避難経路のみ）

１ＡＣＤ・・・生徒玄関、北棟１階廊下、北棟１～２階の階段
２Ａ・・・・・特活室３・廊下、管理棟階段（小学生の避難経路）
３Ａ・・・・・３Ａ教室廊下、北棟２～３階の階段
３Ｂ・・・・・３Ｂ教室廊下、ピロティー

足跡が残らないようにお願いします。

７．集合隊形

①園児合流場所　生徒玄関前（２，３年生のみ）
②指導講評時　南グラウンド（全学年）

○　男子　　●　女子　　◎　園児

青組　**桃組**

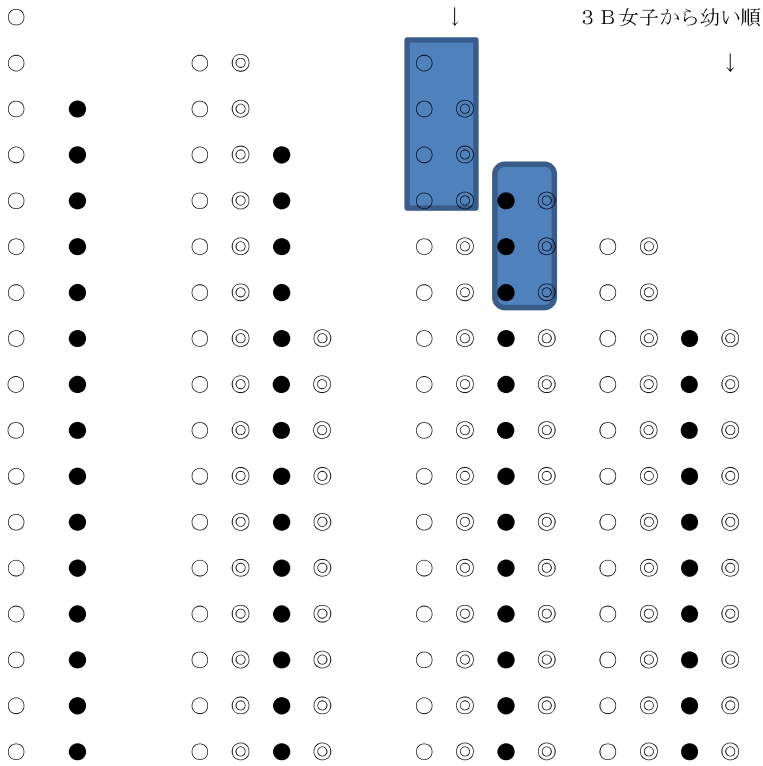
（16）　（10）

CD は 1A の最後尾

チューリップ組
２歳児(12)
コスモス組
３歳児（16）　（計 76）
ゆり組
４歳児(15)
５歳児(7)

執行部７名
３Ａ最後尾に着く
↓

３Ｂ女子から幼い順にペアを組んで座る。
↓



男　女　　男 園 女 園　　男 園 女 園　　男 園 女 園
１ACD(32)　　２A(30)　　３A(29)　　３B(22)　（計 113)※避難困難者を除く

避難困難者　男女１名ずつ　男女１名ずつ

①生徒玄関側が前
②校舎（北方面）向き

社会科指導案

ハザードマップから防災を考えよう		
本時の目標	○　自分たちの地域の自然災害と備えについて自己の考えをもちそれを表現することができる。（社会的な思考・判断・表現）	
学習活動	教師の支援・配慮事項	評　価
1　自然災害について振りかえる。	○　自然災害の写真を提示したり、図資料から、洪水の発生場所を考えることで、本時の学習内容への関心が高められるようにする。	
2　本時の学習課題を知る。	○　「災害発生時の被害と避難」について考えることで、本時の学習課題につなげる。	
津波への備えをどうするか、自分の考えをもち相手に伝えよう。		
3　寄島地区の災害について考える。	○　「浅口市の防災ハザードマップ」を資料として提示し、身近な問題としてとらえることがことができるようにする。	
①　ハザードマップについて知る。	○　ハザードマップの見方と寄島地区の自然災害について説明し、基本となる知識の共通理解が図かれるようにする。	
②　ハザードマップや資料から寄島地区の災害について、「日ごろからの備え」と「発生時の行動（避難）について考える。	○　寄島地区と関連が強い自然災害に絞って考えるようにすることで、自分自身の問題として捉えることできるようにする。 ○　教科書の例を紹介することで、考える参考となるようにする。 ○　記述に困っているようであれば、関連する箇所をよく見て考えるように指示し、少しでも全員が記入できた状態で次の活動に入れるようにする。	○ 自分たちの地域の自然災害と備えについて自己の考えをもちそれを表現することができたか。 （思考・判断） 〈観察〉 〈ワークシートの記述〉
③　班で協力してまとめる。	○　班内で自分の考えを紹介し合い、まとめる内容が広げられるようにする。	
4　まとめた内容を全員で確認する。	○　学級全体の場で意見を出し合ってまとめた内容を確認して共有できるようにし、本時のまとめとする。	
5　本時の振り返りをする。	○　各自「学習したこと」「振りかえり」を振り返り用紙に記入し、本時の学習の振り返りとなるようにする。	

「おおむね満足できる」状況（B）と判断する生徒の姿の例

寄島地区の自然災害への「日ごろからの備え」と「発生時の行動（避難）」について、自分の考えをまとめることができている。

災害伝言ダイヤル利用アンケート（1115，1201 実施）（抜粋）

	返信数		利用数	
	11/15	12/1	11/15	12/1
１年	21	22	8	10
２年	21	24	8	12
３年	9	32	3	24
計	51	78	19	46

（全世帯数 105）
11，15　利用率　約 18％
12，01　利用率　約 44％

※利用感想

・実際に災害が起きた時に、ちゃんと利用できるかどうかわかりませんが、うまく利用できれば便利だと思います。

・使いやすかったです。実際に起こった時は慌てると思いますが、ダイヤル番号も覚えやすいです。携帯電話があるといっても、何が起こるか分からないので、このようなダイヤルがあると思うと安心です。

・連絡が取れない災害時に情報が入手できることはとても安心できる。学校側も全ての保護者に対応する必要がなく、スムーズなのでは。第２報の発信は何時頃です。という続報を知らせるメッセージがあればもっと安心できる。実際の災害時は、今回のようなメッセージが入っていたら、迎えに行っても引き渡してもらえないのでしょうか。

・音声ガイダンスもあり、分かりやすかったと思います。今回は親だけで使ってみましたが、子どもとも一緒にやってみればよかったと思いました。

・パニックにならずに安心できるのは、利用するのに良いと思います。しかし、大規模な地震発生時には、迎えに行くために交通情報も教えていただけるといいなあと思いました。

・使い方の要領は判ったと思います。シンプルな操作ですが、いざというときに忘れぬよう、再度確認しておきたいと思います。他県で大学に通っている姉や兄にも手順を教えておこうと思いました。

・ダイヤルがあるのは知っていたが、使用したことはなかったので、今回でよい機会になりました。日中だと家族はみんなバラバラの所にいるので、声が聞こえるというのは安心すると思います。

※その他感想

・地域をあげての訓練に、子どもが中学生のうちに参加することが出来ず、残念でしたが、以後も地域の大人の一人として参加していきたいと思います。

・土砂崩れの不安があったので、避難の選択肢が増えたことは少し安心材料になりますが、実現は難しいと思いますが、保護者の引き渡しまでも含めた避難訓練の実施は出来ないでしょうか。

・小さい頃から継続して訓練をしてくださることで、親子共に心構えが出来て安心です。小さい頃は「命があれば必ず会えるから、自分の身を守りなさい」と言い聞かせていましたが、合同避難訓練を体験するようになり、自分も助けてもらう側ばかりでなく、協力して、支え合う立場でもあることがわかってきたようです。

・避難訓練や寄島地域のハザードマップを確認することによって、急な事態でも落ち着いて対応できる心構えが大切だと思うので、日頃から家庭で話し合うことが重要だと思いました。

○避難先の校舎３階に逃げた場合、保護者引き渡しまでの時間が長引いた場合の食料等の備蓄などの対応はどうなっているのでしょうか。（冬季の場合は防寒対策）

浅口市立寄島小学校

テーマ「自ら判断して身を守る行動をとることができる児童の育成」

住　所：浅口市寄島町１６０８９番地３
校長名：岡堂　典以史
電　話：０８６５－５４－２０３５

Ⅰ　学校（園）の概要

【学校の概要】
本校は、浅口市の南部に位置し、平成４年に２つの小学校を合併して、町内で唯一の小学校として新設された。学区は、瀬戸内海の海岸線を底辺とした三角形状で、東西４．５㎞、南北３．５㎞、周囲１０．４㎞の広がりをもち、北部には小高い山が東西に走っている。児童数２０５名、９学級で年々児童数が減少しているが、中学校や幼稚園、保育園と隣接しており、「寄島学園」として共に教育活動に励んでいる。また、地域は、学校の教育活動に対して大変協力的である。

【防災上の地理的・地質的な課題】
本校は、海からの距離が500メートル未満であり、将来南海トラフ巨大地震が発生した場合、１階部分は津波の影響が心配される。校舎の耐震化はなされているが、干拓地に建造されているため、周囲の地盤や道路等に影響が出ることが危惧される。また、他郡市の事業所へ通勤している保護者が多いが、他地域との連絡道が土砂災害の影響で分断され、町自体が孤立してしまう危険がある。

【防災教育上の課題】
数年前より寄島地区の保育園・幼稚園・小学校・中学校による合同避難訓練を実施しているが、実際に想定される被害に対応できるか、地域や学校の実情に即した見直しが求められている。その中で、家庭や地域と連携した防災教育や防災管理に関する取組が求められている。

Ⅱ　取組の概要

１　実践のポイント

（１）自ら判断して身を守ることのできる子を育てるための避難訓練の実施（地震・津波対応）
～学校防災アドバイザーの助言を生かして
①　第１回合同避難訓練の実施（水平避難）
②　第２回合同避難訓練の実施（垂直避難）
③　単独での避難訓練の実施（垂直避難）
④　簡易避難訓練の活用

（２）台風の影響下での保護者への児童の引き渡し
①　実際の引き渡しの概要
②　振り返り

２　取組内容

（１）自ら判断して身を守ることのできる子を育てるための避難訓練の実施（地震・津波対応）
～学校防災アドバイザーの助言を生かして

①　第１回合同避難訓練の実施（水平避難）
５月２７日（水）　　予告有り

本年度最初の緊急地震速報を活用した避難訓練である。「緊急地震速報を活用した学習・避難訓練指導例」（岡山県教育庁保健体育課）を活用して事前指導を行った。その際、４月に行った火災対応の避難訓練における反省点を生かして指導した。

今回の避難場所は、運動場（第１次避難場所）→寄島コミュニティーセンターしおさい（海抜約５ｍ、第２次避難場所）とし、水平避難を行った。昨年度までの積み上げを生かして、落ち着いて・安全に・早く避難できたことは良かったが、「第２次避難場所が適切か」「児童自らが判断して身を守る行動がとれているか」という根本的な課題が見えてきた。

②　第２回合同避難訓練の実施（垂直避難）
１０月２２日（水）　　予告有り

学校防災アドバイザーの助言を得て、電源が喪失した状態を仮定した中で、自ら判断して身を守る行動をとることができることを目指した。また、第２次避難場所について吟味した。本校においては、昨年度単独で校舎３階への垂直避

難の訓練を実施していたので、経験の幅を広げることを狙って寄島中学校の３階への垂直避難を行った。しかし、中学校に行くまでの道路の安全に課題が見られ、校内での垂直避難がより適切であると再認識した。

③　単独での避難訓練の実施（垂直避難）

１月１５日（金）　　予告無し

休憩時間中に地震が発生し、地震や津波に関わる特別警報が発令された場合を想定した。避難場所は、運動場（第１次避難場所）→耐震化されている校舎３階(第２次避難場所)とした。予告無しの訓練ということで、一層事前指導や事後指導を大切にした。特に４年生以上の児童においては、浅口市のハザードマップを活用して防災について考える機会を設けた。

④　簡易避難訓練の活用

１１月５日（木）:津波防災の日　他

教職員・児童共に予告無し

自ら判断して身を守る行動をとることができるようにするためには、身の守り方や避難の仕方の原則を学んだ上で、抜き打ちで身を守るための訓練を重ねていくことが有効であると考えて実施した。なお、簡易避難訓練の場合には、管理職と担当以外の教職員にも予告をしないことを原則とし、教職員自身が適切に判断し行動できるように訓練する機会を意図的に設けるようにした。

⑤　その他

１０月２７日（火）に笠岡消防署及び寄島出張所の協力を得て、起震車による地震疑似体験と疑似煙による煙道体験を行った。適切な行動をとることの大変さと大切さを実感し、防災への意識を高めた。

（２）台風の影響下での保護者への児童の引き渡し

①　実際の引き渡しの概要

警報は発令されていないが、台風の影響により海からの風が強く危険が感じられた。そこで、引き渡しを決定して対策本部を設置し、児童を保護者等に引き渡した。

前日　　台風接近が予想されたためメールを配信し、注意を喚起

10：00　引き渡し決定　対策本部設置

10：18　緊急メール配信

未送信者の確認・連絡

10：30　引き渡し開始

12：28　全児童引き渡し完了

②　振り返り

台風という予測可能な場面での引き渡しであったが、「教職員の円滑な動き・連携」「ＰＴＡ役員の方の協力」「迎えに来た保護者・家族の協力」があり、概して良好であった。予測できる場合はこの実践の質を向上させ、予測できない場合はこれを基にして見直していくことを確認した。

（３）その他

学校防災アドバイザーに教えていただいたことや実際に引き渡しを行った経験を基に、再度学校防災マニュアルを見直したり、災害伝言ダイヤルについて家庭への周知を図ったりした。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）避難訓練の実施に関して

○学校防災アドバイザー等の専門家の指導により、正確な情報に基づいた地域や学校の実情に合った避難の在り方について、考え見直すことができた。特に、寄島の地形や地質を考慮した避難経路と場所の設定において多くの助言をいただいた。

○ねらいを明確にして、様々な想定で訓練を重ねることにより、児童は、地震が発生した場合の行動の原則を学び、その原則を基にして、状況に合わせて、自ら判断して身を守る行動をとることが次第にできるようになってきた。また、教職員自身も、訓練を通してより的確な対応の仕方について考えることができた。

（２）児童の引き渡しに関して

○「児童の安全」をキーワードに的確な判断と迅速な対応ができたのは、指示系統の一本化とそれに基づいた臨機応変な対応が行えたからであり、それらは、予測して準備していたからでもある。つまり、訓練を重ねることで、不測の事態への対応の質も向上することを実感した。

２　課題

（１）合同対策本部の在り方や備蓄物の保管の仕方等を含め、他校園や家庭、地域との効果的な連携の在り方について、さらに吟味する必要がある。

（２）避難訓練は、防災学習と連動させながら、様々な場合を想定して継続して行う必要がある。

（３）不測の事態が発生した場合の基本となる学校防災マニュアルを、より実態に即したものへと見直していく。

＜資料１＞　　平成２７年○月○日

平成２７年度　第２回地震・津波対応合同避難訓練計画
（第３回寄島小学校避難訓練）

浅口市立寄島小学校

1　ねらい

（１）緊急地震速報を聞いたり地震が起きたりしたときの対処の仕方を知り，自ら判断して身を守る行動を執ることができる。

（２）第１避難場所に避難後，高所に避難する場合（垂直避難）の避難の仕方を知り，黙って安全に落ち着いて避難することができる。

2　日時　平成２７年１０月２２日（水）　９：３０～１０：２０　（学行１）

3　想定　緊急地震速報後，震度６弱の地震が発生。　＜発生時刻　９：３０＞
地震発生に伴い，地震や津波に関わる特別警報発令。火災の発生はないが，電源喪失。
校舎は耐震化によって安全が確保されているが，備蓄物の関係から中学校に避難することを決定。

4　避難場所及び隊形

（１）第１次避難場所：運動場朝礼台前に避難する。

※　校長基準

○年	○年	○年	○年	○年	○年	は組	ほ組

※　早く出た学年・組から並ぶ

（２）第２次避難場所：浅口市立寄島中学校　３階ピロティー

南校舎		北校舎
	６・１年 ――――― ５・２年 ――――― ４・３年 ――――― ――――――――――	

5　避難経路

第１次避難場所から第２次避難場所への移動は，被害状況を確認後判断する。
避難経路・・・小学校正門→道路横断→中学校の正門→中学校の玄関→西側階段→ピロティー

6　避難順序

（１）９：３０　緊急地震速報後地震発生　**児童自らの判断で身の安全の確保**

＜児童＞

○　緊急地震速報を聞いたら，自らの判断で，**「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所**で，身の安全を確保する。地震が収まり，校内放送等（今回はハンドマイク）の指示があるまで身の安全を確保し続ける。

○　教室の場合は，窓から離れ，赤白帽子をかぶって**机の下に**隠れ，机の脚の上の方を対角線で持つ。

○　廊下等の場合は，窓から離れ，**ダンゴムシのように，身を低くし頭を守る。**

＜教職員＞

○　出入り口・通路を確保する。

○　「自ら動ける」児童を育てるために，児童への行動指示はしない。ただし，上手くできない児童や，地震の効果音の最中に机等から出てきた児童に対しては，指示や注意をする。

（２）揺れが収まった後，教室や避難経路の安全確認をする。（２分内）

ハンドマイクによる指示（教頭）：緊急放送。避難訓練。避難訓練。ただ今地震が発生しました。被害状況を確認しています。児童の皆さんは，指示があるまで，そのまま待ちなさい。
＜２回繰り返し＞

＜児童＞

○　身の安全を確保したまま，指示を待つ。

＜教職員＞

○　担任等は児童の安否確認をした後，その場やその周辺の状況を確認し，危険箇所があれば本部に伝える。（今回は大声で）

○　担任外は避難経路・避難場所の安全確認を行う。危険箇所があればすぐに伝える。

（３）避難経路の指示とともに，第１次避難を開始する。

ハンドマイクによる指示（教頭）：津波警報が発令されました。　児童の皆さんは，次の避難に備えて，靴に履き替えて，運動場の朝礼台の前に黙って集合しなさい。
＜２回繰り返し＞　避難開始。

＜児童＞

○　「おさない」「はしらない」「しゃべらない」「もどらない」を守り，避難する。

○　粉塵に備えて，ハンカチを用意しておく。次の避難に備え，水筒も準備しておく。

＜教職員＞

○　原則として確認用名簿をもち，整列させた後，移動させる。

○　保健室にいる児童は，養護教諭が引率する。点呼は，学級で行う。養護教諭は，緊急連絡カード・引き渡しカード・配慮を要する児童のチェックシート等・救急かばん（養護用）・救急セット（３）を持参する。

（４）第１次避難場所での安否確認を行い，次の避難に備える。

＜児童＞

○　整列し，バディーを組んでの人員確認を受けた後，座って待つ。

＜教職員＞

○　担任は人数確認を慎重（頭を触って数える等）かつ速やかに行い，教頭に報告する。

○年○組　欠席○名　出席○名　出席者全員そろいました。

○　報告後，ペア学年担任１名は，養護教諭より救急セットをもらい，次の避難に備える。

○　諸状況から中学校の３階へ避難することを決定後，教職員２人（今回は教務と非常勤）が中学校までの経路の安全確認を行う。

（５）第２次避難場所（寄島中学校）に避難する。

＜児童＞

○　教頭→６年・１ 年ペア→５ ・２年ペア→４ ・３年ペアの順に第２次避難場所に避難を開始する。第１次避難場所から次の避難場所に避難する場合は，常にペアで移動することを徹底する。

＜教職員＞

○　ペア学年の担任が，分担して先導と後方での安全確認を行い，支援員はその時間の担当学年と一緒に避難する。最後尾には，校長が付く。

（６）第２次避難場所で安否確認をする。

＜児童＞

○　整列し，バディーを組んでの人員確認を受けた後，座って待つ。

＜教職員＞

○　担任は人数確認を慎重かつ速やかに行い，教頭に報告する。

○　教頭から本部（生徒会室）に報告をする。

（７）津波警報の解除

７　役割分担

総指揮　　校長　　総指揮及び計時を行う。

指揮　　教頭　　地震や津波の状況を把握して判断する。
放送（ハンドマイク）によって避難について指示する。

誘導警備主任　　教頭　　避難状況の把握をする。担任から，人数確認の結果の報告を受け，総指揮者に報告をする。

誘導警備　　担任　　学級の児童の人数宇確認を行い，誘導警備主任に報告をする。

救急　　養護教諭　緊急連絡カードを持ち出し，保健室で休んでいる児童の誘導も行う。

搬出　　事務・校務

初期消火　　教務　　※　今回は火災の発生はない。

避難経路の安全確認　教務・非常勤講師

残留児童の確認（教室，廊下，便所，各階の特別教室も確認する。）

避難場所　・・・・・・・・・・・・・い組担任・は組担任・登校支援員
校舎１階西・・・・・・・・・・・・・１年生グッドスタート
校舎１階東・・・・・・・・・・・・・２年生生活支援員
校舎２階西・・・・・・・・・・・・・学級アシスタント
校舎２階東・・・・・・・・・・・・・学級アシスタント
校舎３階西・非常階段西・・・・・５年ろ組担任
校舎３階東・非常階段東・・・・・ほ組担任
体育館・中庭・・・・・・・・・・・ほ組担任
多目的ホール・放送室・図書室・・ＡＬＴ（勤務時は司書も行う。）
保健室・・・・・・・・・・・・・・養護
職員室・・・・・・・・・・・・・・事務
門を開ける・・・・・・・・・・・・校務員

第２次避難場所までの誘導・安全確保

寄島小学校正門前：校長　　寄島中学校正門前：教務

８　避難後の振り返り（事後指導）

（１）全員で　　避難場所から中学校の校庭に移動し，保幼小中全員で，岡山地方気象台の井上様より指導講評をいただく。

（２）各校園で　帰校後，インターロッキングで，学校長の話→安全担当の話の順に振り返る。

（３）各学級で　発達段階に合わせて振り返りを行う。

９　事前指導

（１）避難訓練の目的，心構えについて事前に指導しておく。その際，第２回の避難の反省を生かすようにする。

（２）次の行動の意味も指導しておく。

出口の確保・机の下に頭を隠すこと・着帽・ハンカチで口と鼻を覆うこと・名札の着用　等

（３）資料を基に災害用伝言ダイヤル（１７１）について知らせておく。災害時にはいちばん確実な通信手段として国が推奨している。（毎月１日・１５日は体験利用日となっている。）

１０　その他

（１）避難訓練を行う場合は，事前に教頭より，教育委員会，消防署，警備保障に連絡する。

（２）日頃から赤白帽子を机の横にかけておくようにする。忘れた場合は，制帽をかけておく。また，名札については，表だけでなく裏にも必要事項を記入し常に付けておくことを徹底する。（どのような災害が起きた時も，また，担任以外でも，児童の安全確保を円滑に行うことができるようにするため）

（３）今回の避難訓練において特に次の点に配慮する。

○　緊急事態発生の際には，教頭の指示を仰ぐ。

○　地震の場合は２学年に１セット救急セットを持って移動する。

○　避難場所を移動する度に人員確認を行うことを徹底する。

＜資料２＞

台風の影響による児童の引き渡しの記録　　８月２５日（火）

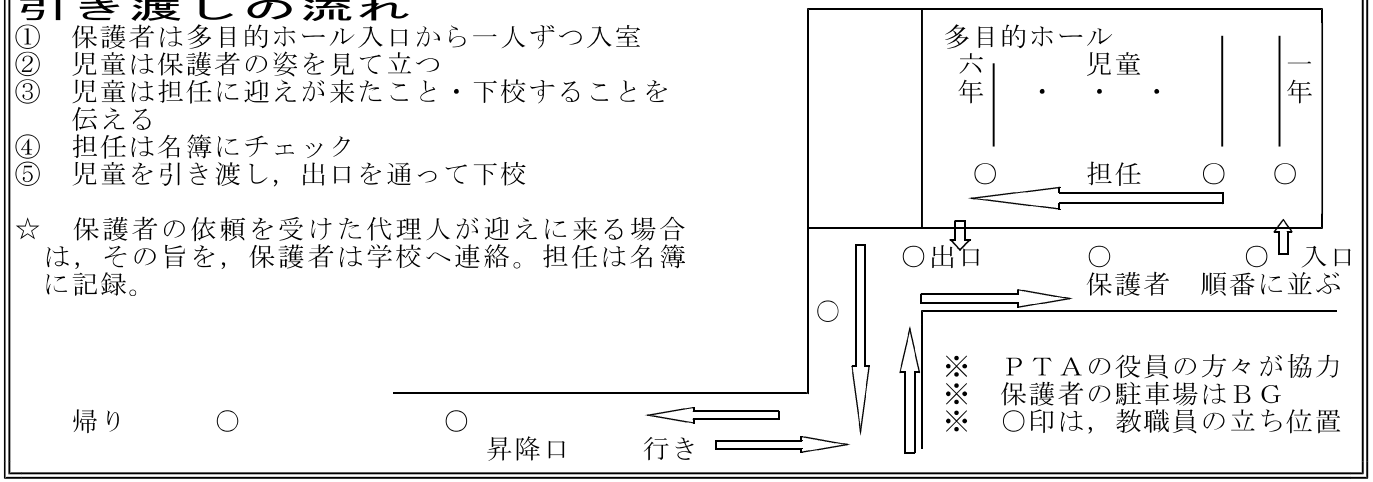
状況　①　台風接近が予想され，前日より，メールにて注意を喚起していた。（心の準備）
　　②　警報は出ていないが，風が強く危険が感じられた。

時刻	対策本部	担任外	担任
１０：００	・下校・引き渡し決定 学校長・教頭・ＰＴＡ会長の相談による ・担任外・担任・児童に指示	・指示を受けて諸準備開始 ①　学級名簿の準備（養護） ②　案内表示作成（保健主事） 掲示（事務・校務） （待機場所の明示・待機場所の入口出口 一方通行の矢印） ③　一方通行を示すコーン・タフロープの設置 （担任外全員） ④　担任外の役割分担確認 ⑤　待機 要所に立つ 入口担当者は引き渡し方を保護者に説明	・児童に下校準備を指示 ・トイレを済まさせる ・昇降口のかさを取りに行かせる ・引き渡し場所となった多目的ホールへ移動・待機させる
１０：１８	・緊急メール配信 ・メール未送信者の確認		
１０：３０	学校長：引き渡し場所で総指示 教頭：職員室で連絡・指示 引き渡し場所巡回 教務：担任不在の学級を担当 事務：電話連絡・受付		
１１：００			・残留児童の保護者に担任より連絡 低中高学年部で連絡・児童管理を分担し合って
１２：２８	全児童下校完了		

引き渡しの流れ

①　保護者は多目的ホール入口から一人ずつ入室
②　児童は保護者の姿を見て立つ
③　児童は担任に迎えが来たこと・下校することを伝える
④　担任は名簿にチェック
⑤　児童を引き渡し，出口を通って下校

☆　保護者の依頼を受けた代理人が迎えに来る場合は，その旨を，保護者は学校へ連絡。担任は名簿に記録。



＜資料３＞

台風の影響による児童の引き渡しにおいて学んだこと

今回の引き渡しは、「教師の円滑な動き・連携」「ＰＴＡ役員の方の協力」「迎えに来た保護者の協力」がありおおむね良好であった。特に、次のような点を学び、再確認した。

○　落ち着いて冷静に行動することが基本である。
○　気付いたことや不明なことは積極的に声に出し、より良い対応にしていく。
○　保護者が引き取りに来ない場合には・・・
- 保護者の引き取りを原則とする。
- 事前に配布する引き渡しカードに、想定される方をあらかじめ書いておいてもらう。（保護者と引き取り人の間で互いに確認し合っておく。また、児童もその旨を知っておく。）
- 保護者の了解のない場合は引き渡さない。
- 引き渡しカードに書かれていないが、保護者より直接学校へ連絡があった場合は引き渡す。但し、後できちんと家に帰ったか保護者に連絡して確かめる。
- 児童が家庭で一人になることは絶対にしない。

○　予測できる場合は、今回の実践の精度を上げていく。予測できない場合は、今回の実践を基に考えていく。
　ベースの部分・・・精度アップ　　それ以外・・・安全をキーワードに臨機応変

＜資料４＞

第１回合同避難訓練の様子

第２次避難場所まで避難する場合は、その後の状況を考え、常に水分補給のための水筒を持って行くように心掛けた。

２学年がペアを組み、避難している。建物の倒壊や落下物等がないか、上学年が気を配りながら避難している。落下物の心配がないが車の走行が予想される経路では、車道側に上学年が並ぶように配慮していた。

第２回合同避難訓練の様子

起震車による地震疑似体験の様子

＜資料５＞

平成２７年○月○日

保護者　様

浅口市立寄島小学校
校長　　岡堂　典以史

災害を想定した児童の引き渡しについて

○○の候，皆様にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
平素より，本校の教育活動に温かいご理解とご支援をいただき，深く感謝いたしております。
さて，南海トラフを発生源とした東南海・南海巨大地震の発生等，大規模災害に備えて，本校では，下記のような対応をとりたいと考えております。
つきましては，別紙の「緊急時引き渡しカード」に必要事項をご記入の上，○月○日までに担任にご提出ください。
また，災害発生時の対応については，日頃からご家庭でも話題にしていただき，お子様にご指導くださいますようよろしくお願いいたします。

記

１　災害発生の規模と引き渡しに関わる基本的な対応（県の指導に準じて）

地震 ※学校を含む地域の震度が基準	震度４	原則，下校させる。 但し，事前に保護者からの届けがある児童については，学校で待機させ，保護者の引き取りを待つ。
	震度５弱以上	**保護者が引き取りに来るまで学校に待機させる。**
津波	**津波警報 大津波警報**	**原則，解除されるまで下校させない。 原則，保護者への引き渡しも行わない。**
その他 （二次災害）	河川氾濫，建物倒壊による通学路の危険	引き渡し，下校の安全確保が困難な場合は，校長判断により，児童生徒を学校に待機させる。

２　大規模災害発生時（特に大地震発生時）の引き渡しの流れ　　※　裏面参照
３　留意点
○　災害に備えて，ご家庭でも必ず，誰が迎えに行くのかお子様にも知らせておいてください。
○　警報発令時は，オレンジクラブは休みとなりますので，対応をお願いいたします。
○　大規模災害時には，電気系統が機能しなくなることが予想されます。つまりメール配信等が不可能になる可能性が高いです。また、携帯電話等もつながりにくいことが報告されています。そこで国や県において推奨されているのが**「災害用伝言ダイヤル」（１７１）**です。「浅口市防災ハザードマップ冊子」（P.１０）にも紹介されておりますので，各ご家庭において，活用の仕方をご理解いただき，もしもの場合に備えていただきますようよろしくお願いいたします。なお，毎月１日と１５日が体験日となっているそうです。詳しくは，NTT のホームページや「浅口市防災ハザードマップ冊子」をご覧ください。

引き渡しの手順一覧

災害対策本部

地震発生
第１次避難完了

学級担任　等

児童の安全確保に向けた状況把握（校内・校区・津波）

・施設の被害状況調査と安全確認，危険箇所の立ち入り禁止
・通学路とその周辺の被害状況及び校区内の家屋の損壊等の状況把握
・津波に関する情報の収集

下校等の判断・決定

・帰宅か保護か
・集団下校か引き渡しか
・引き渡しの場所と時間

指示

二次災害に留意

保護者への連絡

・緊急配信メール等で帰宅か引き渡しか保護か連絡
・**災害伝言ダイヤル**も活用
・メール配信できない状況は，原則として引き渡し
・但し，津波警報発令時は本校の３階で保護し解除されるまで引き渡さない

保護者を誘導

・徒歩または自転車で来てもらう（交通状況による）
・校内への車での進入は厳禁

引き渡しの説明

・学校からの連絡事項もあわせて説明

引き渡し状況の集約

教育委員会への報告

（引　き　渡　す　場　合）

児童の安全確保

引き渡しカード準備

児童を待機場所へ

・児童は，運動場や体育館等，指定された場所に学年ごとに集合

引き渡しカードの照合・帰宅後の連絡先の確認

・引き取り人は学級担任に名前を告げる
・学校管理のカードの内容と照合し，さらに児童との面通しによって，保護者または代理人であることを確認
・引き取り人に学校管理のカードへの署名をもらい，引き渡し者も必要事項を記入
・帰宅後の連絡先が自宅かどうか確認し，異なる場合は，その連絡先を記入してもらう
・引き渡し完了児童は名簿にチェック

引き渡し名簿へのチェック

災害対策本部に報告

残った児童の保護

・引き渡しがいつ頃になるか見通しをもつ

緊急時引き渡しカード（学校用）

浅口市立寄島小学校

ふりがな 児　童　名	年　　組	男 女	生年月日 平成　　年　　月　　日生
住　所		地区名	
保護者名		電　話	
兄弟姉妹	年　　組　名前 年　　組　名前		

連絡順	ふりがな 引き取り者氏名	続柄	連　絡　先 ※「③住所と電話」は，児童の自宅と異なる場合にご記入ください。	引き渡し時チェック欄
1			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：	
2			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：	
3			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：	
4			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：	

引き渡し場所 （寄島小学校以外の場合記入）	**引き取り者　署名** （続柄は，保護者より連絡があった上で，１～４の引き取り予定者以外の人が引き取る場合記入）	**続柄**	**引き渡し日時**	**引き渡し者**
			月　　日 時　　分	担　任 担任外（　　）

帰宅後の連絡先の確認（引き渡し時に該当箇所に〇をする）
自宅　　１　　２　　３　　４　　その他（　　）

緊急時引き渡しカード（家庭控え用）

浅口市立寄島小学校

ふりがな 児　童　名	年　　組	男 女	生年月日 平成　　年　　月　　日生
住　所		地区名	
保護者名		電　話	
兄弟姉妹	年　　組　名前 年　　組　名前		

連絡順	ふりがな 引き取り者氏名	続柄	連　絡　先 ※「③住所と電話」は，児童の自宅と異なる場合にご記入ください。
1			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：
2			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：
3			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：
4			①携帯電話： ②勤務先電話： ③住所と電話：

※　緊急時に誰が引き取りに行くのか，引き取り者にもお子様にも必ず伝え確認をしておいてください。

浅口市立寄島幼稚園

テーマ「合同避難訓練を中心とした防災教育の充実に向けて」

住　　所：浅口市寄島町１６０８９番地４
園　長　名：三宅　恵子
電　　話：０８６５－５４－３９２５

Ⅰ　園の概要

【園の概要】

本園は、浅口市の南部に位置し、平成４年に２つの幼稚園を合併して創立された。園区は瀬戸内海の海岸線を底辺とした三角形状で東西4.5km、南北 3.5km、周囲 10.4km の広がりをもち、北部には小高い山が東西に走っている。園児数は26名、クラスは2クラスで年々園児数は減少しているが、保育園、小学校、中学校と隣接しており、「寄島学園」として共に教育活動に励んでいる。また、地域は、園の教育活動に対して大変協力的である。

【防災上の地理的・地質的な課題】

本園は、海からの距離が 500 メートル未満であり、将来南海トラフ巨大地震が発生した場合、津波の影響が心配される。園舎の耐震化はなされているが、干拓地に建造されているため、周囲の地盤や道路等に影響が出ることが危惧される。また、他郡市の事業所へ通勤している保護者もあり、他地域との連絡道が土砂災害の影響で分断され、町自体が孤立してしまう危険がある。

【防災教育上の課題】

数年前より寄島地区の保育園・幼稚園・小学校・中学校による合同避難訓練を実施しているが、実際に想定される被害に対応できるか、地域や園の実情に即した見直しが求められている。その中で、家庭や地域と連携した防災教育や防災管理に関する取組が求められている。

Ⅱ　取組の概要

1　実践のポイント

（1）保・幼・小・中合同避難訓練の実施

＜学校防災アドバイザーの助言を生かした訓練＞

①第１回合同避難訓練

②第２回合同避難訓練

（2）年間計画による月１回の避難訓練の実施

①火災・地震・津波を想定した避難訓練

②保育園との合同避難訓練

（3）地域との連携による防災教育

①幼年消防クラブ活動

②寄島消防署の現場指導

2　取組内容

（1）保・幼・小・中合同避難訓練の実施

①第１回合同避難訓練（水平避難）

５月２７日（水）　予告有り

・事前に保育園・幼稚園・小学校・中学校と打ち合わせ会議をもち、連携のもと実施。

・第１回合同避難（津波）訓練実施計画の作成　【資料１参照】

・防災行政無線放送・緊急地震速報システムを活用した避難訓練の実施。

・第１避難場所である園庭に避難している所へ中学校教員と生徒数名が誘導に来てくれ、中学校グラウンドに避難後、津波に備え、中学生と手をつないで寄島コミュニティーセンターしおさいまで避難した。

・中学生の誘導のもと、緊張感の中にも安心して安全に避難することができた。

・中学校グラウンド隊列については、昨年度の反省を生かし人数確認ができやすい隊列でよかった。

②第２回合同避難訓練（垂直避難）

１０月２２日（水）　予告有り

・第２回合同避難（津波）訓練実施計画の作成　【資料２参照】

・地震緊急速報音源を流しての訓練実施

第１避難場所（園庭）→中学校生徒玄関前→待機している中学生とペアーになり手をつないで校舎３階特別活動室まで避難した。
階段の昇降が気になったが、中学生のリードのもと不安なく安全に避難できた。

（２）年間計画による月１回の避難訓練の実施

①災害状況（火災・地震・津波）を想定し、ねらいをもって避難訓練を毎月実施。【資料３参照】

・『お・は・し・も』の約束を守り、火災時にはハンカチで鼻や口をおさえ煙から身を守る行動は訓練を積み重ねていく中で身についてきている。

・事前指導や振り返り時には、視聴覚教材を取り入れ、幼児に分かりやすく災害の恐ろしさや命を守る防災教育について指導をしている。

②幼稚園･保育園合同での避難訓練を５月に実施。一緒に遊んでいる中での避難訓練を行い、避難場所や職員の体制を共通理解した。

③本年度、緊急時引き渡しカードを作成し、保護者に協力を促し連携をもつようにしている。

（３）地域との連携による防災教育

①幼年消防クラブ活動

１０月２５日（日）

・園児とその保護者を対象に、寄島消防団・寄島消防署の方の協力を得て、防火防災に関する知識を身につけたり、消防団とその活動を身近に感じたりできることをねらいとし消火体験を実施した。保護者は消火器を使っての初期消火体験、園児は放水体験をした。親子で消火活動を体験したり、消防自動車や救急車をみせてもらったりして防火への意識を高めることができた。また、家庭でも防火防災について話し合うよい機会となった。

寄島消防署の現場指導

１２月１０日（木）

・寄島消防署の現場指導のもと、地震から火災が発生したことを想定して避難訓練を行った。日頃の積み重ねから速やかに避難でき、実際に消防署の方から話を聞き、火遊びをしない約束、災害から命を守る大切さを学ぶことができた。また、職員も消防署の方から指導を受け、火災予防への認識を深めることができた。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）保・幼・小・中合同避難訓練の実施に関して

○自園だけで避難するのではなく中学生が援助してくれる訓練をすることによって、お互いに助け合い中学生から優しさをもらう経験ができ、将来的には自分も人を助けようとする気持ちの芽生えを養うことができた。

○合同避難訓練をすることで、子ども自身に安心感が生まれ、避難訓練をすることの大切さや命の大切さを知ることができた。

○学校防災アドバイザー等の専門家の指導や他校園の先生方との協議により、地域や園の課題が明確になり教職員が適切な対応について確認することができた。

（２）年間計画による避難訓練に関して

○毎月避難訓練を行うことで、避難経路や避難場所が定着してき速やかに避難行動がとれ、職員の意識も高まっている。

（３）地域との連携による防災教育に関して

○地域の防災に関する意識も高いので、お互いに連携し合って防災教育に取り組んでいる。特に地域の消防団・消防署との連携は取れてきているので今後も継続していきたい。

２　課題

（１）災害時幼稚園周りは訓練通りにいかないことも想定される。今後は学校防災アドバイザーなどの助言をあおぎながらどんな状況が起きても対応できるような訓練と、災害状況に応じた安全な避難場所について他校や家庭・地域と共に考えていく必要がある。

（２）次年度はこども園に移行し、土曜日・早朝・延長保育時など、乳幼児を含めた避難の概要・体制・職員の配置など精査していく必要がある。

（３）今年度「緊急時引き渡しカード」を作成したが、保護者への使用方法の徹底や実際に「緊急時引き渡しカード」を使っての訓練を実施することができなかったので、今後は保護者への引き渡しまでの概要を明確にし、機能できる訓練をしていく必要がある。

【資料１】

平成２７年度　　第１回　幼小中合同避難（津波）訓練実施計画

浅口市立寄島幼稚園

１　ねらい

（１）津波の避難訓練に参加し，いろいろな人の指示をよく聞いて安全に落ち着いて行動する。

（２）実際に避難訓練を経験することで，中学生と一緒に行動することや園外の避難経路や避難場所を知る。

（３）津波の避難訓練に緊迫感をもって参加することにより，非常時に備える心構えと行動力を身に付ける。

２　日　時

平成２７年５月２７日（水）　９：５５～１１：４５（雨天延期）

雨天時の予備日　平成２７年６月　３日（水）　９：５５～１１：４５（雨天中止）

３　想　定

南海トラフが震源地とみられる震度５強の地震が発生　発生時刻（１０：０５）

地震発生に伴い、津波警報発令

４　評価の観点

・指示を聞いて、落ち着いて行動できたか。

・中学生と３人組が迅速にでき、避難場所まで誘導してもらうことができたか。

・地震・津波に対する基本的な避難の仕方が理解できたか。

５　方　法

（１）　９：５５～担任は自分の係や避難方法・避難経路の再確認を行う。

（２）　１０：０５地震発生

防災行政無線放送・緊急地震速報確認後、非常ベルを鳴らす。

避難訓練を始めます。　今，地震がおきています。みなさんは担任の先生と一緒に机の下に入って大切な頭を守りましょう。(擬音)

地震はおさました。そのままじっとして次の放送があるまで待ちましょう。

・　担任は余震に備え，窓や出入り口を開ける。

・　園長代理は，けがの有無の確認や避難経路の状況を確認し園長に報告する。

地震はおさまりましたが、大きな津波が来るかも知れません。皆さんは先生の言われることをよく聞いて、今日は帽子をかぶって靴に履き替えて消防自動車のところへ集まりましょう。

（３）消防自動車の前に、クラス別に避難整列できたら座る。

点呼（クラス別人数確認）報告手順　：　担任→園長代理→園長

（４） 通園路を通って横断歩道を渡り，中学校グラウンドに避難する。
※中学校教員と生徒が誘導に来てくれる。
１０：１５クラス別に中学生と３人組みになって座る。

点呼（クラス別人数確認）報告：担任→園長代理→園長→中学校教頭→中学校長

（５） １０：２５　コミュニティーしおさい横広場まで中学生と３人組で避難する。

点呼（クラス別人数確認）報告：担任→園長代理→園長→中学校教頭→中学校長

（６）指導・講評を聞く
（７）１０：４０　指示に従い中学生と手をつないだまま中学校グラウンドに帰る。

点呼（クラス別人数確認）報告：担任→園長代理→園長→中学校教頭→中学校長

（８）帰園後テラスに座り避難訓練について振り返り，幼児に分かりやすく反省点や指導内容について話をする。

６　その他

・随時、視聴覚教材を使って，地震や津波の恐ろしさを知らせ，基本的な避難行動が身に付くよう事前指導をしておく。
・園庭に整列の際は、青組男女１列ずつ，桃組男女１列ずつに並ぶ。（人数確認・残留者の確認を迅速にするため）
・中学校　安全担当の先生と連絡を取り合いながら，計画を立て実施する。
・避難訓練を行う場合は、事前に自衛消防訓練届を寄島消防署に２部提出しておく。
・教育委員会・笠岡消防署・寄島消防署・警備保障に連絡を入れておく。

中学生と手をつないでしおさいまで避難

中学校グラウンドに避難

【資料２】

平成２７年度　　第２回保幼小中合同非難（津波）訓練実施計画

浅口市立寄島幼稚園

１　ねらい

（１）　地震・津波に際し、今までの避難訓練を生かしながら放送や先生の指示をよく聞いて、黙って安全に早く避難できる。

（２）　第１避難場所に避難後、津波発生時、第２避難場所である寄島中学校３階に避難する場合の避難の仕方を知る。

２　日時

平成２７年１０月２２日（木）　９：３０～１０：４５【雨天延期】
※７：３０の時点で決定

雨天時の予備日　平成２７年１０月２９日（木）９：３０～１０：４５【雨天中止】
※　７：３０の時点で決定

３　想定

南海トラフトが震源地とみられる震度６弱の地震が発生　発生時刻（９：３０）
地震発生に伴い、津波警報発令

４　評価の観点

・　地震・津波に対する基本的な避難の仕方が理解できたか。
・　指示を聞き、真剣に迅速かつ安全に避難できたか。

５　避難場所及び避難隊形

（１）　第１避難場所：幼稚園園庭　消防自動車前
クラス別に整列　座る

（２）　第２避難場所：寄島中学校３階　特活室
体育館前、中庭で待機している中学校２年生Ａ組の生徒に手をつないでもらい、３階まで土足のまま避難。

６　避難順序

（１）　９：３０地震発生　地震緊急速報音源を流す。

（２）　非常ベルを鳴らし、放送を静かに聞く。

> 今大きな地震がありました。先生の言われることをよく聞いて、机の下に入って大切な頭を守りましょう。（擬音）

（３）　放送終了後、担任の指示に従い机の下に入り身を守る。（担任は、出入口を開ける。）

> 地震はおさまりましたが、大きな津波が来るかもしれません。先生の言われることをよく聞いて、今日は、帽子をかぶって靴に履き替えて消防自動車の所へ静かに集まりましょう。

（４）　消防自動車の前に、クラス別に避難整列できたら、座る。

点呼（クラス別人数確認）報告手順：担任→園長代理→園長

※報告の仕方

○組　在籍○名　出席○名　欠席○名　よって○名います。

（５）　確認・報告後

ここにいると高い津波にさらわれてしまいます。これから、寄島中学校まで避難します。中学校に着いたら、お兄さん、お姉さんにしっかり手をつないでもらって、階段を上って３階まで避難します。

（６）　第２避難場所へ移動する。

（７）　**９：５０**　中学校生徒玄関前に着いたら、待機している中学生とペアーになり、３階特活室まで避難する。

点呼（クラス別人数確認）報告手順：担任→園長代理→園長→中学校教頭→中学校長

（８）　**１０：０５**　避難完了とグラウンド集合の放送指示

（９）　**１０：１０**　中学生とペアーで、グラウンドに集合整列

（１０）　指導講評を聞く。

（１１）　**１０：１５**　お兄さん、お姉さんにお礼を言って幼稚園まで帰る。

（１２）　帰園後テラスに座り、避難訓練の振り返りをする。

６　その他

（１）　地震・津波の避難訓練について、事前指導を各クラスでしておく。

（２）　救急バック・着替え・笛・携帯電話を持つ。各担任（緊急連絡名簿の確認）

（３）　緊急時受渡し書・ラジオ付き懐中電灯・筆記用具入りバックを持つ。園長代理

（４）　救急バック　生活支援員

（５）　避難訓練を行う場合は、事前に自衛消防訓練届を寄島消防署に２部提出しておく。
当日は、笠岡消防署・寄島消防署・警備保障に連絡をしておく。

中学生と手をつないで

中学生とペアーになる

【資料３】　　平成２７年度　避難訓練消防・防災計画

	災　害　状　況	○ねらい　　・指導内容	留　意　事　項
４月 ５月	湯沸し場から火災が発生 地震（津波）発生 震度６強の地震発生により、津波警報発令 （保幼小中合同避難訓練）	○避難訓練の大切さを知る。 ・非常ベルの音や園内放送が聞こえたら、立ち止まって聞くことを習慣づける。 ・非常ベルの音や放送を静かに聞く。 ○避難の仕方を知る。 ・年少児は、年長児が避難している様子を見る。	・紙芝居やビデオなどの視聴覚教材を通して事前指導をする。 ・事前に放送設備や非常ベルの点検をしておく。 ・保育園児との訓練の実施。
６月	湯沸し場から火災が発生	○合図が鳴ったら安全に気を付けて避難することを知る。 ・放送を静かに聞く。 ・避難経路を知る。 ・三つの約束（押さない・はしらない・静かに）を守って園庭に集合する。	・慌てないで指示をよく聞いて行動することの必要性を知らせる。 ・クラス名簿や救急箱・出席簿を携行する。
９月	軽度の地震（津波）発生	○地震の恐ろしさや地震時の基本行動を知る。 ・火事の時とは違う身の守り方や避難の仕方を知る。 ・津波に対する避難の仕方を知る。 ・津波発生時の避難経路や避難場所を知る。	・視聴覚教材を利用して、地震や津波について事前指導をしておく。
10 月 10 月	避難経路の確認 地震（津波）発生 震度６強の地震発生により、津波警報発令 （保幼小中合同避難訓練）	○津波警報発令時の避難場所を知る。 ・鏡地区の寄里農免道まで歩いて、避難経路を知る。 ○避難指示を聞き、指示通りに速やかに避難することができる。 ・「おはしも」の約束を守りながら避難する。 ・中学生に手をつないでもらいながら、安全に避難する。	・事前に避難経路や避難場所の下見をしておく。 ・こども未来課や中学校など関係機関との連絡を取り合う。
12 月	軽度の地震が発生し、その後ボイラー室から出火	○地震から火事の訓練で、指示通り速やかに避難できる。 ・二次災害の恐ろしさを知る。 ・「落ちてこない」「倒れてこない」場所に逃げることができる。	・緊急地震速報の報知音に普段から慣れさせておき、安全な所に身を寄せることができるようにする。
１月	不審者侵入避難訓練	○先生の指示に従って、落ち着いて避難する。 ○防犯教室を受け、不審者に遭遇した時の対応の仕方を知る。	・玉島警察署に協力を依頼する。また、防犯教室も行い、家庭での防犯についても指導する。
２月	園舎西側の小学校体育館から出火	○出火場所がどこかを知り、落ち着いて行動できるようにする。 ・場合によっては、避難場所が変わることを知り、合図を聞くことの大切さを知る。	・火災の場所により、避難場所がどこになるかを共通理解しておく。
３月	自由遊び中、湯沸し場から出火	○園内のどこにいても、笛の合図や指示の声を聞いて避難できる。 ・誘導の放送がなくても、避難することがあることを知る。 ・担任が近くにいなくても、自分で判断して避難できる。	・幼児一人一人の性格と行動を十分に把握し、教師間で連携をとる。 ・教師が落ち着いて的確な判断で、園児の安全確保に努める。

緊急時引き渡しカード

幼稚園用

浅口市立寄島幼稚園

ふりがな 園児氏名		性別	男・女	平成　　年　　月　　日　生
住所	自宅電話（　　）　地区名：【　　】			

連絡順	引き取り者氏名（ふりがな）	連絡先	続柄
1		勤務先電話： 携帯： 住所：	
2		勤務先電話： 携帯： 住所：	
3		勤務先電話： 携帯： 住所：	

引き渡し場所	引き取り者	続柄	引き渡し日時	引き渡し者
			月　　日（　） 時　　分	

引き取り者がいない園児への配慮

1 保護者等に園児が引き取られるまで、安全な場所に集め、その場所から離れないように座らせて落ち着かせる。
2 必ず教職員が付き添い、園児に安心感を与え、心のケアーに努める。
3 電話や通信機関が回復すれば、保護者等の緊急連絡先に連絡を取る。

緊急時引き渡しカード

家庭控え用

浅口市立寄島幼稚園

ふりがな 園児氏名		性別	男・女	平成　　年　　月　　日　生
住所	自宅電話（　　）　地区名：【　　】			

連絡順	引き取り者氏名（ふりがな）	連絡先	続柄
1		勤務先電話： 携帯： 住所：	
2		勤務先電話： 携帯： 住所：	
3		勤務先電話： 携帯： 住所：	

引き取り者がいない園児への配慮

1　保護者等に園児が引き取られるまで、安全な場所に集め、その場所から離れないように座らせて落ち着かせる。
2　必ず教職員が付き添い、園児に安心感を与え、心のケアーに努める。
3　電話や通信機関が回復すれば、保護者等の緊急連絡先に連絡を取る。

Ⅱ　防災に関する取組

３　県立学校

備前緑陽高等学校

岡山西支援学校

岡山県立備前緑陽高等学校

テーマ「地域連携と共助を考慮に入れた防災教育の実践」

住　　所：備前市西片上９１－１
校　長　名：萩原　康正
電　　話：０８６９－６３－０３１５

Ⅰ　学校の概要

【学校の概要】学校規模・学校特色など

本校は、「ものづくり」をはじめ県内の工業教育の中心的役割を果たしてきた備前高等学校と、普通科進学校として優れた進学実績を残した備前東高等学校の歴史と伝統を引き継ぎ、平成15年に開設された総合学科高校である。

本校の教育方針は、「夢実現～心豊かに輝け個性～」の校訓のもとに、一人ひとりの個性を尊重し、主体的に学ぶ態度を養い、将来地域に貢献できる人材を育成することである。生徒たちは「夢実現」に向けて、人文社会、自然科学、総合技術（機械、電気、化学、伝統工芸）、健康福祉、そして情報ビジネスの５つの系列に分類される科目の中から、将来の進路にあった学ぶべき教科、科目を選択して、独自の時間割をつくり主体的に学習をすすめている。また、生徒会活動、部活動やボランティア活動にも積極的に参加し、校内の随所で明るく溌剌(はつらつ)とした活動が展開されている。

【防災上の地理的・地質的な課題】

本校は、リアス海岸の片上湾奥に位置し、南海トラフ地震による津波被害が想定されると同時に、切り立った山の斜面が周囲に迫り大雨による土砂災害も視野にいれなければならない。

【防災教育上の課題】

生徒の防災意識をより現実のものとして高めると同時に平成25年より実施している１園２校合同避難訓練の関係から協同での教育が必要でありまた自治体や地域住民の方との連携も必要になる。

Ⅱ　取組の概要

１　研究のポイント

（１）地域と連携した防災体制の構築
　①実践委員会の設置と開催
　②１園２校（片上認定こども園・片上小学校・備前緑陽高校）・地域住民合同避難訓練

（２）「防災について考え主体的に行動する態度」の育成
　①抜き打ち避難訓練
　②教員防災教育研修講演会
　③福島防災スタディーツアー
　④被災地にける防災ボランティア研修（岩手県）
　⑤学校訪問（兵庫県立舞子高等学校）
　⑥防災教育公開授業・シンポジウム

（３）学校生活への実践
　①校内防災体制の見直し

２　取組内容

（１）地域と連携した防災体制の構築

【実践委員会組織】

備前市市長室危機管理課
東備消防組合
備前市立片上小学校
片上認定こども園
片上地区自治会連絡協議会
岡山県教育庁保健体育課
岡山県立備前緑陽高校

①実践委員会
　第１回　平成27年７月６日（月）
　　内容　本事業の説明、年間計画
　第２回　平成27年９月16日（水）
　　内容　事業の中間報告と公開授業・シンポジウムなど今後の予定と打ち合わせなど
　第３回　平成27年12月15日（火）

内容　事業報告と今後の課題

②１園２校・地域住民合同避難訓練

平成 27 年 10 月　9 日（金）9:20～11:30

目的　地震・津波発生時における安全な対処・避難の方法を体得させ、生命尊重の意識を高める。さらに１園２校合同避難訓練を実施することで、園児、児童、生徒の校種、年代を越えた防災に関する共助の実践を培う。同時に各校園教職員の役割分担および担当者の確認、連携の機会とする。

⑵ 「防災について考え主体的に行動する態度」を育成するための研修

①抜き打ち避難訓練

平成 27 年７月９日（木）

教員、生徒の避難意識と行動状況を現状把握し避難時の様子をもとに課題を発見する。

②教員防災教育研修講演会（本校教員対象）

平成 27 年７月 14 日（火）

～自然災害から命を守るために～

講師　岡山地方気象台防災気象官　井上　達二氏

③福島防災スタディーツアー

「福島×岡山復興学生サミット」に参加した生徒の意見から防災意識の涵養を目的とした社会貢献活動を福島県で実施し体系的な活動につなげて行くことを目的に実施した。

平成 27 年８月４日(火)～６日(木)

訪問者　本校教員１名　生徒５名

場所　福島県相馬市周辺

④被災地にける防災ボランティア研修（県教育委員会主催）

～岡山県実践的安全教育総合支援事業～

平成 27 年８月 26 日（水）～28 日（金）

訪問者　本校教員１名　生徒１名が参加

場　所　岩手県上閉伊郡大槌町　他

⑤学校訪問（兵庫県立舞子高等学校）

平成 27 年９月 24 日（木）

訪問者　教員２名

内容　施設見学、災害ボランティア活動の様子の聞き取り、授業見学等

⑥防災教育公開授業・シンポジウム

平成 27 年 12 月 15 日（火）

５限　公開授業　（各教科）

６限　シンポジウム

参加者　県教育委員会、行政代表、地域代表、生徒、教員

内容　各教科での防災関連授業に続き参加者全体で　シンポジウムにより各立場での防災のあり方や課題が提示され防災意識が高まった。

（３）防災計画の見直し

①大雨警報時の内規の見直し

第３回実践委員会で本年度の取組と成果が発表された後、本校の立地条件や防災上の特徴を鑑みて内規の見直しをしてみてはどうかという提案が出た。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）地域との連携強化

従来からの１園２校合同避難訓練に加え地域住民の参加もあった。日頃交流のない地域行政と情報交換する機会に恵まれ防災を通して地域の一員であることを再確認できた。また、地域が期待する本校のあり方を共有できた。

（２）生徒の防災意識高揚

本年度学校評価アンケート「学校で地震や災害が起こった場合、どのように行動すればよいか知らされている」において、「あてはまる、ややあてはまる」の合計が昨年度 81%から 84%へアップしている。

（３）校内の防災計画の見直し

この研究事業を受けた成果として内規の見直しを検討してはどうか、という意見が出た。本校では暴風警報での休校措置はあるが、立地条件から大雨警報（土砂災害）での休校措置を検討することになった。

２　課題

（１）本校の実践内容の継続

本年度は、防災に関するスタディーツアー、全教科での公開授業、シンポジウムなど多数の戦略的新規事業を実践した。それらの学習効果も考えながら継続することが課題である。

（２）地域と連携した防災教育

地域から防災も含め様々な期待を寄せられている地域密着型の本校の立場から地域連携を深めながら活動を続けていくこと、さらに教職員間の連携もさらに深めながらどう防災教育、活動を継続するのかが課題となる。

防災教育シンポジウムの様子

防災教育　各教科の年間指導計画

＜国語＞

１年　　５月　『羅生門』における天災について考える　　１２月　防災標語を作る

２年　　９月　防災川柳を作る　　１０月　防災記事を読んで意見文を書く

　　１１月　『ナイン』における人災について考える　　１月　防災書き初めをする

３年　１０月　地域の防災について話し合う

　　１１月　防災時に伝わりやすい放送原稿を考える

　　１２月　防災新聞の作成

＜数学＞

１年　１１月　地震の起こる確率について（東京直下巨大地震の起こる確率急上昇！）

　　１月　データの分析（災害のデータを分かりやすく分析する）

２年　１１月　対数関数について（地震のマグニチュードに対数を使うわけ）

＜英語＞

１年　１１月　英語会話 Lesson.8 "Telling the Way" 道案内、緊急時の英語

　　１２月　コミュ英Ⅰ Lesson.7 "Flying Wheelchairs" ボランティア活動について

２年　　５月　コミュ英Ⅱ Lesson.1 "Many Languages, Many Letters" 各言語での防災表記を考える

　　１０月　英語表現Ⅰa "For Communication 2" 道案内、緊急時の英語

３年　　６月　コミュ英Ⅱb "From Small Factories to the World" 防災・安全の観点からのものづくり

　　９月　英語表現Ⅰb "Further Activities" エネルギー問題について

＜理科＞

１年　１０月　物理基礎：波の性質　横波、縦波、干渉、重ね合わせの原理、地震波について学ぶ

　　２月　物理基礎：エネルギーとその利用　原子核、同位体、核反応、原子炉など　放射線測定で放射線量を測定し、自然界においても放射線が存在することを確認する

２年　　５月　物理：加速度 m/s2 と gal(ガル)の関係性

　　１２月　生物基礎：生態系とその保全

　　１月　生物基礎：生態系とその保全

３年　　５月　化学：アルカリ金属元素　　１１月　生物：生物の進化と系統

　　１２月　放射線とその性質　霧箱の製作、放射線の観察　半減期

＜地歴・公民＞

１年　　４月　世界史：灌漑農業

２年　　４月　世界史：古代オリエント世界、古代エジプトの治水事業

５月　地理：生活の舞台としての地形プレートテクトニクス、活断層、後背湿地と自然堤防、リアス海岸

世界史：ウェウィス山の噴火

６月　地理：大気の大循環と地域による気候の違い、降水のメカニズム、モンスーン、干ばつ、風のメカニズム、台風

７月　地理：南アジアの自然環境と生活・文化、変動帯と安定陸塊、モンスーン

９月　世界史：中世ヨーロッパの森と開墾事業

１０月　地理：地図で読み解く地球的課題、バングラデシュの海抜高度と洪水の地域分布

１１月　地理：世界の環境問題、砂漠化酸性雨、地球温暖化

世界史：中世ヨーロッパの森と開墾事業

１２月　地理：身近な地域と地図、地理情報システム、GPS

１月　地理：自然環境と防災、プレートの境界、火山、洪水、土石流、台風、高潮、干ばつ、豪雪、地震、液状化、地滑り、火山、火砕流、土石流、ハザードマップ防風林

２月　地理：洪水と治水、洪水への対策、大都市の集中豪雨、河川流出を減らす工夫、ヒートアイランド

３年　　４月　世界史：産業革命と環境変化

１１月　日本史：大正期の出来事として、関東大震災を紹介。震災時の朝鮮人虐殺などを取り上げ、災害時での注意すべき点を考えさせる。

１２月　世界史：チェルノブイリ原発事故

＜美術＞

１年　　９月　防災を呼びかけるピクトグラムのリデザイン

２年　　９月　持つことが「クールだ」と思える防災グッズ入れのデザイン

３年　　９月　ユニバーサルデザインの視点を取り入れた防災マップづくり

＜情報＞

１年　　４月　災害時の情報通信手段について

１０月　プレゼン実習「県民ショー」での各県防災調べ

＜商業＞

３年　　９月　災害時のインターネット利用の事例（水）電子商取引）

＜保健体育＞

１年　　１月　応急手当の意義と基本
　　２月　日常的な応急処置
　　３月　心肺蘇生法の原理とおこない方
２年　　４月　集団行動

＜家庭＞

１年　　４月　「家庭基礎」災害と地域社会について
　　１０月　「家庭基礎」ハイゼックス米について（非常食）
　　１月　「家庭基礎」子育て支援と防災について
２年　　５月　「フードデザイン」ハイゼックス米について（非常食）
　　６月　「子どもの発達と保育」保育と安全について
　　１１月　「ファッション造形基礎」防災ずきん
３年　　５月　「フードデザイン」ハイゼックス米について（非常食）

＜福祉＞

１年　　７月　ボランティアについて
２年　　６月　「生活支援」簡易便器、おむつ
　　８月　避難所での食事･入浴について　上級救命講習　実習施設における防災管理
　　１０月　リラクゼーション
３年　　６月　実習施設における防災管理
　　７月　片上地区の危険箇所と憩いの場マップづくり
　　８月　実習施設における防災管理

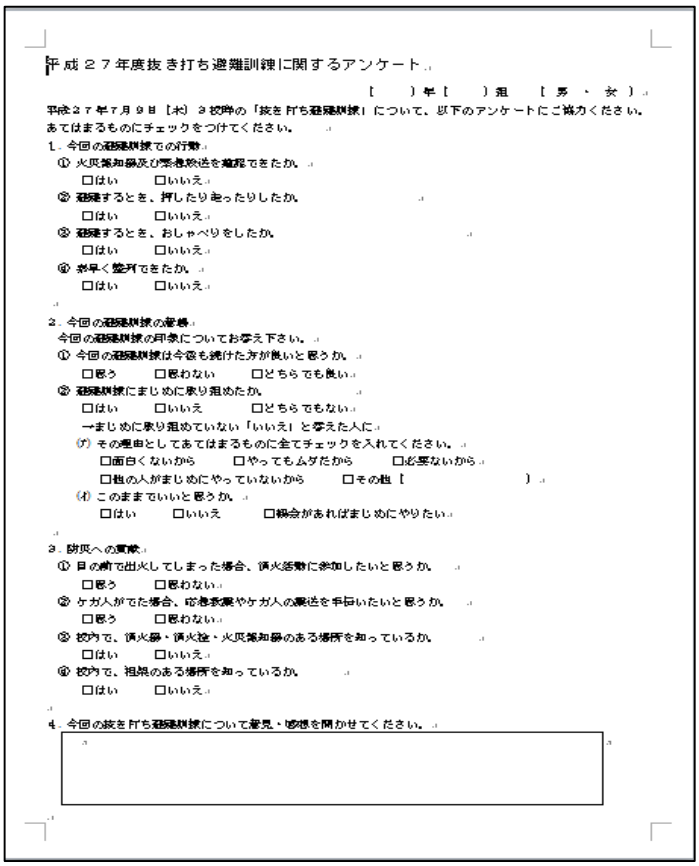
＜工業＞

３年　　６月　化学：環境実習による学校西側に流れる流川の水質調査・流れの様子の変化の確認を行い、天候（気温、気圧など）とのの関係について考える。
　　９月　化学：環境実習による学校西側に流れる流川の水質調査・流れの様子の変化の確認を行い、天候（気温、気圧など）とのの関係について考える。
　　１１月　化学：環境実習による学校西側に流れる流川の水質調査・流れの様子の変化の確認を行い、天候（気温、気圧など）とのの関係について考える。

実践委員会の様子（第１回、第３回）

抜き打ち避難訓練の様子（７月９日）

実施後のアンケートと結果の抜粋



平成２７年度抜き打ち避難訓練に関するアンケート

［　　］年［　　］組　［男・女］

平成２７年７月９日［木］３校時の「抜き打ち避難訓練」について、以下のアンケートにご協力ください。
あてはまるものにチェックをつけてください。

1．今回の避難訓練での行動

① 火災報知機及び緊急放送を確認できたか。
□はい　□いいえ

② 避難するとき、押したり走ったりしたか。
□はい　□いいえ

③ 避難するとき、おしゃべりをしたか。
□はい　□いいえ

④ 素早く整列できたか。
□はい　□いいえ

2．今回の避難訓練の感想

今回の避難訓練の印象についてお答え下さい。

① 今回の避難訓練は今後も続けた方が良いと思うか。
□思う　□思わない　□どちらでも良い

② 避難訓練にまじめに取り組めたか。
□はい　□いいえ　□どちらでもない
→まじめに取り組めていない「いいえ」と答えた人に
(ア) その理由としてあてはまるものに全てチェックを入れてください。
□面白くないから　□やってもムダだから　□必要ないから
□他の人がまじめにやっていないから　□その他［　　］
(イ) このままでいいと思うか。
□はい　□いいえ　□機会があればまじめにやりたい

3．防災への貢献

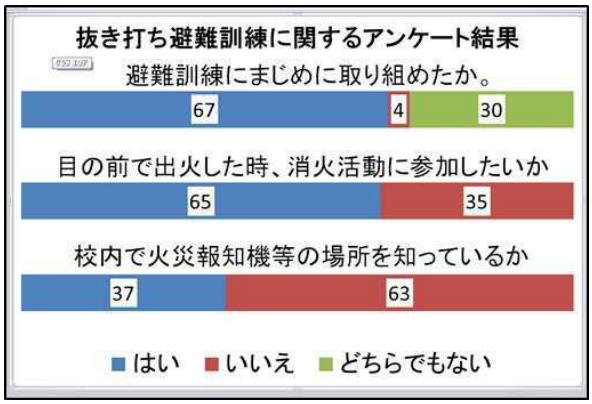
① 目の前で出火してしまった場合、消火活動に参加したいと思うか。
□思う　□思わない

② ケガ人がでた場合、応急救護やケガ人の搬送を手伝いたいと思うか。
□思う　□思わない

③ 校内で、消火器・消火栓・火災報知器のある場所を知っているか。
□はい　□いいえ

④ 校内で、担架のある場所を知っているか。
□はい　□いいえ

4．今回の抜き打ち避難訓練について意見・感想を聞かせてください。



教員研修の様子（岡山地方気象台防災気象官　井上　達二氏）

１園２校地域住民合同避難訓練の様子

地震発生前

地震発生中

第１次避難場所（潮陽会館前の様子）

園児と合流

避難の様子と第２次避難場所集合の様子

集合を完了し指導講評を受ける

福島防災スタディーツアーの様子（８月４日(火)～６日(木)）福島県相馬市周辺

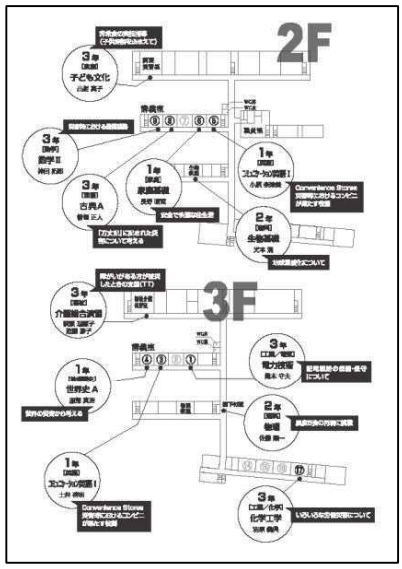
研修の様子

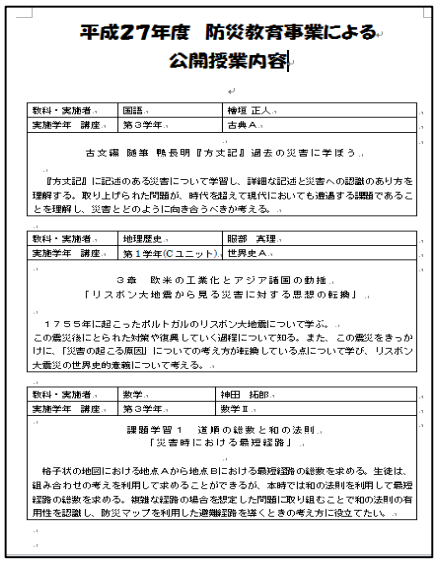
被災地にける防災ボランティア研修～岡山県実践的安全教育総合支援事業～８月 26 日（水）～28 日（金）

奇跡の一本松

地元高校生との交流

公開授業の資料（パンフレット、会場図、指導案）





平成27年度　防災教育事業による
公開授業内容

教科・実施者	国語	神垣 正人	
実施学年　講座	第3学年	古典A	

古文編　随筆　鴨長明『方丈記』過去の災害に学ぼう

『方丈記』に記述のある災害について学習し、詳細な記述と災害への認識のあり方を理解する。取り上げられた問題が、時代を超えて現代においても通過する課題であることを理解し、災害とどのように向き合うべきか考える。

教科・実施者	地理歴史	眼部　真理	
実施学年　講座	第1学年(Cユニット)	世界史A	

３章　欧米の工業化とアジア諸国の動揺
「リスボン大地震から見る災害に対する思想の転換」

１７５５年に起こったポルトガルのリスボン大地震について学ぶ。この震災後にとられた対策や復興していく過程について知る。また、この震災をきっかけに、「災害の起こる原因」についての考え方が転換している点について学び、リスボン大震災の世界史的意義について考える。

教科・実施者	数学	神田　拓郎	
実施学年　講座	第3学年	数学Ⅱ	

課題学習１　道順の総数と和の法則
「災害時における最短経路」

格子状の地図における地点Aから地点Bにおける最短経路の総数を求める。生徒は、組み合わせの考えを利用して求めることができるが、本時では和の法則を利用して最短経路の総数を求める。複雑な経路の場合を想定した問題に取り組むことで和の法則の有用性を認識し、防災マップを利用した避難経路を描くときの考え方に役立てたい。

教科・実施者	数学	森内　慎吾	
実施学年　講座	第3学年	数学研究基礎（選学）	

第１章　場合の数と確率　第２節確率
統計的確率とは～地震発生確率など～

教科書では「数学的確定」が学習内容であるが、世の中には「統計的確定」の方が多く使われている。そのことについて、学習するとともに、「地震発生確率」について、学ぶ。説明により、起こる可能性が高くなっている状況を理解し、どのように今後過ごせばよいのか考えるきっかけ作りとしたい。資料としてはワークシートとPP。

教科・実施者	理科	光本　清	
実施学年　講座	第2学年	生物基礎	

第５章　生態系とその保全　第２節　生態系のバランスと保全
「地球温暖化」

台風の大形化、集中豪雨など気候変動による災害の増長となっている地球温暖化について、そのしくみと影響を考える。

教科・実施者	理科	佐藤　順一	
実施学年　講座	第2学年	物理	

第１編　力と運動　第４章　円運動と万有引力　第３節　単振動
「震度５強を再現しよう！」

地震が揺れる、地表が揺れる状況を単振動と捉えて計算してみよう。気象庁が発表している震度と最大加速度(gal)の関係、また、最大振幅などを利用し、震度５強を再現してみよう。

教科・実施者	外国語	小原　京美美　、　土井　郁明	
実施学年　講座	第1学年	コミュニケーション英語Ⅰ	

Lesson 8 "Convenience Stores: the Keys to Their Success"

本教元では、コンビニの発展の裏に隠されている成功へのカギを学習する。本時では、災害時においてコンビニが果たす役割について学ぶ。

教科・実施者	家庭	長野　晴菜	
実施学年　講座	第1学年（Dユニット）	家庭基礎	

７章　住生活をつくる　第２節　住居の計画と選択
「安全で快適な住生活」

現在の住まいをもとに、自己の住生活を振り返り、住居のはたらきを理解させる。住居の自然災害などから身を守るシェルター（避難所）としての役割を理解したうえで、安全な住まいづくりのためにどのような課題があるのか考察し、その課題解決のために正しい判断ができ、減災対策を実践する態度を養いたい。実際に災害に遭ったときの住生活を想像し、身近な防災グッズとして「紙マスク」の制作を行う。資料としては、学習プリントと動画。紙マスクの制作には、キッチンペーパー、輪ゴム、ホッチキスを使用する。

教科・実施者	家庭	出射　真子	
実施学年　講座	第3学年	子ども文化	

第７章　子ども文化実習
「非常食の実技指導（子供理解をふまえて）」

避難場所における毎日の食事準備について実習をする。今回は、子供のいる家族等で準備をする場合を想定し、安全・安心・そして楽しい食事にするために、減災に少量の水での実習について学ぶ。また、子供用紙マスクを手作りする。
（日本赤十字社岡山県支部の方のご指導をお願いしています。）

教科・実施者	芸術	平尾　敏人	
実施学年　講座	第2・3学年合同	美術Ⅱ	

「誰が見てもわかりやすい緊急避難場所案内のデザイン」

今後の日本社会を考えた場合に、国籍、年齢、障害の有無にかかわらずだれにでもわかる避難経路の案内図が必要になることが予想される。緊急時にだれが見てもどこに避難すればいいのかわかりやすい避難経路の案内図はどのようなものか、西片上周辺を題材に、案内図をリデザインする。

教科・実施者	工業	桑木　守央	
実施学年　講座	第3学年	電力技術	

第３章　配電　第１節　配電
「配電線路の保護・保守について」

屋内配線での事故は、大きな事故につながる危険性がある。近年の国内での大規模地震に伴い生じた電気に起因する災害を知り、その発生原因を確認する。また、災害の予防のためには、どのような対策・機器が必要かを検討する。

教科・実施者	工業	羽原　雅典	
実施学年　講座	第3学年	化学工学	

第 11 章　化学工場の安全と関係法規
「いろいろな労働災害について」

産業活動にともなって発生した災害の具体的な例をもとに、災害を未然に防ぐことや災害が発生したときの対応など、発生原因から考察し理解する。また、このこととあわせて自然災害における対応についても考えるきっかけとなるような学習を行う。

教科・実施者	福祉	近藤　健子　、　荻原　恵美子	
実施学年　講座	第3学年	介護総合演習	

「誰がいがある方が被災したときの支援」

視覚障害者や聴覚障害者、高齢者などの疑似体験を通して、自分たちにできることを考える。

教科・実施者	工業	松下　大輝	
実施学年　講座	第3学年	自動車工学	

第３章　自動車用エンジン　第３節　その他の原動機
「災害時、電源などに使用できる電気自動車について」

電気のみで走行するため、CO_2を含め排気ガスを発生させないことなど、電気自動車は環境面を中心に語られることが多い。そのような中、搭載している大容量のバッテリを、災害時の電源として利用するという考えが生まれてきた。
この授業では、災害時の電気自動車利用について学び、考察する。

公開授業の様子

美術Ⅱ

自動車工学

古典Ａ

数学

コミュニケーション英語Ⅰ

コミュニケーション英語Ⅰ

電力技術

世界史Ａ

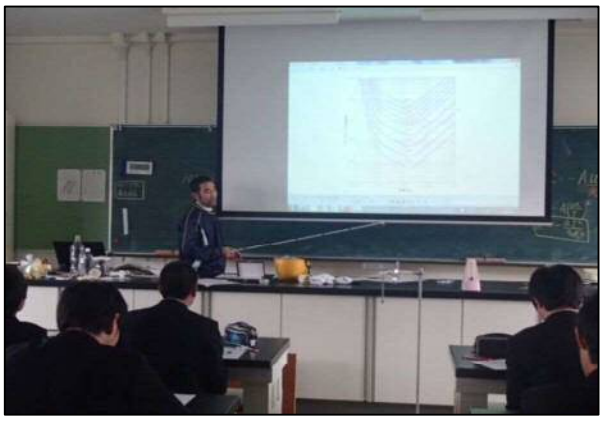
こども文化

こども文化の制作物

こども文化の制作物

生物基礎

化学工学



物理

シンポジウムの様子

後藤
大岩
近藤

野上 浩史
嶋田 祥
鈴木 梨菜
山本 栞
松岡 浩平

後藤 信介
大岩 伸喜
近藤 和彦
平池 秀一
BIZEN RYOKUYO

野上 浩史
嶋田 祥
鈴木 梨菜
山本 栞

後藤 信介
大岩 伸喜
近藤 和彦
平池 秀一
井上 達二

岡山県立岡山西支援学校

テーマ「地域との絆を深める防災教育」

住　　所：岡山市北区田中５７９
校　長　名：岡田　修二
電　　話：（０８６）２４３－４５３５

Ⅰ　学校の概要

【学校の概要】
本校は、知的障害のある児童生徒が通う特別支援学校である。児童生徒数は 149 名、うち 40 名が、隣接する知的障害児施設わかくさ学園から登校している。(H27.5.1 現在)

【防災上の地理的・地質的な課題】
学校周辺は、笹ヶ瀬川流域に位置し、地盤が軟弱である。南海トラフ巨大地震では、液状化による被害が大きいと想定されている。

【防災教育上の課題】
障害のある児童生徒への防災教育の進め方や、地域と連携した防災体制の整備について、課題を抱えている。

Ⅱ　取組の概要

1　研究のポイント

（1）児童生徒の命を守るための指導方法
①児童生徒の実態を踏まえた指導の在り方
②様々な場面を想定した指導・訓練の工夫
③緊急地震速報システムを活用した避難訓練

（2）教職員や保護者の防災意識の向上
①校内防災組織の整備
②障害のある児童生徒への防災教育の在り方

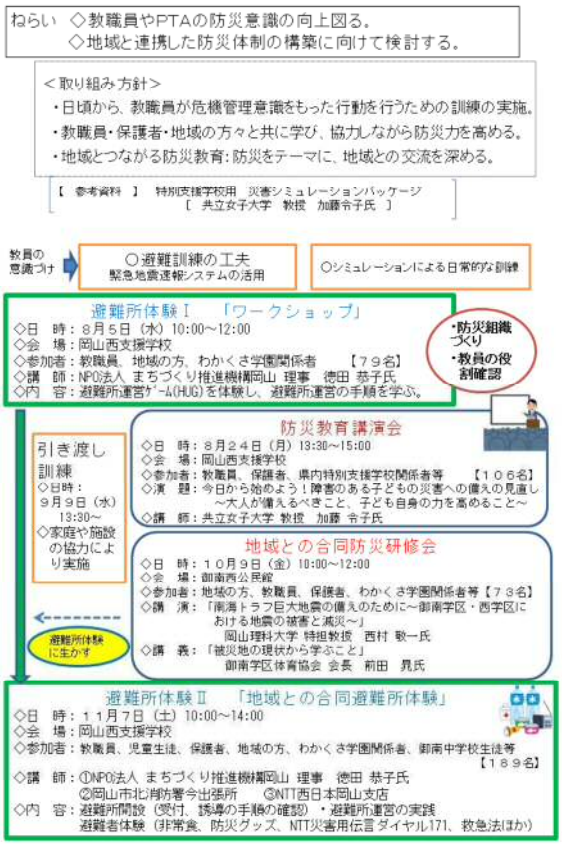
（3）地域と連携した防災体制の構築
①地域と協力した防災組織の検討
②地域と合同で行う研修会や避難所体験

2　取組内容

（1）校内での防災教育推進体制の整備
①小学部～中学部～高等部を見通した指導計画
・小学部から高等部まで、障害の程度や児童生徒の実態を踏まえながら、繰り返し指導した。
・防災を日常的にとらえるための指導を実施した。
アルファー米の体験（家庭科、生活単元学習）
③緊急地震速報システムを活用した避難訓練
緊急地震速報音を有効に活用し、自分の身を守る行動を身につける指導の定着度を確認した。
④様々な場面を想定した訓練
遊びの時間や校外での活動中に訓練を実施した。

（2）保護者の防災意識の向上
引き渡し訓練やスクールバス乗車時の訓練により、保護者は日常的な備えの重要性を意識した。

（3）学校・家庭・地域合同での取り組み
教職員や保護者、地域住民の防災意識の向上と、学校・保護者・地域住民を交えた防災体制を整備するために、総合的に取り組んだ。



①講演会や研修会による防災意識の向上

教職員や保護者、地域住民の防災意識を高めるため、多方面の講義が有効であった。

(ⅰ)共立女子大学教授 加藤令子氏：障害のある児童生徒の防災教育を進める上で、教職員や保護者の関わり方について理解を深めることができた。

（ⅱ）岡山理科大学特担教授 西村敬一氏：自分たちが住む地域の地盤特性や想定被害を知り、減災への取り組みを真剣に考えることができた。

(ⅲ)御南学区体育協会会長 前田晃氏：被災地での実体験を通し、災害を身近に捉えることができた。

②避難所体験による地域との絆づくり

(ⅰ)地域防災力アップのための避難所体験

学校周辺は、広域に液状化の被害が想定されており、地域全体で防災に取り組む必要があった。

また、慣れていない環境下では不安定となる児童生徒が多いことから、保護者は、災害発生時の避難所として本校を希望しており、避難所としての本校の施設・設備等の検討と、児童生徒や保護者の訓練が必要であった。

そこで、地域の方々の協力を得て避難所運営者の訓練と、避難者の災害体験訓練の２点をねらい計画した。

(ⅱ)地域と連携した防災体制づくり

地域防災の観点から、避難所体験では、本校教職員、保護者、地域関係者（町内会、わかくさ学園）による防災体制を整備することとした。御南学区・西学区各連合町内会長や、わかくさ学園長の尽力により、運営者として地域関係者26名が、また、岡山市立御南中学校の協力により、ボランティアとして生徒10名の参加が得られた。

避難者としては、1歳～85歳までの地域住民と、本校児童生徒・保護者の合計88名が参加した。

(ⅲ)実践的な訓練にするための工夫

避難所のイメージ作りのため、事前ワークショップで HUG（ハグ）体験を行い、６つの班（災害対策本部、名簿受付班、連絡広報班、施設班、食糧物資班、保健安全班）を組織し、準備した。

当日は、電気や水道を使用不可としたり、発熱者や要介護者などの特別な配慮を要する避難者を設けて様々な対応訓練をしたりした。

また、災害発生時に役立つ避難者の体験コーナーを８カ所設け、NTT 災害用伝言ダイヤル 171、防災グッズ体験（御南学区コミュニティー保管）、非常食の配給(岡山市備蓄食糧等給付事業)など、関係機関の協力により、内容を工夫した。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）地域との絆づくり

御南学区・西学区では、以前から地域防災訓練に熱心に取り組まれており、今まで積み重ねた経験と、充実した組織を兼ね備えていた。

今年度の防災教育の取り組みでは、地域の方々と共に、地域が抱える防災の課題を共有しながら計画を練ることにより、地域のニーズを踏まえた取組を行うことができ、地域住民や保護者からも有意義だったとの評価を得ることができた。

改めて、地域と共に防災を考え、取り組むことの重要性を確認した。

（２）実践的な訓練による防災意識の向上

教職員は、避難所開設に向けて、班ごとに準備に取り組んだが、その過程で、災害発生時に必要となることや、各自の役割を確認することができ、防災意識を深めることができた。

また、避難者の受付や誘導、各班の連絡調整など、実際の体験を通して気づく課題もあり、多くの教職員が、実践的な訓練の意義を認め、今後の対応に役立てることができると感じていた。

（３）避難所機能を果たすための検討

本校が避難所として機能するために、校舎内の利用割り付け、避難所ルールづくり、備蓄品の取り扱い等について、具体的な見直しを行うことができた。

（４）児童生徒の災害へ備える力の育成

様々な指導を行うことで、災害発生時に起きることや対応方法について、予測可能となり、災害に備える力の育成につなげることができるようになった。

２　課題

（１）家庭と協力した防災教育の実践

児童生徒が、自らの命を守る力を育成するために、保護者の協力を得ながら、学校や家庭における防災教育に取り組む必要がある。

（２）地域と連携した防災への取り組み

地域と連携した防災体制や、地域との関わりを深めるため、今後も防災をテーマに、地域との交流を継続し、多くの方が参加しやすいよう工夫する必要がある。

（３）防災意識の啓発と日常的な備え

防災意識を継続して持つことが重要であることから、教職員が、日頃から危機管理意識を持ち、いざというときに適切に判断できる力を培うよう啓発することと、普段からの防災対策の重要性を意識し、日常的に備えをしていく態度を持つよう啓発していく必要がある。

岡山西支援学校　防災教育の取り組み

Ⅰ．学部で取り組む防災教育

(1) 小学部

〔校外歩行〕並んで・一緒に・安全に歩く

(2) 中学部

〔中３〕日常の危険から身を守る

〔学部集会〕　地震から身を守るために

(3) 高等部

〔中２〕校外学習　倉敷みらい公園見学体験

〔高１〕理科　地震と液状化現象

〔高３〕　避難訓練

Ⅱ．避難訓練・引き渡し訓練

(1) 避難訓練→引き渡し訓練 (9/9)

プレイルームへの避難

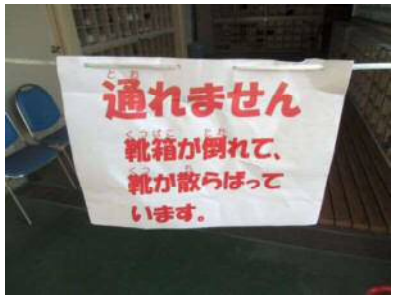
プレイルームでの待機

保護者への引き渡し

(2) 避難訓練＜予告なし＞（12/14）

〔小５・６〕机の下で身を守る

運動場への避難



危険箇所の設定

Ⅲ. 講演会・研修会

(1) 防災教育講演会

8/24 講師：共立女子大学教授 加藤令子先生

(2) 地域との合同防災研修会

10/19 講師：
岡山理科大学特担教授 西村敬一先生
御南学区体育協会会長 前田 晃先生

(3) 避難所体験・ワークショップ

8/5 講師:NPO 法人まちづくり推進機構岡山
理事 徳田恭子先生

Ⅳ. 地域との合同避難所体験

(1) 当日の流れ

避難所体験スケジュール

時間	活動内容		体験コーナー								
8:45	地震の発生										
9:00	避難所開設準備										
	受付	・避難者受付 ・ボランティア受付									
10:00	開会行事		【 B棟 1F・2F 】						【 調理室 】	【 屋外 】	【 プレイルーム 】
10:20	プログラム活動 ＜PART1＞		①防災クイズ ＜第1回＞10:30～10:50	②防災グッズ展示 10:20～11:30 随時	③NTT災害用伝言ダイヤル171 ＜第1回＞10:30～11:00	ボランティア ④ゆっくり過ごそう 10:20～11:30 随時	⑤新聞紙でコップ作り ＜第1回＞10:20～10:40	ボランティア	・10:30 岡山市から支援物資到着	⑧火おこしをしよう ※時間を決めて実施 ＜ブロックのかまど＞10:20 10:50 11:20 ＜くど＞10:35 11:05	ボランティア
							＜第2回＞10:40～11:00	ボランティア	⑦非常食を作ろう アルファー米に水を入れてもらう		
11:15	◇ 余震の発生〔緊急地震速報音〕		＜第2回＞11:00～11:20		＜第2回＞11:00～11:30		＜第3回＞11:10～11:30				ボランティア
11:30	昼食《プレイルーム》	非常食の配給							【 非常食の配給 】（アルファー米・カレー）		【 非常食の配給 】（水、乾パン、クラッカー）
12:50	＜ 準 備 ＞										
13:00	プログラム活動 ＜PART2＞		＜第3回＞13:10～13:30	13:00～14:00 随時	＜第3回＞13:00～13:30	13:00～14:00 随時		⑥新聞紙でスリッパ作り ＜第1回＞13:00～13:20	ボランティア	【 非常食の配給 】（ココア、しょうが湯）	⑨力を合わせて助け合おう ・AED、救急法
			＜第4回＞13:40～14:00		＜第4回＞13:30～14:00			＜第2回＞13:30～13:50		ボランティア	
14:00	閉会行事										

(2) 活動の様子　〔注〕☆印は、ボランティアの協力による活動

受付

避難所内の風景

避難所：情報掲示板

避難所：ブルーシート掲示板

避難所への動線（ラインテープ）

校内案内図

サイン（水道使用不可）

サイン（トイレ使用不可）

非常食の配給　☆

〔体験コーナー〕 防災グッズ展示

〔体験コーナー〕NTT 災害用伝言ダイヤル 171

〔体験コーナー〕 非常食作り　☆

〔体験コーナー〕 新聞紙でコップ作り　☆

〔体験コーナー〕 火起こし　☆

〔体験コーナー〕 救急法　☆

駐車場（運動場）

〔連絡広報班〕掲示物作成風景

ゆっくり過ごそう！あそびのへや

ペットコーナー

(3) 各種様式

避難者カード

発熱あり
発熱なし

避難された方の情報を把握するためにお知らせください。

■あなたのお住まいは

町内名		町外	

■あなたに関することを教えてください。

氏名		年齢		性別	男 女

下記の項目に当てはまるものに〇をしてください。

■あなたの家屋の状態は
全壊　半壊　一部損壊　被害なし

■どなたと避難されていますか　(同居されている方のみ)
・ひとりで避難してきた。
・二人以上で避難してきた。(自分を含めて　人)
祖父母、両親、配偶者、子ども(　人)、兄弟姉妹、その他
・安否が確認できてない家族、同居人はいますか？
名前(　　) 続柄(　　)

■障害の有無、病気等の状況
(例:持病があり薬が必要 / 現在妊娠中 / 手や足が不自由 / 視覚障害者など)

■避難所で配慮して欲しいことはありますか？
(例:アレルギーがある / 乳幼児がいる /など)

■避難所内でお手伝いはできますか？
・できる
お手伝いのできる内容が分かればご記入ください
(　　)
・できない

◆カード回収場所は2階プレイルーム前と1階保健室前にあります。
避難者名簿をつくりますので、一人一枚ずつお出しください。

【避難所生活のルール】(例：岡山西支援学校)

この避難所の生活ルールは、つぎのとおりです。ルールを守り、ゆずりあいの心を持って，みなさんで助け合いましょう。

[生活時間]
・起床時間：　６：３０
・消灯時間：　２１：３０
・食事時間：朝食８：００　昼食１２：００　夕食１８：００
(原則として全員に提供できるまでは、配付しません)

[食料・物資]
・不足する場合は、避難所対策本部で配布基準を決定します。
・ミルク・おむつなどは、必要な方に配布します。
・在宅の被災者にも配布します。

[生活空間の利用方法]
・居住空間は、土足厳禁とし、脱いだ靴は各自が保管します。
・共有空間は、使用する用途によって屋内外に確保します。
・「立入禁止」、「使用禁止」等の指示には必ず従って下さい。
・犬、猫などのペットを居室に入れることは禁止です。
指定の飼育場所に移動してください。

[プライバシーの確保]
・居住空間でのテレビやラジオは周囲の迷惑になる可能性があるため、使用する場合は、イヤホン等を使用します。

[清掃について]
・共通の通路などは、居住グループ内で話し合い、協力して清掃します。
・避難者全員で使用する共用部分については、全員が協力して清掃します。
・トイレは、毎日、９時と１５時の２回、避難者が交替で清掃します。

[洗濯について]
・洗濯は世帯や個人で行います。
・洗濯機や物干し場など、避難者全員で使用するものについては、独占せず公平に使用します。

[ゴミの処理]
・発生したゴミは、それぞれの責任で、共有のごみ置き場（ゴミ箱）に捨てます。
・ゴミは、必ず分別して捨てます。

[火災の防止]
・屋内での喫煙は、厳禁とします。喫煙は、定められたスペースでのみ可能とします。
・屋内でストーブなどを使用する場合は、使用箇所と時間などを定め、責任者を決めて火元管理を行います。
・裸火の使用は、禁止します。

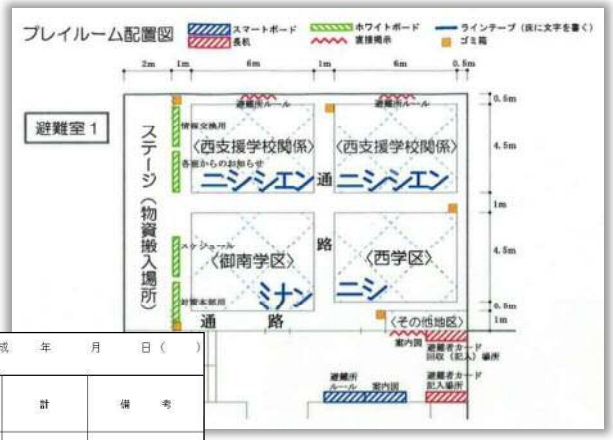
[携帯電話の使用]
・居室での携帯電話の通話は、禁止します。
・通話は、屋外や定められたスペースのみで可能とします。
・居室ではマナーモードに設定し、他者への迷惑にならないようにします。

★その他、新しい生活ルールが必要な場合や、ルールの変更が必要な場合は、適宜、対策本部会議で検討を行います。

避難者名簿

プレイルーム　　月　　日

	氏名	性別	年齢	地区	番号
1		男　女		御南・西・西支・その他	
2		男　女		御南・西・西支・その他	
3		男　女		御南・西・西支・その他	
4		男　女		御南・西・西支・その他	



避難者数

平成　年　月　日(　)

時間	避難者現在数 本校児童生徒・保護者	御南学区	西学区	その他	避難者の計	うち別室対応	ボランティア	教職員	計	備考
:										
:										
:										
:										

対応記録（報道機関・行政・各種問い合わせ）

時間	相手先	対応者	内容	対応
:				
:				
:				

避難所退出者名簿

月　　日

	氏名	地区	退所時刻	番号
1				
2				
3				
4				

Ⅲ　交通安全・防犯を含む生活上の安全に関する取組

１　勝央町

勝央北小学校

勝央町
（勝央北小学校）

教育委員会名：勝央町教育委員会
住　　所：勝田郡勝央町勝間田２００－１
電　　話：（０８６８）－３８－１７５２

Ⅰ　勝央町の概要

１　学校の規模と過去の主な交通事故等

○学校（園）数：保育園　　５園
　　小学校　　２校
　　中学校　　１校

○通学路の様子

岡山県の北東部に位置する勝央町は、北部には緩やかに傾斜する丘陵が起伏し、中南部は町を南北に貫流する滝川に沿って開けた自然豊かな町である。

今回のモデル校である勝央北小学校区は、町北部に位置し、田畑や果樹園等の自然豊かな地域である一方、東西に津山市と美作市を結ぶ国道 429 号線が通っており、町中心部に勝央工業団地が立地していることから、近隣からの通勤者及び貨物運搬の出入りも多く、危険が潜在している。

○登下校時を含めた主な交通事故等

平成 27 年中の児童の事故件数及び負傷者は１件であり、平成 26 年の６件と比較し、減少した。また、児童の防犯上の事件は発生していない。

２　学区で共通する交通安全・防犯教育上の課題

町内の学校ではスクールバスを利用する児童がおり、勝間田小学校では、約 12%の児童が、モデル校である勝央北小学校では、約 45%の児童が登下校を行う。校区も広く、局所的な対応では限界があり、危険箇所を抽出したハード面での整備に加え、ソフト面として児童の危険予測・危険回避能力を高める教育が求められている。

Ⅱ　取組の概要

１　研究のポイント

（１）実践委員会の設置
　①連絡協議会の開催
　②通学路合同点検の実施・安全対策の検討

（２）通学路安全対策アドバイザーの活用
　①連絡協議会での講義・第三者意見の導入
　②専門的視点を踏まえたフィールドワークの実施

（３）先進的な交通安全・防犯教育
　①危険予測・危険回避できる力の育成
　②外部機関を活用した先進的取組の実施

２　学区としての取組内容

（１）実践委員会の設置

①勝央町の通学路に係る関係機関から 12 名にて構成をした。通学路安全対策アドバイザーを中心とし、美作県民局勝英地域維持補修課、美作警察署交通課、教育庁保健体育課、勝央北小学校、勝央町スクールガードリーダー、総務部、産業建設部、教育委員会の委員にて、児童の安全・安心を守る通学路の『応援団』を結成した。

②第１回連絡協議会を７月 27 日に開催し、事業概要や通学路安全対策状況について情報交換を行うとともに、モデル校（勝央北小学校）による交通安全教育計画の説明を行った。

③勝央町通学路合同点検を８月 28 日に開催した。町内４箇所の危険箇所の確認及び対策案の検討を行った。その後、10 月 27 日には第２回連絡協議会を実施し、対策について協議をした。

（２）通学路安全対策アドバイザーの活用

①今回の事業では、岡山大学大学院准教授の橋本成二先生を招き、専門的視点からの指導及び助言をいただいた。各関係機関において、道路に対する重要課題が異なる中、「各機関における通学路の安全確保について」等の内容を講義に取り入れ、交差点のカーブの角度や横断歩道の位置を変えることによって、致死率が変化することや、対策案の検討の視点について短期的及び長期的な計画を実施するように助言を受けた。取組箇所について、有効な対策案の意見を求める中で、運転手に危険箇所を知らせるための視覚的な手法についてご指導いただいた。

②既存の学校の危険箇所の認識では、学校の教員

や保護者等の大人からの目線での把握となっている。専門的な見地を加えながら、事故が起きる状況は「変化が伴う場合」であるとし、児童に具体例を示しながら、ご示唆をいただいた。

（3）通学路合同点検の実施

取組は各学校 PTA からの要望があった４箇所を、学校及び教育委員会が現場確認をし、過去の児童生徒の事故の状況等を加味し緊急度に応じた区分のもと選定を行った。

対策案の視点として、①いつまでに②だれが③どうするか（短期的計画・長期的計画）④対策実現までの対応の４点を協議し、検討した。早急性を持つ路面への注意喚起標示等の実施については、連絡協議会の中で関係機関への同意をもらい、教育委員会が本年度内において対応を実施した。長期的な計画が必要な箇所については、各関係機関への依頼事項とした。

（4）交通安全教育の実施

交通安全教育は学習型と体験型とを組み合わせて実施をした。学習型としては、岡山県警作成の「セーフティサイクル・ステップアップ・スクール」の取組をモデル校にて実施し、「危険予知トレーニング」を活用した。体験型としてフィールドワークを行い、「学校周辺の危険予測ができるか。」を目標とし、確認をした。その後、通学路安全マップを作成し、下学年への発表を通してアウトプットする力を養うことを目指した。

（5）防犯教育の実施

防犯教育は学校支援地域本部を中心とした見守りボランティアへの感謝集会を行い、児童自身の環境を意識させることに加え、先進的な防犯教育として、発達段階に応じた取組を行った。全学年へは、「うさぎママのパトロール教室」の協力を得て行った体験型の防犯教室、低学年は、県くらし安全安心課作成の「あんぜんきょうしつ」トレーニングシートの活用、地域ボランティアによる防犯紙芝居の取組を実施。中学年から高学年は、県くらし安全安心課による身近な地域の写真を見て安全な場所かどうかを考える「地域安全マップ授業」、パソコンを用いての「安全シミュレーション学習」など、外部機関を活用して様々な状況下にて安全な判断を行い、危険回避ができる力の育成を目指した。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（1）学校の通学路の安全を守る『応援団』の結成

・本事業の取組を通して、実践委員会での活動は児童の安全・安心において非常に心強いものとなった。「勝央町通学路交通安全プログラム」に則しての事業運営を行ったが、連絡協議会の中ではハード面の協議に加え、ソフト面としてモデル校での実施内容を説明する場を設け、理解を深める機会とした。

・通学路の危険対応では、通学路安全対策アドバイザーによる第三者意見の導入により、関係機関の目的意識の共通化が図ることができた。一つの危険箇所に対して複数の機関が利用・管理を行う通学路にとっては、同じテーブル上で協議することは非常に有効であると言える。

（2）身近な資源を活用した交通安全・防犯教育

・学校及び町教育委員会だけでは、教材の作成からシステムの導入等、時間や経費の面から先進的な教育の実施は困難であり、本事業では様々な団体の協力を仰ぎ交通安全･防犯教育が実現できた。

・各活動は専門家の指導もあったが、人材面では地元のボランティアの協力が得ることができ、教材面では新聞紙を使用して不審者との距離を測ることや、学校周辺を学ぶことで主体的能力を養う内容など、今後の展開において継続して取り入れることのできるヒントを得られるものとなった。

２　課題

（1）対策効果の把握と改善・充実

・今回危険対策を実施した箇所は短期的計画が中心である。対策が確実なものか効果を検証し、次年度以降も継続的に改善を行うために、「勝央町通学路交通安全プログラム」に基づいた『応援団』の関係性を持続していく必要である。また、目的意識を統一するためにも、学校と関係機関が連携をしたハード面とソフト面からの『両輪』の安全教育を継続実施していくことが大切である。

・今回の経験を踏まえ、今後の学校の活動としては、教育課程に位置づけ、身近な資源を活用した教育手法を考えていく必要がある。また、教育委員会としては、町内小・中学校への発信をし、町内全体において児童生徒の安全・安心な教育体制を検討していく必要がある。

勝央町立勝央北小学校

テーマ「安全に関する実践的な能力の育成」

―危険予測・危険回避能力を高め、自らの命を守るために―

住　　所：勝田郡勝央町植月中２７５４
校　長　名：佐堂　典子
電　　話：０８６８－３８－２３１３

Ⅰ　学校の概要

【学校の概要】学校規模・学校特色など
　県北東部の勝央町の北部に位置し、児童数230名。平成23年度より学校支援地域本部事業を24年度より学校運営協議会を設置する。多くのボランティアの方が学校を支援し、見守り隊も各地区に組織している。
【交通安全や防犯上の課題】など
　平成26年度には2名の児童が歩行中、学区内の横断歩道で交通事故に遭った。また、自転車での自損事故もあった。学区内を通る国道４２９号線は交通量が多く危険であり、細い生活道路や見通しの悪い所、民家と民家が離れ人通りの少ない場所も多い。
【交通安全教育や防犯教育上の課題】など
　毎年、校内で 1 学期に交通安全教室を実施し、町教育委員会、町交通安全協会、PTA 生活安全部も参加している。また、PTA では毎年各地区の危険箇所点検と安全マップの見直しを実施している。
　校内での不審者対応避難訓練は実施しているが、学区全体を想定した交通安全教室や防犯教室は実施できていない。

Ⅱ　取組の概要

1　研究のポイント

（1）防犯・交通安全への安全意識を高め、危険予測、危険回避できる力を育むため、専門家を招聘し、参加体験型の学習を行う。
（2）子どもの視点から交通安全マップを作成し、交通事故防止能力を高める。
（3）安心安全な地域づくりをめざし、保護者・地域との連携・協力をすすめる。

2　取組内容

（1）防犯学習（Ｈ２７．７．１０）
①見守りボランティアさんへの感謝集会
　登下校で大変お世話になっている見守りボランティアさんへのお礼の会を実施。

②防犯教室（うさぎママのパトロール教室）
　上・下学年別に参加体験型防犯教室を実施し、「身を守る力って何だろう」をテーマに、不審者への対応の仕方や安全な距離の取り方等を学び、身近な新聞紙を使用し、相手の手が届く距離感を体験した。

（2）交通安全学習（Ｈ２７．１０．１３）
①交通安全マップ作成（４年生）
　学校周辺を２班でフィールドワークを行い、交通安全マップの作成をした。
　事前に学習したピンク：見通しの悪い所、黄：道が狭い所、青：車が多い所を付箋に記録しながらチェックし、デジタルカメラで写真データを取った。

フィールドワーク終了後、大型地図に記録した付箋を貼り、グループ毎に発表した。

②４年生から２年生への伝達

４年生が作成した交通安全マップをもとに２年生に学校周辺の危険箇所を教えた。

（３）地域安全マップ・安全シミュレーション学習

（Ｈ２７．１２．１７）（県くらし安全安心課）

①防犯紙芝居（２年生）

学校支援地域本部のボランティアの協力による防犯大型紙芝居の読み聞かせを行った。

②地域安全マップ（４年生）

４年生がＤＶＤ視聴し、防犯の視点から学区内の写真を見て「危険な場所」「安全な場所」を考えた。児童は「学校の周りは危険な場所が多くあり、気をつけないといけない」と感じながらも、「地域の人にあいさつをしっかりしていこう。」と、危険を察知し、回避への意識を養うことができた。

③安全シミュレーション学習（５年生）

パソコンを使用し、誘いの手口に対してどう対応するかを学習した。

「おなかが痛いから荷物を持ってくれないか。」という問いかけには、児童の意見が分かれ「妊婦なのか。」「危険なものを隠し持っていないか。」等の状況に応じた不審者への対応や判断の難しさを知ると同時に、具体的な判断の方法を学ぶことができた。

（４）危険予知トレーニングの実施

岡山県警が作成をしたセーフティサイクル・ステップアップ・スクールを年間通して実施し、児童に交通事故を起こさせない、被害にも遭わせないことを目標とした。特に、自転車利用時の交通ルール遵守意識、交通マナー向上を目指し規範意識の向上を図ることを目的とし、他の交通安全教育と連携した指導を行った。

Ⅲ　取組の成果と課題

１　成果

（１）防犯教室では上・下学年の実態に応じた指導が行われ、ゲーム等親しみやすい体験を通して不審者への対応の仕方・距離の取り方等を具体的に学習することができた。各学習を通して、見守りボランティアや子ども 110 番活動の有り難さを児童も感じ、日頃からの防犯意識の向上が今後予想される。今後の振り返り学習を通して、継続的に危険回避できる力を学んでいく。

（２）交通安全教室では４年生児童が学校周辺でフィールドワークを行い、交通安全マップを作成したことで危険箇所を具体的につかむことができた。また、学習したことを２年生に教えることで、危険箇所の周知と事故防止への意識向上を図ることができた。併せて、相手へ自分の意見を発信する力を養うことができた。

（３）見守りボランティアへの感謝集会や、交通安全マップの作成を通して、保護者・地域との連携・協力をした学校づくりのきっかけとなった。

２　課題

（１）防犯教育では下校中や下校後の行動が課題であり、今後も地域との連携を進めながらも、学校周辺の題材やボランティアの人材を利用した危険予測・回避能力の向上を図る取組を考えていく必要がある。

（２）今回の交通安全教育で学んだことをもとに、ＰＴＡが毎年見直している安全マップに子どもの視点を取り入れて改善を検討する。自宅周辺の危険箇所を自ら調査し、まとめる学習を通して、様々な世代の意見を取り入れ、学校発信にて家庭・地域へ危険箇所の周知を図りたい。

（３）今回の安全教育の中で、「今までに意識をしていなかった危険がわかった。」など、児童の安全意識の向上をうかがわせる感想が多く見受けられた。この学習を学校内に留めず、保護者・地域とともに安全・安心な地域づくりを今後も推進していきたい。

交通安全に関する実践的な能力の育成

勝央北小学校第４学年
総合的な学習の時間

１　ねらい

子どもたちが自らの通学路や地域の危険な場所を調査し、交通安全マップを作成することを通して、交通安全への意識を高め、危険を予測し回避できる能力を育てる。

２　単元構成（全６時間）

第１次　交通安全マップ作りの準備をする【１時間】
第２次　交通安全マップを作る【３時間】
第１・２時　学校周辺の危険箇所を見つける　《 本時 》
第３時　　交通安全マップを仕上げる
第３次　学習したことを下級生へ伝える【２時間】
第１時　　発表の練習をする
第２時　　作成した交通安全マップを使い、２年生に伝える

３　指導の流れ

（１）事前の準備及び指導

① 交通安全マップ作成の際に必要な物品の準備

その場の状況を正確に伝えるため、デジタルカメラを用意した。また、フィールドワーク用のコース地図は学校周辺に目印となる建物等を記録したものを作成し、歩いたコースを記すマーカーペンを準備した。さらに、マップ作成用のＡ１サイズの大型地図は、町教育委員会に依頼し準備した。

② 交通安全マップ作成の事前調査

指導の留意点等を確認するために、担任、教務主任、生徒指導主事が実際にコースの下見を行った。フィールドワークを実施する上で、安全面に十分留意するとともに、時間的な余裕も考えてコース設定を行った。また、児童への働きかけとして、過去の事故事例等を共有し、危険を実感できる構成を検討した。

【第１次の事前指導の内容】

事前学習にて今まで危険と感じた場面を思い出し、どのような所に危険が潜んでいるかを児童が考え、フィールドワークの際の視点を以下の３つに決定した。
＊３つの視点を示す付箋に、危険と感じた所や気づいたこと等を短くコメントを書く。
「ピンク色の付箋」：見通しの悪い所　　「黄色の付箋」　：道が狭い所
「緑色の付箋」　　：車が多い所

＊どこを歩いているか地図にマーカーで色をつける。
＊デジタルカメラの使用方法を知る。

（2）本時の学習

1　題材名　　学校の周りの危険なところを見つけて交通安全マップを作ろう

2　本時の目標　グループで協力し危険なところを見つけて記録し、 交通安全マップに表すことが出来る。

3　外部講師　　通学路安全対策アドバイザー
岡山大学大学院准教授　橋本成二先生

4　展開

学習活動	教師の支援
1　めあてを確かめる。	○事前に学習したことを想起させ、前時に立てた個人やグループのめあてを確認し、意識を高める。 ○過去の事故事例を紹介し、本時への動機付けを行う。
2　講師の先生から見つけるポイントを聞く。	○「見通しの悪い所」「道が狭い所」「車が多い所」がポイントになることを押さえる。 危険は「変化が伴う場合」であり、天候・道路環境・児童の気持ちの変化で、危険が生まれやすい。
3　２グループに分かれ、フィールドワークを行う。	○フィールドワークを行う際に留意することを指示する。 ・安全面には十分に気をつけ、事故に遭わない。 ・どこを歩いているか地図にマーカーで印をつける。 ・危険だと感じた所をデジタルカメラで記録し、付箋に短くコメントを書く。
4　グループ毎に付箋を大型地図に貼り付ける。	○出雲屺方面と美野方面で大型地図上の位置を確認しながら、記録した付箋を貼り付けることを指示する。 ・デジタルカメラで記録した写真は後日貼り付けることを伝える。 ・グループ内で発表者を３名決めておくことを指示する。
5　発表する。	○グループ毎に見つけた危険箇所について、その場所と様子を発表させる。

6　まとめをする。	○講師の先生から今日の学習についての講話をしていただく。 ・デジタルカメラで記録した写真を見せながら説明していただく。 普段安全だと思っている道路でも、様々な変化を予想し、危険を察知しよう。 車が自分をきちんと見えているか考え、反射材の着用や、車が確実に止まっているか確認をする自己防衛を行おう。
7　ふりかえりをする	○本時の学習で学んだことをまとめ、ふりかえりをする。

（３）学習の様子

〈大型地図にまとめる児童〉

〈完成した交通安全マップ〉

（４）４年生から２年生への伝達

下学年へ伝達学習を行うことによって、相手へわかりやすく伝える力を学ぶ。

児童はマップを作る段階より、「どのように表現をしたら伝わりやすいか」考え、発表練習を重ねることで交通安全に関する理解を深める。

〈４年生から２年生への伝達〉

（５）児童の感想

１　登下校で気をつけることについて

○橋本先生の言葉を聞いて、何か変化があるときには、気をつけて登下校をしたいと思った。
○交差点やカーブの道路など見通しの悪いところはよく確認をして歩かないといけない。
○信号が青になっても少し待って渡らないと、車が止まらないことがあることがわかった。
○歩道のない所や車が多い所に注意をする。

２　自分の家の周りで危険なことについて

○細い道があり、カーブミラーがなく、見通しが悪いところは、注意しないといけない。
○私は信号機のない横断歩道を渡るので、注意を十分にする。
○保育園の近くでは送り迎えの車にも注意しないといけない。

地域安全マップ作り（安全シミュレーション学習）

勝央北小学校第４学年
総合的な学習の時間

（１）本時の学習

１　題材名　　学校の周りの場所について安全か危険かを考えよう
２　本時の目標　学校周辺の写真を見てグループで安全か危険かを考え、危険箇所を知ることができる。
３　外部講師　　岡山県県民生活部くらし安全安心課　木下史子先生
４　展開

学習活動	指導上の留意点
１　地域安全マップについて学ぼう。	○地域安全マップって知っていますか。 ・防犯 DVD を視聴させ、危険な場所を考えるポイントを知らせる。 ・パワーポイントを使って説明する。
２　学校周辺の写真を見	○グループ毎に学区の写真を見て、危険な場所はある

て、安全か危険かグループで考える。	かを考えさせる。 ・道路、家、神社、墓等 ○なぜ危険なのか理由も話し合わせる。
3　写真の解説を聞く。	○写真を１枚ずつテレビに投影し、その景色が安全か危険か全体で確認していく。 ・その中で数枚について理由を児童に説明させる。 ・特に班毎に意見が分かれた写真があれば取り上げる。 ○景色を判断する要因としてキーワードを確認する。 「入りやすい場所」「見えにくい場所」は危険な場所であるため、気をつける。
4　まとめをする。	○危険が潜んでいる場所には、「一人で近寄らない」、「一人で通る時には周囲の様子（車や人）に気をつける」ことを確認する。
5　ふりかえりをする	○本時の学習で学んだことについて、ふりかえりをする。

（２）活用教材

本授業では、学校周辺の写真を道路・建物・その他に区分し活用した。学校周辺で児童にとって親近感が持てる場所から事前調査を行い、選定した地域安全マップカードを班ごとに１セットずつ用意する。

【セットの内容】

道路①～④・たてもの①～⑤・そのた①～③　合計１２枚

〈通学路沿いの見通しが悪い道路〉

〈交通量が多く歩道の設置された道路〉

〈コンビニエンスストア〉

〈空き家〉

〈安全・安心パトロール中の車〉

〈学校近くの大きな駐車場〉

（３）主な児童の感想

〇カードを使って、みんなで考えたのでとてもわかりやすかった。
〇学校の周りは見えにくい場所が多く、不審者がいそうな所がたくさんあることがわかった。
〇駐車場も、どんな人が車の中に潜んでいるかわからないので、気をつけないといけないことには驚いた。
〇コンビニも子ども１１０番になっており、安全な場所がたくさんあることがわかった。多くの人から見守られていると思った。
〇これからも、地域の人にしっかり挨拶をしていこうと思った。

Ⅳ　高校生地域防災ボランティアリーダー養成研修の報告

Ⅳ　高校生地域防災ボランティアリーダー養成研修の報告

１　目　的

東日本大震災を受け、高校生自身が、自らの身の安全は自ら守る「自助」の力と、自らの地域は皆で守る「共助」の精神を育むことは、地域の防災力にとっては重要なことである。また、災害発生時に備えて、高校生がいざというときの救援活動等に貢献できる実践力を身につけておくことも必要である。こうしたことから、防災に関する基本的な理解を深め、地域との連携を密にしながら、被災者の救援、物資の移送、食事の提供などさまざまな活動で社会貢献できる「高校生地域防災ボランティアリーダー」を育成する。

また、本事業は、平成２４年度から実施し、５年間で１，８００名の高校生ボランティアリーダーの養成を目標としている。

２　会場・日時

津山会場

日　時：平成２７年７月２９日（水）　９時３０分～１６時００分

会場校：岡山県立津山工業高等学校

岡山会場

日　時：平成２７年８月３日（月）　９時３０分～１６時００分

会場校：岡山県立岡山大安寺中等教育学校

倉敷会場

日　時：平成２７年８月５日（水）　９時３０分～１６時００分

会場校：岡山県立倉敷工業高等学校

３　参加者数

	津山会場	岡山会場	倉敷会場	計
参加校数 （うち中学校数）	８校	２２校	２１校 （１校）	５１校 （１校）
参加生徒数 （うち中学生数）	９５名	８５名	１４３名 （１５名）	３２３名 （１５名）

参加生徒数は、会場校スタッフとして働いた生徒数も含む。

4　実施プログラム

時間	内　　容		講師等
９：００～	受　付		
９：３０	開会式	挨拶・諸注意	
９：４０	体験発表	「高校生にできること」　～ＡＭＤＡ中学・高校生会の活動を通じて～	ＡＭＤＡ中学・高校生会
１０：２０	炊き出し準備	参加者全員で炊き出しの下準備	日本赤十字社岡山県支部
１１：００	実技講習 各コースに分かれて実施	Ａコース「地震・火災から守る」	【津山会場】: 津山圏域消防組合消防本部 【岡山会場】: 岡山市西消防署 【倉敷会場】: 倉敷消防署
		Ｂコース「救助活動」	日本赤十字社岡山県支部
		Ｃコース「災害時の活動」	【津山会場】: 陸上自衛隊日本原駐屯地 【岡山・倉敷会場】: 陸上自衛隊三軒屋駐屯地
１２：３０	昼食	災害時非常食を昼食とする	
１３：２０	演習	グループ演習・討議 「災害時に必要な行動や高校生にしかできない災害時支援について考える」	ＮＰＯ法人まちづくり推進機構岡山
１５：３０	閉会式	挨拶・代表生徒挨拶	

5　研修内容

（１）体験発表

東日本大震災等でボランティア活動を実践した高校生の体験発表などを聞くことで、「今、自分たちにできること」「将来、自分ができること」は何かを考えることねらいとした。

【ＡＭＤＡ中学・高校生会】

「高校生にできること」～ＡＭＤＡ中学・高校生会の活動を通じて～

アムダ中学・高校生会は、１９９５年の秋に発足したボランティアグループである。発表では、東北を訪れ被災した方たちとの交流を通じて、被災者の言葉や思い、求めていること等についてまとめ、中高生が自分たちにできることなどについて発表していただいた。

（倉敷会場）

（岡山会場）

（２）炊き出し準備

日本赤十字社岡山県支部スタッフの指導のもと、参加者全員で、炊き出し準備を実施。「ハイゼックス」という特殊な袋に１人分の無洗米と水を入れる作業。ハイゼックスをゴムで縛る際には袋の中に空気が入らないように（沸騰した際に膨張し、袋が破裂するため）することがポイント。引率教員らも作業を行ったり、参加者が互いに教え合ったりするなどの光景が見られた。

（津山会場）

（３）実技講習

参加生徒は、Ａ～Ｃの各コースに分かれて、体験活動や実践的な訓練等を学習した。

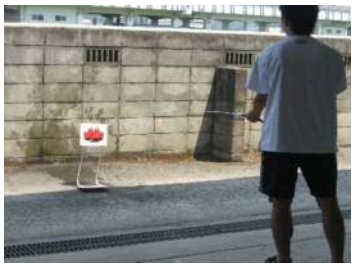
①Ａコース「地震・火災から守る」

各会場の管内消防署へ指導を依頼し、地震や火災、水害が発生したときの初期対応等について学んだ。津山・岡山会場では、グラウンドや中庭等で起震車による地震体験、消火訓練、土のう積み訓練。倉敷会場では、倉敷市消防防災センターにて火災、救急、地震災害など、さまざまな初期対応訓練を体験した。（上段：倉敷会場、下段：岡山会場）

地震体験

消火訓練

避難体験



消火訓練

土のう訓練

地震体験

②Ｂコース「救助活動」

日本赤十字社岡山県支部スタッフの指導のもと、担架や毛布等を利用した搬送訓練や、ハンカチ、三角巾等を活用した負傷者に対する応急処置法を学んだ。生徒は、事前に編成していたグループに分かれ、救助者と負傷者の役割を交代しながら学習。負傷者が動揺したり不安にならないよう、声かけをしたり安全に移動したりするポイントを学んだ。

大規模災害時には、高校生らが負傷者はもちろん、幼児や高齢者、障害者等を支援することが重要であることからこれらの技術を身につけることはもとより、互いに助け合う態度を身につけることができたようである。

応急手当（津山会場）

③Ｃコース「災害時の活動」

自衛隊岡山地方協力本部の指導のもと、災害時に必要な行動として、ロープワークや心肺蘇生法について学んだ。また、普段見ることができない救助器材を実際に見ることができ、さらに詳しく説明も聞いた。生徒は、災害が起きた時、必要な道具がそろっているとは限らず、道具が少ない状況でも、今あるものを使って救助等をする方法について学んだ。

救助器材の説明（津山会場）

ロープワーク（岡山会場）

（４）昼食

災害時の昼食として、ご飯、レトルトカレー、お茶をメニューとした。ハイゼックスの袋で炊いたご飯は、「こんなにおいしいとは思わなかった。」や「固かった。」など、生徒からさまざま感想が聞かれた。

災害時の食事を口にすることで、日常の食事のありがたさや、非常食の備えの重要性を感じていたようである。

（倉敷会場）

（５）グループ演習

「災害時に必要な行動や高校生にしかできない災害時支援について考える」

ＮＰＯ法人まちづくり推進機構岡山の徳田さん、山名さん、中村さんの指導により、各会場２教室に分かれグループ演習を実施した。

はじめに自己紹介や午前の実技講習の振り返り、災害への関心などのアンケート等をしながらグループ内のアイスブレイキングを行い、その後、演習を二つ行った。

一つめの演習は「クロスロード」です。参加者は、用紙に書かれた事例を自らの問題として考え、YES か NO かで自分の考えを示すとともに、参加者同士が意見交換を行いながら、ゲームを進めた。災害対応においては、必ずしも正解があるとは限らず、また、過去の事例が常に正解でないこともあるため、ゲームを通じそれぞれの災害対応の場面で、誰もが誠実に考え対応すること、また、そのためには災害が起こる前から考えておくことが重要であることを学んだ。

二つめは、「避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）」です。限られた時間内ではあったが、このゲームを通して災害時要援護者への配慮をしながら部屋割りを考え、また仮設トイレの配置などの生活空間の確保、生徒たちの想定していなかった出来事に対して、思いのままに意見を出しあったり、話し合ったりしながらゲーム感覚で避難所の運営を学んだ。

（岡山会場）

（倉敷会場）

（津山会場）

６　生徒感想文（一部のみ掲載）

高校生「地域防災ボランティアリーダー」養成研修に参加して

○　今回の研修で私が学んだことは、防災について事前に考えておくことの大切さと、災害が起こってしまった時に、その場の状況にあわせて臨機応変な行動が取れる力をつけておくことの重要性です。

私は普段あまり防災について考えていませんでした。しかし、AMDA 中学・高校生会の方々の発表を聴いていると、自分は全然防災に関して高校生にできることを考えていなくて情けないと思うと同時に、自分にもできることはあるはずであるからできることからやっていきたいと思う気持ちがありました。例えば、非常時のごはんの炊き方、消火器の使い方、土のうの積み方などは知っているのと知らないのとでは、災害時の対応が大きく変わってきます。今回の研修で、そのようなことを学べたことは非常に良い経験になりました。今後も、このことを忘れないようにし、またもっとたくさんの防災に関する知識を身につけていきたいと思いました。

もう一つの臨機応変な行動が取れるようになりたいというのは、グループ演習、特に HUG の時に強く思いました。HUG 自体ももちろん経験しておくことで、災害時に適切かつ迅速に行動できる手助けになると思いました。しかし、いざ災害が起った時に、果たして行動ができるかと思うと、私はなお不安に思いました。だからこそ、災害時のことをシミュレーションしておくと同時に、いつどのようなことが起きても、その場の状況に応じて臨機応変に対応できる力をつけていかないと災害は乗り越えられないと思いました。今回学んだことを生かし、ボランティアリーダーとなれるように努力していきたいと思います。

○　今回この研修に参加し、災害についての関心や防災への意識が高くなりました。岡山はもともと安全で、ほとんど災害もないところです。だから県民はほぼと言ってもよいほど災害時の対応の仕方を知らないと思います。現に私自身もこの研修を受けるまでほとんど知りませんでした。

まず非常食でα米は知っていましたが、いつも家で使っている米がナイロン袋に入れて食べられるようになるとは思いませんでした。いつも食べているものを食べるとその分安心感なども生まれていいのではないかと思います。

次に、私はＣグループで災害時の援助について自衛隊の方に指導をしていただきました。ロープワークや応急処置、救出用の機械について説明を受け、実際に機械を使って鉄骨を切断してみました。普通ではなかなか教えてもらえないことでしたが、このような特別なことを教えてもらって出来るようになった私たちが率先して災害時に手伝うべきだと思います。

そして研修会に参加する人が、特に岡山のような災害に関心の低い県でもっと増えればよいと思いました。もしもの時に動ける人が多いほど、被害は少なくなり、悲しむ人も減ると思いました。

○　今回私が、この高校生「地域防災ボランティアリーダー」養成研修に参加したのは、委員会から誰かが参加しなければいけなかったけど、誰も参加したがらなかったので自分が参加してみようと思ったからでした。だから最初は軽い気持ちで参加していました。しかし、AMDA 中高生会の発表や、日本赤十字の方の講習といろいろと貴重な体験をしたり、お話を聞いたりするうちに、だんだんと防災への意識が芽生え、もっといろんなことを学びたいと思うようになりました。非常食のカレーライスは、とても美味しかったです。

午後のグループ演習・討議では、学校も学年もまったく違う人たちがグループになっていました。みんな最初は緊張していて誰も話し出さなかったけど、たくさん話し合うときがあったので、わりとすぐうちとけて、とても充実した時間になりました。クロスロードでは、全員が

順番に意見を言うので、自分とは違う側の意見でも納得できるような意見が聞けて考えを深めることができました。HUG ではさまざまな問題を抱えた人への対処を考え、避難所を運営する側の大変さがよく分かりました。NPO の方の話で、岡山県の自主防災率が全国 42 位と聞いて驚きました。今回の研修をきっかけに地域の防災への意識を高めていきたいと思います。今回の研修でたくさんのことを学べました。参加して本当によかったです。ありがとうございました。

○　初めてこのような「地域防災ボランティア」というものに参加してみて、想像していたような防災ボランティアとは全く違い驚きました。

まず、AMDA という中学・高校生会があることさえも知りませんでした。また、その団体が災害時にどのような役割をしているのか、どのくらい被災者の方の力になっているのかを知ることができ良い機会となりました。

次に、参加者全員で行った昼食用の炊き出しでは、被災地では常に危険と隣り合わせのため、素早く確実に行うことが大切だと分かりました。

コースに分かれての「救助活動」では、包帯の巻き方など緊急時にそなえ、その場でどう判断すべきかを教えていただきました。

最後のグループ演習・討議では、その場で初めて出会った学校も学年も違う人達と意見交換をすることで今まで自分にはなかった考え方を知ることができました。とても有意義な時間を過ごすことができました。

今回の養成研修を通して地域に貢献できる地域防災ボランティアリーダーに近づくことができたと思います。

○　AMDA の方々の講演では、災害時に備えて家族と避難場所を確認しておく、防災グッズを作っておく、ということなど「高校生でもできること」について考えることができた。その中でも特に大切な、

（１）認識…現状の正しい知識を得る。
（２）意識…災害はいつ起こるかわからないという危機感を持つ。
（３）自覚…問題解決をするのは私たちである。

という三カ条を念頭に置いて行動していかなければならないと感じた。

実技講習では、川で溺れたときなどに身体やポールを固定するためのロープの結び方や、災害時に使用する救助道具体験など、実際に役立つ知識を教わった。

グループ討議では、災害時にどういう行動をとるべきかを、Yes と No にわかれて意見交換するクロスロードや、避難所（今回は小学校の体育館を想定）で避難者に体育館のどの場所にいてもらうかを避難者のそれぞれ抱えている事情に応じて配置するシミュレーションである HUG を行った。

まずクロスロードでは、災害時の行動の仕方や避難勧告について、またボランティア活動を行う際の注意点について知ることができた。

次に HUG では、体育館に通路が必要なこと、犬・猫などのペットは、アレルギーを持つ他の避難者に対して配慮するため、部屋を分ける必要があることなどを学ぶことができた。また、自家用車やテントで避難したい、といわれても体育館に入ってもらわなければならないこと、病気の人には病院に行ってもらうため、日頃から近所の住民の病気を確認しておくことが大切だということも学ぶことができた。

最後に、災害時やその支援について、このような状況下では答えがないからこそ、互いに意見を交換することが大事だということが分かった。災害知識とは命を守る上で非常に大切なものであり、これからの未来を担う私たちにとって最も大切なことのうちの一つであると強く感じた。

Ⅴ　被災地における防災ボランティア研修の報告

Ⅴ　被災地における防災ボランティア研修の報告

１　目　的

県内高等学校、中等教育学校の代表生徒が、東日本大震災における被災地を訪問し、災害ボランティア活動等を体験するとともに、震災遺構や現在の復旧・復興状況を実際に視たり、聞いたりすることを通じて、「自助・共助」について学び、被害を減らす方法や支援者としての関わり方等について考える。また、安全で安心な社会づくりに貢献する資質や能力を養う。

さらに、訪問後には、高校生地域防災ボランティアリーダーとして県内高等学校等において経験した内容等を伝えることで、県内高校生の防災に対する意識の高揚につなげる。

２　訪問期日・場所

平成２７年８月２６日（水）～２８日（金）　岩手県上閉伊郡大槌町、大船渡市、陸前高田市

３　訪問者

県内高等学校、中等教育学校から訪問を希望する学校（各校防災担当教職員等１名、代表生徒１名）、担当指導主事

代表生徒は、高校２年生以下の生徒とする。

※平成２７年度は、県立岡山東商業高等学校、県立総社高等学校、県立津山工業高等学校、県立備前緑陽高等学校から生徒、教職員を派遣した。

４　研修内容

８月２６日（水）

時間	内　　容
７：４０	岡山駅　新幹線改札口前集合
８：００	岡山駅発　－　東京駅　－　新花巻駅（１４：４１着）－　貸し切りバスで移動
１７：００～ １８：３０	大槌高等学校との交流会 ①　学校の説明 ②　大槌高校での復興の取組について ③　グループトーク（大槌高校生と岡山県高校生が２グループに分かれて実施）
	釜石市内宿泊

８月２７日（木）

時間	内　　容
１０：００～ １２：００	ボランティア活動 吉里吉里海岸清掃活動（岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里）
１２：００～ １３：００	貸し切りバスで移動 昼食
１３：００～ １４：００	新生おおつちの方からの講話 和野っこハウスにて
１４：００～ １６：３０	大槌町内の復興状況視察 ＡＭＤＡ職員による説明
	釜石市内宿泊

８月２８日（金）

時間	内　　容
９：３０～ １０：３０	大船渡中学校の校長先生からの講話 大船渡市立大船渡中学校にて
１０：３０～ １２：００	貸し切りバスで移動 陸前高田市内の復興状況視察 昼食
１４：４８	一ノ関駅発　－　仙台駅　－　東京駅　－　新大阪駅　－　岡山駅（２０：４５着） 新幹線待ち時間に解散式を実施
２０：５０	岡山駅　新幹線改札口にて解散

5　成果報告伝達について

９月末までに

・レポート提出

９月～１月中

・各学校において報告会を実施。時間、形式については、学校の実態に応じて開催。

２月

・岡山県実践的安全教育総合支援事業報告集に被災地派遣の写真、レポートを掲載。

翌年８月頃

・H28 高校生「地域防災ボランティアリーダー養成」研修会において、被災地における防災ボランティア研修の成果を発表予定。

６　被災地における防災ボランティア研修に参加して

＜参加生徒の感想＞

実際に被災地で観て、聞いて、体験して、あなたは何を感じましたか。

○　現地を訪れて私が一番に感じたことは、震災前に戻るには程遠いということ。それを感じたのは、大槌高校に向かっている道中だ。新幹線やバスの車窓に流れていた穏やかな田園風景は、沿岸部に近づくにつれて徐々に減っていき、かわりに更地や土盛り工事中の範囲が増えていった。土盛りの山を縫うように敷かれた仮設の道路。歪んだポールなど所々に残る被害の爪痕。家を建てようにも、町全体を高くする土盛り工事が完了しなければ建てられないそうだ。町のなかには新しく建てたような家屋も見られたが、土がむき出しになっている範囲の広さに、東日本大震災が与えた被害の甚大さを改めて感じさせられた。

大槌高校の生徒との交流では、当時小学生だった生徒から「何が起こっているのか分からなかった。」「校庭にいた自衛隊の人を見て、いつもと違う感じがしていた。」など、小学生ならではの目線で話してもらった。高校生たちの復興に向かう取り組みは数多く、町役場や地域の方と一緒になってやることに大きな意味があると思った。

２日目は海岸清掃と和野っこハウスにて新生おおつちの方の講話、町内視察と濃い内容だった。海岸清掃では吉里吉里海岸を歩き、ゴミを取り除く手伝いをした。当時のゴミはほとんど残っていないが、カーテンレール付きのカーテンやおもちゃなど生活感を感じるものを見つけたとき、胸がざわついた。

海岸付近にはまだ手付かずの道路も残っていた。講話会場の和野っこハウス隣りには仮設住宅が並び、そこには今でも約 500 世帯が住んでいるという。ハウスには年配の方が集い、憩いの場となっていた。新生おおつちの方の講話では、大人の目線で経験した震災を話してもらった。２人のボランティアに関する話に強く心に残った言葉がある。

男性「ボランティアに来てくれることはもちろん嬉しい。抱き合ってくれる人もいる。でも、それは一時だけの温もりで、身内や知人を亡くした喪失感が消えることはない。」

女性「仮設住宅を回っているとき、こんな話を聞いた。ボランティアの方が仮設の住民と仲良くなり、ただでさえ狭い部屋に宿泊し、ご飯も住民が準備する。帰り際には手土産まで持たせてあげる。これはボランティアではないよね？」

この話が意味する言葉は「責任・自覚」だと思う。ボランティアは「してあげる」ものではなく、「させてもらうもの」という自覚を持った行動がボランティア側にも必要だと思った。

町内視察では、城山公園から見下ろした景色が忘れられない。城山公園は山の上に位置し、多くの人が避難してきたという。１日目からずっと見てきた更地、高い位置から眺めると見える範囲の８割以上が土盛りだ。公園には震災前の写真が設置されていたが、沿岸も形が変わっていたため、どこの写真なのか判別が難しいほどだった。

釜石東中学校（当時）とその周辺から石材店までバスで通った。中学生が小学生の手を引き一緒に避難した経路は坂になっており、日頃の訓練の成果が現れたものだと思う。

３日目は大船渡中学校校長先生の講話と、奇跡の一本松を見る日程だった。大船渡中学校のグラウンドには、今でも仮設住宅が並んでいる。半分は空き部屋らしいが、校庭から通う生徒も数人いるという。仮設住宅が建ってから、グラウンドで活動していた部活動は中庭や駐車場を利用している。講話で校長先生が言った「自分を支えてくれている人がいる。そんなあたりまえを守るためにも、一人一人が絶対生き抜くっていう気持ちを持たないといけない。それが自助で有り、共助にも繋がる。」これは今回の目的にもなっていた「自助・共助」を学ぶ基本となる言葉だと思った。校長先生が力をもらったという動画。日本全国から寄せられた言葉を集めたその動画は学校の報告会で必ず放映しようと思った。

奇跡の一本松では、ベルトコンベアを使った土盛り工事の規模に圧倒された。震災前、松原があった位置にその影はなく、一本だけ残った松。枯死と診断されたがその姿を復興のシンボルとして残そうと、工事を進めた。現在はモニュメントとして設置されている。陸前高田をはじめ堤防を１４メートルほどに高くする計画がされているということで、近隣住民からは松原のような景観が失われるのではという声もきかれているという。

２日目にお世話になったＡＭＤＡの方に、話を伺った。県外の方に伝えたいことは、「災害は、いつ・どこの・だれに起きてもおかしくない。３．１１を風化させるのではなく、教訓として覚えておいてほしい」ということ。被災された方々は一歩一歩復興に向けて進んでいる。「教訓にしてほしい」というのは、交流した方、話を聞いた方全員の思いだと思う。

○　現在の復興状況を見たとき鳥肌が立った。震災から４年前、僕は小学６年生。当時多くのテレビで、震災の状況を目にしていた。過去と比べ、がれきは片付いているものまだ多くの生々しい被災当時の面影が残っていた。特に海岸の防波堤が傾いている場所は、印象的だった。「ここまで高くそして強い波が、多くの人の生活を奪うのか」と思った。

初日、大槌高校生の僕と同じ一年生に「震災後防災についての意識はどのように変化したか。」と尋ねたところ、「大切な人が死ぬと思って生活するのが一番」といった。同じ年齢ということもあり、僕には強い衝撃的な言葉だった。また地域によって復興状況が違うことそして震災を忘れようとする動きがあることに驚いた。グールプトークでは、以前から考えていた‘方言クイズ’で楽しく会話できた。やっぱり高校生どこへ行っても変わらないなと思った。新生おおつち会の方々の話と重なるところもあった。中島さんのお話では、ボランティアの本当の意味を学んだ。「ボランティアとは無償でやること？しかたなくやること？」この言葉を考えると今まで見返りのために、そして自分のためにしてきたのかもしれない。結論、僕は相手の気持ちなんて考えていなかった。最終日には今でなお考えさせられる問を金先生からいただいた。「自助した方より共助した方のほうが多く亡くなった。“自助・共助とは？”まだ奥には、答えが見つけられそうにはない。

今回の研修はとても短く今では一瞬の出来事のように感じられる。しかし学べたことはとても多く、なかなか処理できない。自分の夢は、自衛官になること。その夢の一歩にもなったと思う。

○　被災地に実際に行ってみて、やはり復興はまだまだ進んでいないように見えたけれど、仮設の商店街などがあり復興に向けて少しずつ歩んでいるのだと感じました。

初日に大槌高校に行ってみて、一部の学校では震災のことは忘れようという考えの高校もあるとおっしゃっていました。そんな考えの学校がある中で、大槌高校は復興に向け頑張ろうと考え、地域のためになにができるだろうと常に考え頑張っているそうです。

２日目にはあいにくの雨で、予定していた畑作業ではなく海岸の掃除でした。震災から４年と少し経ったといっても未だに海岸にはビニールや缶などが流れつき落ちていて、まだまだ海岸がきれいになるには時間がかかりそうです。

このボランティアに参加して思ったことは、バスからふと街をみたときにガイドの方がほとんどの土地へ盛り土をすると言っていて復興には時間がかかりそうだなと思いました。しかし色んな方の話を聞いていると被災し家族や家をなくした人々でもみんな前を向いていて本当にすごいなと思いました。

○　最初にこの岩手に行くことが決まってから、ほんとに自分が代表して行くのかと実感がわきませんでした。しかし、岡山駅でインタビューをされてから気持ちが変わりました。

初日はほとんどが移動で、２時間しか行動しませんでしたが、その２時間がとても濃い時間でした。僕がその２時間で学んだことは、ネットなどには書かれていない事ばかり、実際の被災者の言葉はとてもリアルです。その日は２時間のみだったが、次の日に１日、今日みたいなことが学べると思うととても興味が湧きました。

２日目、３日目では、中学校の校長先生から聞いた話がとても印象に残っています。地震がおきて体育館でおにぎりを分け合った味、火事で夜は体育館の窓が赤くなり汗をかいて昼はとても凍えるように寒かった事、亡くなった人達の中には、ほかの人のために亡くなった人が多い事、高校生や中学生など若い人たちのおかげで本当に助かった事など。刺激的な事が多すぎて一つ一つきりがないほどの感想があります。

今回の経験を活かして、岡山県であなたができることは何ですか。

○　今回の目的を考えたとき、「伝える」ことが自分たちの使命だと思う。私が思う必ず伝えなければいけないことは、「自助・共助」「風化させない・教訓に」の２点だと思う。「共助の気持ちで人の手を引いている間に亡くなった。」そうなれば、残された家族は、喪失感に押しつぶされそうになりながら生活する。「自助の気持ちで逃げ遅れた人を無視し、その方は亡くなった。」そうなれば、無視したことを悔やみ続け生活する。自助と共助、どちらが正しいという正解は無いと思う。しかし、その場面になったとき、自分ならどうするかを考えるだけで変わってくると思う。

岡山県から私達（高校生）が出来ることは限られている。被災地に影響を与えようと思うのではなく、「風化させないようにする」「教訓として身につける」ことが岡山県民の防災意識向上に繋がると思う。

岡山県は災害が少ないと言われていても、絶対にないとは言い切れないので常日頃から考え、いつ災害がおこっても大丈夫なように家に帰って家族と話し合い、避難場所を決めておいたり、対策が必要です。自分達１人１人の意識で少しでも災害にあったときの被害に差が出ると思うので、学校で行われる年２回の避難訓練でも、これは本当に起こったことだと思って訓練することが大切だと、まずは周りの友達から伝えていきたいです。

○　研修の目的である“「自助・共助」について考え経験した内容を伝えること”を基本として多くの岡山県の方々に防災について考えてもらえるよう努力していく。まず、僕の学校では文化祭があるので校内展示し生徒また一般の方々に情報を発信する。

今回の研修では、地震・津波の災害について多くのことを学んだ。応用して岡山の防災についてキーワードを考えた。台風・異常気象・土砂崩れなどがあげられる。これらのテーマから岡山の防災意識を変えていければと思う。加えて被災者の方々の支援をしていく。

○　岡山県は災害が少ないと言われていても、絶対にないとは言い切れないので常日頃から考え、いつ災害がおこっても大丈夫なように家に帰って家族と話し合い、避難場所を決めておいたり対策を練っておくことが必要です。

自分達１人１人の意識で少しでも災害にあったときの被害に差が出ると思うので、学校で行われる年２回の避難訓練でも、これは本当に起こったことだと思って訓練することが大切だと、まずは周りの友達から伝えていきたいです。

○　この夏岩手に行ってきて自分は生き方が変わりました。普通という事がどれでけ幸せなことか、その中に大きな幸せがあります。１日１日を何となく過ごすのはとてももったいない。僕は今までの自分を振り返り、これからもある１日を濃く生きようと思いました。そして今あたりまえに生活できていることはとても大きな幸せです。今を大切に。

＜参加教職員の感想＞

○　東日本大震災から四年が経ち、これまで私は東北へ二回訪れました。一度目は、震災から一年後、宮城県女川町周辺を訪問しました。がれきが山のように積まれ、全く復興の目途がたっていない程の状況を目の当たりにしました。二度目は、震災から二年後、仙台市内へ訪問しました。津波の影響が少なかった内陸に旧友がいたため、そちらへ赴き、今の生活について話を聞きました。その友人は、震災前の日常に戻りつつあるものの、家の壁は崩れ、床が傾いているため小さなストレスを感じるなどの話をしてくれました。

今回、三度目の訪問の機会をいただきました。町の風景や、学校生活、ボランティアの方々の活動など様々な復興の様子について知ることができました。

まず町の風景は、一度目に訪れた風景とは違い、人の手によってかなり整備されつつあるという印象でした。復興計画により、町全体を盛り土によって高くするため、工事車両が常に行き来し騒音も激しく、落ち着かない感じがしました。また、仮設住宅が未だいたるところに点在しており、四年を経て今なお、住居が安定していないことに寂しさを感じました。

また、岡山県の高校生と大槌高校生との交流では、同年代から震災当時の話や現在の学校生活、復興のための活動などの話を聞くことができ、大変貴重な時間だったと思います。

現在の高校生は、震災時は小学生だったようですが、当時は自分の身に何が起こっているのかよくわからず、避難所でも友人がたくさんいて遊んでいた。などという意外な声を聞き、一人一人の震災への感じ方も違うということを改めて知ることが出来ました。

また、「新生おおつち」や「和野っこハウス」の方、また、大船渡中学校の校長先生の貴重なお話も聞くことができました。この話の中で共通して印象に残ったことは、震災当時の話をはじめた時の表情でした。これらの方々は、町の復興に向けて、日々様々な活動をしておられます。今回、我々にも現在の活動の様子をとても前向きに話して下さいましたが、震災時の様子を話し始めたとたん、表情が険しくなりました。家族、親戚、友人、近隣の方などの死に直面し、心の傷は癒えることがない事を知りました。

今回２泊３日の研修に参加し、多くの方々の話を聞いたり、ボランティア活動もしたりしました。その中で私が一番感じたことは、「被災者はいつも『死』と向かい合って日常を送っている。」ということでした。私たちは日常、そのような事を意識しながら生活していることは少ないと思います。家族や友人、隣人が「明日死ぬかもしれない」と思いながら生活はしていないだろうと思います。しかし、被災した方々は少なからずそれらと向かい合って生きているのです。

大災害が少ないと言われている岡山であっても、事件や事故、災害は、身近にあります。「明日何が起こるか誰にもわからない」からこそ、災害への備え、家族や友人、地域の方々への感謝を忘れてはならないと思います。

今回の研修で見たこと、聞いたこと、感じたことを今後、様々な機会にしっかり伝えたいと思います。

○　東日本大震災の被災地である岩手県の大槌町・釜石市・大船渡市を訪れた。８月２６日から２泊３日の日程で、県内の高校生４名と指導者５名が防災への取組がどのように行われているのかを学ぶとともに、現在、急ピッチで復興が進められている被災地の姿を見てきた。

最初に訪問した大槌高校では、震災直後に1、000名以上の人が校舎で避難所として生活していた時、生徒や教職員が炊き出し、物資運搬、トイレの水汲みなどの「共助」の活動を率先して行ったこと、また、町内唯一の高校として、地域の復興を支援する活動に積極的に取り組んでいること聞き、今後も大槌町を背負っていくのだという前向きで未来志向の意気込みを感じることができた。

仮設住宅内に設置された交流スペースでは、生活支援員の方から、自身が津波から間一髪で逃れた話や、入居者は順次仮設住宅から出て行くが職場がなく、若者の人口流出に歯止めがかからないこと、また高齢者のケアは、深刻な課題として、継続的な見守り・支えが必要だということを伺った。

その後、各地の被災地を視察したが、壊滅的な被害を受けた街は、まだまだ復興とは程遠い状況で、震災直後のがれきはきれいに撤去されているものの、広大なさら地が広がっているところや、やっと都市計画が決まり、５ｍ～１０ｍの土盛りをし、街ごとその上に復活させようとしているところもあった。大槌町では、ちょうど２７日が震災直後から町長を務められた碇川氏の退任の日だった。地元の新聞には「４年間だったが、何期も町長を務めた気がする。よく頑張れたものだ」という町長のコメントが載っていた。

ボランティア活動として、砂浜での清掃活動を行った。大きながれきは取り除かれているが、缶やビニール袋などのごみはまだまだ海岸に流れ着くようだ。また、過去にはきれいな海水浴場だった場所も、砂が流出してしまっている所も多いそうだ。震災を風化させないためにも、今後も、末永いボランティア支援が必要だと感じた。

大船渡中学校の金賢治校長からは、震災直後から陸前高田市の教育長として学校の再開、復興に不眠不休で取り組まれたお話を聞き、学校を管理し、生徒の命を預かる責任者としての使命や困難を乗り越えた者だけが語れる確かな理念、確信に満ちた言葉を聞くことができ、大変感銘を受けた。金校長自身も自宅を津波に跡形なく流され、避難所生活経験し、現在もアパート生活を余儀なくされているそうだ。しかし、そのような中にあっても、金校長からは多くの人への感謝と未来に向かう前向きな言葉しか出てこなかった。大きな困難があるほど、人としてどう生きるか、そして生徒や周りの人たちをどう支えるかを真正面から考え行動する姿は教育に携わる者の鑑といえる。「自助」「共助」をどう解釈し、何があっても命を守ることを優先することの大切さを強調されていた。また、「津波てんでんこ」に代表されるように、命を守るための原理・原則である「すぐに逃げる」「大丈夫という油断をしない」そして、大人や教師は生徒に見てもらえるに値する背中を見せることであると結ばれた。さらに、サプライズがあり、金校長自身の作詞作曲による歌を披露していただき、心から絞り出すようにしてつくった曲に自然と涙が頬を伝った。

是非、多くの皆さんに聴いていただきたいと思う。

自然の脅威の前では人は無力でしかなく、災害は予想をはるかに超える場合もある。さまざまな人からお話を聞いたが、我々が聞きたかった防災教育や具体的な防災訓練について、それを絶対的なものとは語られなかったように感じた。「釜石の奇跡」は事実でありその大切さを示している。決して教育や訓練の重要性を否定するものではないが、防災に特効薬はなく、ごく一般的なことをいかに意識して行動に移せるようにするか、地道で真剣な取り組みを継続することしか道はないことを表しているのだと感じた。そして、ひとたび甚大な被害を受けた時、助け合わなければいけないこと、あくまで前向きな行動力が求められること、人はどれだけ強くなれるのかを学ばせていただいた。

終わりに、このような貴重な機会を与えていただくとともに、お世話になりました関係の皆様に深く感謝申し上げたい。

○　私は、今まで何も知らず、知ろうとしていなかった事に今回の３日間の研修を通して気付かされました。

一番初めに驚いたのは大槌高校に向かうバスの窓から見ていた、ここに本当に栄えた町並みがあったのかと思ってしまうような何もない土地や、未だにたくさんある仮設住宅です。他にも研修を進めていく中で、当時避難所となっていた学校でのお話、現地で行ってきたボランティア活動、仮設商店街、アムダの方による当時や現在の状況説明を聞いたりしてみて、改めて４年の歳月を経ても残る災害の爪痕に本当に驚きました。

現地で実際に行った活動は、海岸にあるゴミをみんなで拾って歩くというものでしたが、清掃活動を行いながらアムダの方にお話を聞いていると、未だにロープや車のナンバープレートなど震災当時のものがあがってくることがあると聞いて驚きました。他にも沿岸にあるぐにゃぐにゃに曲がってしまったガードレールや、へし曲がった街頭などは当時のままのようで津波の力強さを改めて実感しました。

和野っこハウスでの女性のお話もとても印象に焼き付いています。家族が心配で家に戻ってしまったことによって命の危機にあったという話を聞いて、家族がバラバラになったときの連絡の手段も考えたことがなかったなと自分自身の事を思いました。心のどこかで、自然災害を他人事に思っていたことに気付きました。

今までの岡山県は、私の知る限り自然災害による被害が他県に比べて少ないからか、研修中も何度も言われていたように県民性として防災意識が低いと思います。しかし、誰もが被災者になりうる可能性があります。私に何ができるのかまだ分かりませんが、この貴重な経験を関わってくださった多くの方々、支援してくださった方々、東北の方々、未来の災害から救われるべき人々のためにできる限り伝え続けていきたいです。そして、学校という現場で働いていることを上手く活用し、一人でも多くの生徒たちに生き抜く力を身に付けさせたいと思いました。

この度は貴重な研修に参加させていただき本当にありがとうございました。

○　今回、初めて被災地に行かせていただけるという機会を与えていただいて本当に感謝しています。最初に被災地に行ってみて、あのような震災があったにもかかわらず、今を懸命に生きている姿に胸を打たれました。わたしたちがいろいろとテレビなどで聞いたり、映像を見たりする以上に、悲しく辛い体験をみなさんが経験しているのにもかかわらず、生かされた命を大切にするという心を随所に感じることができました。このボランティアに行く前は、ボランティアという形ではあるけれども、被災県に行くということが現地の方々にとっては、必ずしもいい意味を持たないのではないか。というようなことも考えていましたが、２日目に和野っこハウスでお二人の話を聞いて、「ボランティアに来てくださることを聞くと、こっちにもがんばるぞ！という刺激になりありがたい。」と言ってもらえたことですべてが吹き飛んだような気がしました。生徒たちにとっても大変に有意義な研修になったのではないかと感じています。

大船渡中学で、金校長先生が「とにかく死なないこと！」残された遺族の身になれば、絶対に誰も死んではいけない。実体験をもとに率直に感じられたことをお聞きして、何通りもの悲しみ方があるということ、命の尊さを感じられたことが１番の良い点になりました。

また、２日目にAMDAの大久保さんに大槌町内を案内していただいている時に、最後に「大槌に残りたいけど、雇用がない、子育て環境がない。」という切実な想いを聞いて、まだまだ震災の爪跡は深いということをあらためて感じました。

私たちの力ではなんともならないようなこともたくさんありますが、この体験を伝え、命のありがたみを感じるということが大切になってくるのだと想います。金先生が、周りの人たちに本当に助けられたと言われていましたが、自助、共助のバランスを大切にしながら、懸命に生きていかなければいけないことを学ぶことができました。